

遇ひ彼に連れられて金華山の岩窟の中に至り、其處に四十餘年間留て居た。此處に又彼の兄に黃初起といふものが居て、弟の行衛を諸々方々と尋ねたけれど、如何しても彼を探し當てることが出来なかつたが、或日道士の善十といふものに逢ひ、金華山に羊を牧して居る一人の小兒が居るといふことを聞て、其處へ尋ねて行て見ると、それは果して弟の初平であつた。其處で彼は弟に羊は何處に居るかと尋ねると、初平は山の東麓に居ると答へたので、共に一所に其處へ往つて見たが、羊と思ふやうなものは一つも居ない、唯白い石が其處にも此處にもゴロ／＼と轉がつて居る許りだ。其時初平は手に鞭を持って、件の石の側に進みより、一つ／＼聲を懸けて起すと、不思議や件の石は皆起き上りて白い羊となり、其數は幾千萬であるか數へることが出来なかつた。

其後兄の初起も亦妻子をすて、仙術を學び、終に仙人となつたが、弟の初平は赤松子と稱し、兄の初起は魯班と號し、宋元の兩朝に各封號を贈られて永く祠られて、あつた。

蘭公

蘭公は曲阜の人で、親孝行を以て其名が世に聞えて居た。或日斗中真人其家に下り來り、自ら孝悌王諱は弘康といふものであるとを名乗り、そして金丹寶經、銅符、鐵券を蘭公に授け、更に之れを又丹陽郡の黃堂に居る靖女眞、龍母に傳へて呉れるとを願ひ、尙ほ後晉の世に許遜と名乗る一人の眞仙が生れて、自分の孝道を天下に傳へ、衆の仙人の長と爲るであらうから、其者に遇ふた時は亦此法を傳へてくれと頼み、それから蘭公を伴ひて野原へ出で、道の傍に三の古塚があるのを指して、是こそ汝が三度轉生し、三度解化した迹である。先づ第一番目の塚には其昔汝が仙化した時脱ぎすてた故衣が入つて居る。第二番目の塚は太陰の氣が此中に潜んで居て、人間が初めて生るゝ時の形を煉り上げる處である。今は其形も漸う出來上つて居る。第三番目の塚には汝が尸解した時の蛻骨が藏されてある。此處は道路の傍で、人に多く踐まるゝから、此路をもつと塚から離れて居る處へ移した方がよいと語り了ると、孝悌王の姿は其儘消えて了つた。

是に於て蘭公は彼から授けられた金丹等を眞龍母に遣し、塚の傍の通路を他の場所へ移した。然るに此處に或人があつて、彼のことを妖言を以て人を惑すものであると縣令に訟へたので、彼は忽地召捕らはれた。其時蘭公は精しく眞

人から聞たことを縣令に話すと、縣令は容易に其言葉を信ぜず、人を遣して件の塚を掘て中を檢べさせた。果して彼が言葉に違はず、第一の塚には黄衣一領が藏められてあり、第二の塚には一人の孩兒が居て、今やうく眼を開いた許の容態であつた。次に第三の塚を見ると、一組の人間の骨があつて、原の形を少しも壞さずに存して居る。之れを見て、流石の縣令も大に驚嘆し、厚く疎忽の罪を謝して、件の黄衣を蘭公に還し與へた。

其時蘭公は件の黄衣を身に纏へ付けると、彼が身體は忽ち彼の孩兒の身體と合して一體になり、其儘身を翻すと見る間に、彼の身體は空中遙かに飛上つて、雲にかくれて其姿が見えなくなつて了つた。

費長房

費長房は汝南の人で、市長の役を勤めて居た。或時市中に一人の老翁が在て藥を賣て居たが、夜は店に釣してある一箇の壺の中へ入て寝るのであつた。然し市中の人は誰一人としてこれを知て居るものはなかつたが、唯長房一人は或日樓上から之れを見て、早くも彼老翁の普通人でないことを悟り、或日老翁の處へ往いて酒肴を振舞つた。そして其翌日も亦酒肴を携へて彼老翁の許を訪づれると、老翁は彼を連れて一所に件の壺の中へ入つたが、中には美麗な殿堂が幾つも在て、美酒佳肴堆高く陳べられて居る。其處で二人は飽くまで飲み、飽くまで食ひ、頓て其中から這出たが、其時老翁は長房に向て此事を決して他人に告げてはならぬと、吳々も戒めた。

其後件の老翁は一日長房の許に尋ねて來て、今日迄秘して居たが、實は自分は天上の仙人である、或過失によつて暫時仙界を退出されて此處に隠れて居たのであるが、今漸う其罪も許され、愈々仙界へ歸ることに



なつた。就ては足下も一所に伴れ立て行く心が無いかと尋ね、次に今夕二人で悠
 焉飲まうと思つて、階下に少許の酒を用意して来たを告げた。其處で長房は
 人を階下へ遣して件の酒を持ち来らしめた。其時老翁が持て来たといふ酒壺
 は僅かに一升程も入らうかと思はるゝ小さい器物であつたが、扱て重くて却々
 一人では持上げられぬ。其處で十人許の男がかゝつて之れを扛たけしめたけれ
 ど、それでも猶ほ出来なかつた。其時件の老翁は之れを見て笑ひながら階上か
 ら下りて来て、一本の指で件の酒器を軽々と引下げながら、復た階上へ上つた。
 酒は僅かに一升程であつたけれど、幾何飲んでもくゞ盡きると云ふことはなく、
 終夜二人で遂に飲み盡すことが出来なかつた。

長房は實際心の中では仙道を學び度いとは思つて居たが、左様なれば後に残
 る妻子共が困るだらうと思つたので、老翁に行くことを承諾しなかつたが、老翁
 は早くも其心を悟り、一本の青竹をとつて来て、恰度長房の身長位に切り、それを
 長房の家の後の木の枝に懸けしめた。然るにそれが家人の目には全く長房と
 見えたので、家人は長房が殺死したものと思ひ、大に嘆き悲んで厚く之れを葬つ
 た。其時長房は常に其側に立て居たけれど、家人の目には彼の姿は見えなかつ

たさうである。

其處で彼は件の老翁に従て深山に入り、或日の如きは數多の猛虎の群の中に
 一人残し置かれたけれど、彼は少しも恐るゝ氣色はなかつた。すると又老翁は
 或日室の中に萬斤もあらうかと思はるゝ大石を朽ちた索で縛て之れを天井か
 ら釣下げ、其下に彼を寝させた。その時數多の蛇が何處からとも現はれて来て
 件の索を齧み切らうとするのを彼は見て居たけれど、彼は少しも其坐を動かさ
 かつた。老翁之れを見て、次に腕に人糞を堆高く盛て之れを長房に勧めた。其
 中には三疋の蟲が蠢動して居て、見るから胸が悪くなりさうなので、是れには流
 石の長房も膽をつぶして暫時躊躇した。老翁は之れを見ていふやう、扱て汝は
 幾んど仙道を得ることが出来やうが、唯此れを我慢して食べられぬやうでは未
 だ充分の處までは行き得まいと。之れを聞て長房も最早斷念して暇を乞ひ、愈
 辭して歸らうとしたとき、老翁は一本の竹杖を與へ、之れに騎て行けば瞬間に到
 着することが出来る、若し家に着いたら此杖を葛陵の中へ投げすてゝ、呉れと告
 げ、更に一枚の符を齎して、之れを持て居れば、地上の鬼神共を自由に制御するこ
 とが出来ると言て、それを彼に與へた。其處で長房は件の竹杖に乗て山を

下ると、瞬く間に彼の家へ到着した。彼初め家に歸る時僅かに十日位經て居たことだらうと思つたが、扱て家へ歸て来て見れば、已に十餘年も經て居たので、少からず吃驚した。其處で老翁のいふ通り、件の竹杖を葛陂の中に投げすて、密と後を振回て見ると、彼の竹杖と思つたのは即ち一頭の龍であつた。

家人共は長房を見て大に驚き、怪み、直くには彼の言葉を信じなかつたが、長房が細々と一伍四什を物語つたので、先に葬つたものは全く長房でなくて、唯一本の竹杖であつた事が明瞭になり、家人共も始めて彼の無事息災であつた事を非常に喜んだ。其後長房は老翁から授けられた符によつて種々の病を療すことが出来たのみならず、目に見えぬ鬼神共をも自在に驅使することが出来た。曾て斯ういふともあつた。一日彼一人座敷の真中に坐て居て頻りに目を瞑らし、罵て居るので、傍に居た人々が何を其様に怒て居るのかと尋ねると、彼は自分は今法を犯した惡鬼を叱て居るのであると答へた。又一日の間に彼は數千里の處を往來することは珍らしくもなかつたが、或時彼の許に珍らしい客があつたので、人を遣して隣國の宋から酢を買ひ求めしめると、それが少許の間に歸て來た。彼は亦縮地の術に達して居たことによつて有名である。縮地の術とは

地脈を縮めるの術で、一時千里の遠い所でも直ぐ目の前にあるやうに見えしめるのである。

或日長房は弟子の桓景といふものに、此九月九日には汝の家に大變な災が起るから、豫め絳囊（あまのふくろ）を作つて、其中に茱萸（あまのふくろ）を一杯詰め、それを臂の上にかけて高い山に登り、菊花をひたした酒を飲めば、其禍を免れることが出来る（と告げた）。て桓景は其日になると、一家族を伴ひて山に登り、菊花の酒をのみ、其夕方家へ歸て來て見ると、家に畜て居た牛羊から鶏犬の類まで悉く皆變死して居た。

長房は其後フトした事から老翁から授けられた彼の仙符を失ふた爲め、終に惡鬼共の爲めに撃ち殺されたといふことである。

嚴青

嚴青（清一本ある）は會稽の人である。家は極めて貧乏であつたので、山に上りて炭を焼くのを職業として居た。ところが或日一人の神人に遇ひ、一卷の仙書を授けられた。その時件の神人は、汝を觀るに長生する骨相があるといつて、石の髓を服するの法を教へて呉れた。其後嚴青の身邊には常に數十人の神兵が附

て居て人間の眼には見えなけれど、寝るにも起るにも決して彼の傍を離れなかつた。

或夜彼は所用があつて獨り道を歩いて居ると、フトした事から都巡と口論し、果ては互に腕力に訴ふる事になつた。其時都巡は數多の兵をつれて嚴青を捕へんとしたが、嚴青は彼等には深くも關係せず、禁縛の法を行ひて其身は其場から静々と吾家へ引取つた。然るに一方の都巡等は其處に立つた儘翌朝迄身動きが出来なかつたが、其中郷人共之れを聞きつけて、早速嚴青の許に行て懇々と罪を詫びたので、始めて彼等の身が自由になることを得た。

其後嚴青は三年許り殺を斷て居たが、暫時すると何處へか去て了つて其行方が分らなくなつた。

藍采和

藍采和は何處の人であるか詳かでない、常に破れた衣を着て居て、帶の廣さ三寸餘、それに黒柿で造つた六箇の鐙ウツカを着けて居た。而して一方の脚には靴を穿き、一方の脚は跣足の儘で何處へでも出掛けて居たが、夏の暑い時に緊ヒツを入れた衣

を着、冬の寒い時に雪の中に寝て居て、それで盛んに汗を掻いて居た。そして平生市に出て人々に食を乞ふて居たが、手には長さ三尺餘の大拍子木を持って、酒に酔ふと歌ひながら跳踊るので、老人となく若者となく、彼が後には常に數十人の見物が附隨して居た。それで彼は狂人かと思へば狂人でもなく、歌なども咄嗟の間で作るが、各れも皆神仙の意を寓したものであつた。而して人若し彼に錢を與ふるものがあれば、繩に其錢を通して路の上を曳き磨りまはし、錢が繩を離れて其邊に落ち散ても別に氣にも留めなかつた。或時には又其錢を貧乏人に頒ち與へ、或は平常出入して居る酒家へ贈て遣ることもあつた。彼はかやうにして廣く處々方々を彷徨へ歩くので、天下の人々彼の名を知らぬものは一人もなく、兒童の時から彼を見知て居たものが、最早五六十の老坂に差しかゝつて居るのに、獨り彼のみは相變らず昔のやうに、顔が艶かて少しも年老つた容態は見えなかつた。

或日彼は或深端の酒屋で酒を飲んで居たが、其時笙簫の聲が何處からともなく起て來ると、彼は忽地一羽の鶴にのつて昇天して了つた。其時彼は靴、衫、帶、拍子木等を天上から投げ下したが、愈彼の姿が雲の中へ消えて無くなると同時に、

此等の品物も亦忽ち何處へか消え失せて了つたさうである。

沈建

沈建は丹陽の人である。仙道を得て醫術を能くして居たが、或年主人の許を辭して遠方へ旅行することあつた。其時、伴れて居た奴婢や騾羊を悉く主人の許へ返して遣し、そして各に藥一粒づゝ與へ、之れを飲めば飲食する必要がないといつたので、主人は試みに彼の奴僕や騾羊に食物を供して見たけれど、矢張り彼等は少しも其等の物を食べる容子がなかつた。

其後三年許經つと、沈建は再び彼の主人の處へ歸つて來て、再び彼の奴婢や騾羊に藥を與へると、其後飲食することが舊の通りになつたさうである。其後良久經つと、沈建は再び主人の處を辭して何處へか立去つたが、彼は遂に復び歸て來なかつた。

耆域

耆域は天竺の人で、神通極めて廣大であつた。平常夷狄の國々や中國の各地

方を周遊し歩いて居た。晉の武帝の時、襄陽に至て船で揚子江を渡らんとすると、船人共は彼の衣服の餘りに粗陋なるを見て、船に載することを拒み、彼一人を岸に残して自分等のみ河を渡つたが、扱て船が愈、彼方の岸に到着して見ると、耆域は何時の間にか江を渡り向岸に着て居る。

其れから彼は其處を去て五六里行くと、忽ち途に二頭の虎に遇つた。其時彼は手を伸べて其頭を摩て、やると、件の虎は俄かに耳を垂れて彼方へ立去て了つた。又或日の朝、某處で數多の見送人に送られて出立することがあつたが、其時彼は徐々と行く様子であつたけれど、見送の人々は幾ら脚を急がしても、遂追ひつくことが出來なかつた。處が其日の夕方會、長安から歸て來た人があつて、其人は彼方で耆域に遇つたといふことだ。又商人の胡濕といふ男も、此日矢張り流沙河の邊りて耆域に遇つたといふことである。そして今長安と流沙の距離は幾何程あるかといへば、大凡そ九千里餘であるといふ。

王質

王質は晉の衢州の人である。山に入て木を伐ることを職業として居たが、或

日石室山に上てフト一の石室を發見した。そして其中に數人の童子が居て、棋を圍んで居たが、王質が側に立て、それを觀て居ると、童子共は棗の實のやうな物を彼に與へた。而して若しそれを口の中に含んで、其汁を吸ふて居れば、幾日經ても少しも飢渴を感じないといふことであつた。

須臾すると、一人の童子が王質を顧みて、汝が此處へ來てから大分久しくなるが、何時まで此處に居る積りであるか、早く家へ歸つたらよからうといつたので、王質はフト氣が付いて、傍に置いた斧を見て驚いた。其柄は何時の間にか朽ち果て、斧の刃は眞赤に錆て居た。而して家へ歸て見れば、已に最早數百年を經過して居て、親戚の者で猶ほ存じて居るものは殆んど無かつた。

其後彼は再び山に上て、遂に仙道を得たが、後世まで時々彼を見たといふ人が少くなかつた。

蓬球

蓬球字は伯堅といひ、北海の人である。晉の武帝の泰始年間、貝丘の西玉女山に上て木を伐て居たが、何處からとなく異な香が薫して來るので、其場所が何處

であらうかと探し求めて居る中、今迄あつた山が忽然として消えて平野となり、目の前に金殿玉樓が軒を列べて聳え立つて居るのを見た。其處で彼は何心なく門の内へ入て、中の容子を窺ふと、庭には樹木鬱蒼と打茂り、見もなれぬ美しい鳥や獸が楽しさうに園内を彷徨ふて居る。

其れから稍進んで行くと、彼方の美しい高樓の上に四人の仙女が基石を弾いて遊んで居たが、彼を見ると、大に驚いて、如何して此處へ來たかと尋ねたので、彼は香の跡を尋ねて偶然此處へ來たことを話すと、件の四人の女は別に深くも咎めず、復た故の如く基石を弾き始めた。其時其中で一番年の少い一人の女が、忽ち琴を弾き初めて、次のやうな歌を歌ひ出した。

元暉何爲獨昇樓。球在樹下立久飢。以舌舐葉上垂露。

此時一人の女が忽ち鶴に乗て、其處へ遣て來て、玉華よ、王華よ、お前達は何故斯様な俗人を此處へ伴れて來たのかといつて、件の四人の仙女を大に叱つた。

これを聞くと、蓬球は急いで其處を逃げ出して、門外へ出たが、扱て後を振り返て見た時には、彼の金殿玉樓は何處へ行つたか、影も形も消えて無くなつて居た。そして彼が山を下りて家へ歸て來て見ると、泰始の年號は何時しか過ぎ去て、已

に建興の世となつて居た。其後彼は再び山へ入つたが、其限り再び山を出て来なかつた。

葛玄

葛玄字は孝先、丹陽句容の人である。左慈に從て仙道を學び、丹液仙經を授けられた。或日來客があつて四方山の話の序に、フト變化幻術のことに及んだ時、客は自分の爲めに一つ幻術を演じて呉れまいかと頻りに望むので、然らばといつて、彼は口の中に合せて居た飯を吐き出すと、それが悉く數百の大蜂となつて、客の身の上に群がり集つたけれど、少しも螫さなかつた。其時葛玄が再び口を開くと、件の蜂は再び其口の中へ飛込んで復た舊の飯となつた。

其外彼が變化の術は極めて多かつた。

例へば石像を起て歩ませ、或は又蝦蟆其他の昆蟲鳥類をして起て舞ひ歌はしむるに、殆んど人間と同様であつた。或は數十の錢を井戸の中へ投げ込み、次に一の器物を持て来て、件の井戸を覗いて錢を呼ぶと、件の錢は一つ宛飛んで出て、自づと器物の中へ入るのであつた。又酒宴を爲る時にも杯は自づから其處此

處と飛び廻り、酒がある中は何時までも其處に留て動かない。酒が飲み乾さるるに到て、初めて又動き出して別の客の前に行く。其他千變萬化彼の望む處は何ても出来無いといふことがなかつたので、當時の人々も葛仙公と云ひて大に彼を尊重して居た。

晉の武帝或日彼を召して、今天下旱魃で民百姓が大に苦んで居るから、一つ雨を降らして呉れまいかと頼むと、葛玄は直様一枚の符を認め、それを處々の寺社に貼らしめた。すると俄かに黒雲が起て来て、大粒の雨が車軸を流すやうに降て来た。

或日彼は圖ある神社の前を通ることが



あつた。此神社は靈験の著しい神で、百歩離れた處で車を下りて其前を通らなければ、忽ち神罰に當らるゝ。そして又此神社の前には大木が數十株許り茂て居て、女小供は晝でも一人て通るのを恐がつて居た。昔から此林には神の使と稱する怪禽が棲て居たけれど、人々は神罰が怖しさに誰一人として此鳥を捕へんとするものはなかつた。

此時葛玄は車をズーッと社前に進ませ、其儘其前を通り抜けやうとすると、今迄晴天であつた空が俄かに掻き曇り、大風が颯と地を捲いて起ると、砂塵が濛々として天を掩ひ、車が一步も先へ進むことが出来ない。馭者共は夫れ神罰だといつて皆震ひ上て恐れて居ると、之れを見た葛玄は大に腹を立て、片手を舉げて風を招ぐと、風は俄かに止み、塵も何時しか收つて、舊の晴天となつた。其時彼は一枚の符を書いてそれを神社の中に投げ込ましむると、彼の森の中に棲て居た怪鳥共は悉く死んで地上へ墮ちて來たのみならず、件の神社も此時自然と火を發して塵も残さず焼き盡して了つた。

此處に又武康といふ處に某といふ一人の男が住て居て、フト病にかゝり、巫人を招いて種々と妖魔を祓て貰つたけれど、少しも効験がなく、剩へ妖魔は件の巫

人に乗移つて益、其暴威を振ふので、人々も今は殆んど施すべき術もなく、空しく病人の死するのを今か今かと待て居る仕末であつた。其とき會、葛玄が此處を通りかゝり、此ことを聞くと不憫に思ひ、五伯の神に吩咐けて件の妖魔を捕へて其頭を柱に縛付け、鞭を以て其脊を打たしめて痛く其不都合を責めた末、其處を立去らしめると、病人は直ちに癒て了つた。其とき四邊の人々の耳には唯鞭の音が聞える計りて、目には何者の姿も見えなかつたさうである。

又此處に華陰といふ處に一人の男が居て、蛇精の女を妻として居たが、葛玄之れを見て不憫に思ひ、或日百姓の姿に化けて牛を牽いて田を耕して居たが、會、其處を通る彼男を呼び留め、汝の妻は世にも恐ろしい蛇精である、是まで人をとつて啖つたことは一人や二人ではない、今の中に早く何んとか仕末をつけなければ、悔いても追付かぬことになるぞと、懇々諭して聽かせたけれど、件の男は一向信ずる容子がなかつたので、然らば其證據を見せてやらうと言て、彼を或古井戸の側へ連れて行つた。見ると、彼の井戸の中には白骨が堆高く積んで居たので、件の男は俄かに蒼くなつて、震ひ上つた。

そこで葛玄は又彼の男をして潜かに妻の容態を窺はしむると、妻と見たのは、

果して一頭の毒蛇で、牙をかみ、目を瞑らして帷帳の中に蟠りながら側に一頭の小蛇を抱いて居た。之れを見た件の男は今更自分の愚であつたことを悟り、切りに葛玄に向て其禍を逃るゝ方法を求めた。其時葛玄は禁厭の法を行つて直ちに件の大蛇を斬り殺し、尙ほ其下に使はれて居た數多の小蛇をも退治した後、一枚の符を與へて彼男に之れを服用さすと、彼は直ちに蚯蚓や蝦蟆の類を夥しく吐き出して、漸く一命を繋ぎ留むることを得た。

葛玄曾て荆門軍の紫蓋山に在て仙丹を修煉して居たことがある。雪影しく降り積つた或朝、彼は跣足で身に襦袢を着て歩いて居た。此所に屈氏といふ二人の娘が之れを見て不憫に思ひ、其夜俄かに一雙の履を新調して、それを彼に與へる爲めに、翌日彼が丹を煉て居る處へ行いて見ると、其時は最早彼が昇天した後で、主のない爐が淋しげに残て居た。然し彼が昇天してまだ間もなかつたと見え、灰の温氣が少し残て居たので、二人の娘は何心なく其爐の灰を掻きまはすと、中から仙丹が一粒出て來た。其時二人の娘は互にそれを分けて服すると、神氣忽ち爽かになつて、飢え凍えるといふことが無く、加之煩い世間のことが急に厭になり、清々した物靜かな處が無性に戀しくなつたので、彼等姉妹は其後間も

なく何處へか身を隠して了つた。人々は仙人となつたのであらうと噂して居た。

是れより先き、葛玄曾て吳の太守に從て揚子江に舟遊をしたことがある。扱て船が愈、三江の落口に到つた時、俄かに風が起て、船が數多漂没した。其時葛玄の乗つた船も風の爲めに何處へか押流されて了つた。之れを見て吳の太守は葛玄が風波の爲めに一命を落したことを嘆き悲んで居ると、翌日になつて葛玄が水の上を此方へ歩いて來るのを見た。而して彼が愈、此方の船へ到着したとき、昨夜は何處へ行つたかと尋ねると、彼は酒臭い息をブツ／＼と吹かけながら、昨夜は海底の仙宮に居る伍子胥の許へ招かれて、今まで其處に留て居たことを話した。

吳の太守又會稽に遊ぶことがあつた。其時航海中から歸て來た一人の商人があつて、太守に拜謁を乞ひ、先日船にのつて、或神社の前の濱邊を通つた時、一人の神官から一通の手紙を葛仙公に渡して呉れるやうに頼まれたことを物歸つた。仍て、太守は直様葛玄を呼び出して、件の商人に引達はすと、件の商人は一封の手紙を彼に渡した。扱て右の手紙を披いて見ると、其れは東華山童君の手蹟

て、木極左官仙書と題して居たので、世人は此處に始めて葛玄の名は昔から仙界の名簿に載て居たのであることを知つた。

葛玄曾て西峯の石壁の上に立て、薬を搗て居た時、誤て薬を粟粒程石上へ墜した。其時一羽の鳥が居て其薬を拾ふて啄むと、それから俄かに不死の道を得て、今日でも夜氣靜かに星の光流れて、月白く風清き宵などには、清冽な聲をあげて、薬を搗く杵の聲をなすさうである。それで世人は何時しか此鳥を搗薬鳥と名付けた。

此處に東海の仙人に琴高といふものが居て、葛玄の名を聞き、或日東海から一雙の鯉に乗て訪ねて来て、葛玄と一所に酒を飲み、其儘酔ひつぶれて寝て了つた。而して目が醒めて見れば、乗て来た鯉は何時の間にか化して石となつて居た。其時葛玄は代りに一雙の鶴を彼に贈つたが、其鯉の化石は今になほ遺て居るさうである。

某所に一人の男が居て、葛玄と共に船を泛べた時、彼が持て居る囊の中を檢べて見ると、中に十數枚の符が有つた。其時件の男は其符の神験を試して見せるやうに彼に頼むと、葛玄は快よく承諾し、一枚の符をとつて、之れを水中に投げた。

と符は見る／＼水に沿ふて流れて行つた。次に彼は更に他の一枚の符をとつて、之れを水中に投げると、今度は水流に逆て上の方へ流れて行つた。其時葛玄は再び一枚の符をとつて水中へ投げると、其物は上へも流れず、下へも流れず、良久、其處に留て居たが、暫時すると下へ流れて行つた符と、上へ流れて行つた符とが互に舊の處へ戻つて来て、三枚の符は河の中頃で出遇ふて一處になつたが、稍良久經つと件の三枚の符は再び葛玄の手へ飛んで戻て来た。

此處に又或濱邊に大きな死んだ魚を賣て居る一人の商人が居た。葛玄或日彼の處へ行つて、此魚を暫時拜借して河伯の許へ行かうと思ふ由を話し、何事か文字を認めた紙を魚の口の中へ含ますと、件の魚は俄かに蘇生し、其儘水の中へ投げ込むと、勢よく何處へか去て了つた。又或年の寒中、葛玄の許へ數人の來客があつたが、彼は貧乏な爲めに火を用意することが出来なかつた。其時葛玄は口を張り開いて息を吐くと、火が忽ち口中から迸り出て、瞬く間に側の爐の中に烈火が堆高く積まれた。又或年の夏、彼が酒に酔ふて寝て居る處へ來客があつて、種々世間話に花を咲かせた末、御馳走に一つ餘興をやつて見やうと言ひながら寝て居た自分の腹の上へ白粉をつけ、其腹を除々に上へ持擧げると、腹は鉛

細工のやうに次第に脹れて天井の板へ届き、白粉が板の面に白く痕をつけたので、來客は一時にアツと感嘆してあつたさうである。

曹仙媪

曹仙媪は何處の人であるか詳かでない。外出する時は必らず一人の女兒と一匹の犬をつれて居たが、一日或渡場を渡らうとした時、舟子共は彼女の身装が如何にも賤しいのを輕蔑して、船に載することを拒むと、彼女は女兒と犬とを左右に附隨へ、水の上を渡つて向ふ岸へ到着し、其處に立て居た石籠せきかごの上に登り、籠の中へ入るやうに見えたが、其儘姿は忽地消え失せて了つた。後世廟を立て、彼女を祀て居る。

鮑靚

鮑靚は字を太玄といひ、陳留の人である。左元放を師として仙道を學び、中部の滎及び三皇五岳刻石の秘訣を授けられ、鬼神を制御することや、山岳を封鎖するの術を得た。晉の元帝の大興元年彼は江東に往くことがあつて、蔣山の北麓

を通ると會、十六七許の容貌美しい一人の少年に出遇ひ、之れと前後して數里許り行つたが、彼の少年は悠乎と歩いて居て、別に急ぐ様子も見えなかつたけれど、其速かなること風の如く、鮑靚は馬で追ひかけたけれど、遂に追ひつくことが出来なかつた。其處で鮑靚は早くも此の少年の普通の者でないことを悟つたので、遙か此方から聲をかけて其名を尋ねると、其時件の少年は後振返つて仙人の陰長生とは即ち自分のことであると答へた。其處で鮑靚は直様馬から飛んで下り、懇慫に禮を施して道を尋ねると、陰長生は彼に尸解の法を授けた。

凡そ仙人となるには種々の道がある。凡骨で昇仙する者は總て皆尸解の法によらなければならぬ。扱て尸解にも上下二種の法があつて、上の尸解は刀を用ひ、下の尸解は竹木を用ひる。先づ神丹を溶した墨水を筆に滲みさして、刀か竹木の上に太上太玄陰生の符を認めると、其人の身體は忽ち昇天して了つて、其刀や竹木が却て他人の目には其人の姿となつて見えるのである。

今陰長生が鮑靚に傳へたのは即ち此刀の尸解法であつた。其時陰長生は更に當今の晉朝の末路も近づいて來て、十年の後には天下に再び戦亂が起つて、人民大に難儀すべきことを告げたが、其後果して蘇峻の亂が起つて、天下大に亂れ

た。

羅浮圖志といふ書に彼のことを記して、鮑靚は南海の太守となつて居たが、仙術に長じて居たので、廣く世間に其名を知られて居た。曾て部といふ處に遊んで海に浮んだ時、腹が減て堪へられなかつたので、彼は其處に轉つて居る白石をとつて来て、それを煮て食べたことがある。又當時羅浮山に住て居た葛稚川とは非常な仲善して、常に相往來して居たが、鮑靚は何時も飄然單身でやつて来て、一度も車馬にのつて来たことがない。そこで葛稚川の妻は日頃から之れを不審に思ふて、彼の來るのを潜かに窺ひ見るに、何時も彼の姿は目に見えないで、唯其時になると、一双の燕が飛んで來るのを見る計であつた。て怪んで其燕を能く檢べて見ると、それは即ち一双の履であつたといふ事だ。

又壙城集仙錄といふ書には斯う書いてある。鮑靚が丹陽に於て死んだ時、之れを石子岡に葬つた。其後蘇峻の亂が起て、賊兵が彼の棺を掘り出して見ると、彼の尸體は其中に無くて、唯一揮の大刀が在る計りであつた。其時賊兵共は件の刀を取上げやうとすると、俄かに人馬の音が間近く聞えて、件の刀は自づと聲を發して鳴り響き、其聲は恰かも雷鳴のやうであつた。之れを見て賊兵共は大

に怖れ、其儘何處へか逃げ去て了つたが、亂が平定した後、件の刀を收めて別に之れを葬つたといふことだ。

晉書に彼の傳を記して次のやうに言て居る。鮑靚は字を太玄といひ、東海の人である。年五歳の時、父母に語ていふやう、自分は本と曲陽の李氏といふ者の小供であつたが、年九歳の時、井戸の中に墮ちて死んだのである。其處で兩親が親しく李氏の許を訪ねて、其事の眞偽を探て見ると、果して彼が言ふ通であつた。彼は學問は諸子百家の說に精通して居て、天文、河洛の書までも究めずといふことはなかつた。後、仙人の陰長生に從て仙術を學び、其秘訣を授けられ、百餘歳になつて卒した云々。

孫 登

孫登字は公和といひ、何處の人か詳でない。汲郡北山の岩窟中に住て居て、夏は草を編て衣とし、冬は髪を解いて振り亂して居た。そして平生易經を好み、暇があれば一絃琴を鼓して無聊を慰め、又は山崖水邊に立て吟咏長嘯するのを此上もない樂として居た。彼は性極めて寛裕で、喜怒の色を顔に現はすことは滅

多に無かつた。例へば彼を擠して水の中へ突墜し、散々彼を玩び戯るゝことがあつても、彼は少しも怒つた容子もなく、却てかゝる場合には常に大聲を揚げて笑ふて居た。

嵇康は彼に従て三年計り遊んで居たが、時々孫登に向て其志す所を尋ねたけれど、一向要領を得なかつた。然し彼の一舉一動を觀て居ると、流星は道の蘊奥を極めて居る丈け、何處となく俗氣を超越して居て、神氣自ら顔に溢れて居た。之れを觀て嵇康は常に感嘆して措かなかつたが、或日愈、彼の許を去るときに臨み、彼に向つて、今生の思出に一言の教を承り度いと言へば、孫登初めて口を開いていふやう。足下彼の火を知て居るか、火は生來光を持って居るけれど、常に其光を使用しては居らぬ。何か光を求むるやうな物があつて後初めて其の光を用ひる。人も之れと同様に生來才といふものを天から賦與されて居る。然し賢人は其才を藏して居て、何か時機が來なければ用ひぬ。火が光を用ゆる時は先づ薪を求めなければならぬ、薪は其光を永く保存して置く所以のものである。之れと同じく人が才を用ゐる爲めには、先づ物の道理を知究めなければならぬ、此物の道理を知究むるといふことは、長く其生命を安全にする所以である。

其時嵇康又琴を鼓するの法をも乞ふたけれど、何故か彼は之れを教ゆることを拒み、却て彼を戒めて、足下は才に富んで居るけれども、學識が未だ足らぬ。それで時とすると不慮の災にかゝつて百年の命を縮むることがあるから、能く能く注意した方がよいと言つた。其後嵇康は果して呂安が事に遇ふて獄に繋かるゝ身となつた時、先年孫登が言つた事を思ひ出し、自分の不明を痛く責めてあつたといふことだ。其後孫登は終に期がみちて昇天して了つた。

王 烈

王烈字は長休、邯鄲の人である。海東の抱犢山に隠れて居たが、曾て嵇叔夜と共に遊び、石髓の飴のやうに柔かになつて居るものを拾ひ取り、先づ其半分を自分が服して、残の半分を嵇叔夜の到着するのを待て、彼に與へやうと思つて居たが、やがて彼が到着した頃には、件の石髓は凝て石のやうに堅くなつて居た。

暫時すると又或一の石室を發見した。中へ入て見ると二卷の素書があつたが、王烈は其書の何を書たものであるか讀むことが出来なかつたので、其儘其處を立去つた。然し彼は其文字の形體を暗記して居たので、之れを嵇叔夜に話す

と彼は盡くそれを知て居て、それこそ平生我等が求めて居る仙書であると云つた。之れを聞て王烈は今更仰天し、二人時を移さず、再び曩の石室を尋ねたが遂に見當らなかつた。

それで其後王烈は自分の弟子に向て、嵇叔夜は屢道を得るの機會に遇へながら何時もそれを逸して居るのは、全く天命の致す處で、彼は未だ道を得るの機會が來ないのであると話してあつたさうである。

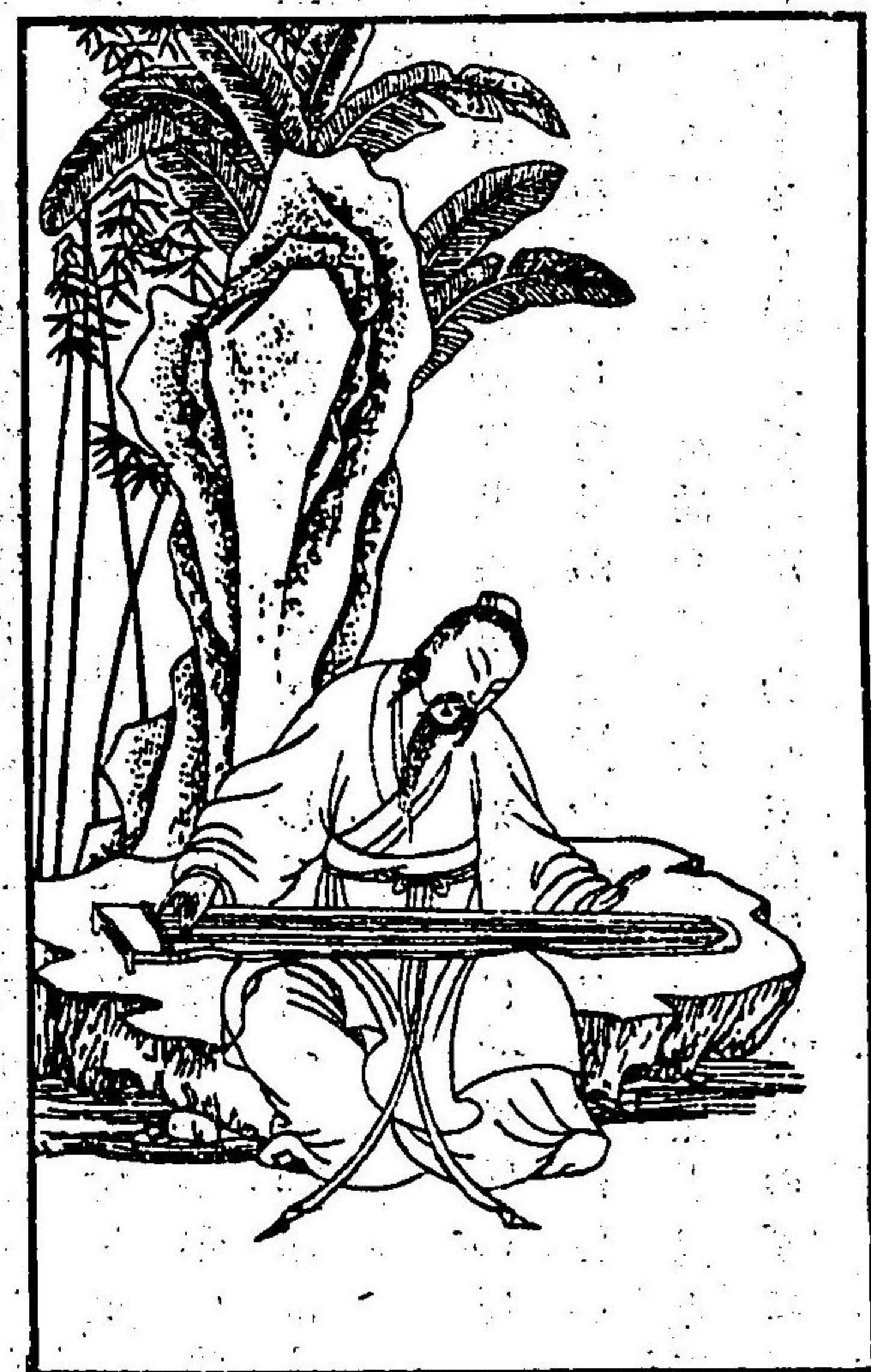
嵇康

嵇康字は叔夜、譙國銍の人である。銍に嵇山といふ山がある、彼の家は其側にあつたので、因て嵇氏を名乗たのである。彼は身の丈七尺八寸、容貌整ひて風采の堂々たる偉丈夫であつた。

此處に王伯通といふものが居て、一軒の旅館を新築した處、何時の間にか妖鬼が此處に住み込んで、此家に宿るものあれば、必ず變死する。それで化物屋敷といふ名は廣く近邊に聞え渡つて、誰一人として此處に宿るものが無くなつた。

其時嵇康は之れを聞て自ら進んで其處に寄宿を乞ひ、扱て其夜は獨り琴を弾じて二更ニヨルに到ると、忽ち八頭の鬼が現はれた。之れを見て嵇康は先づ聲をかけ

て、聞けば此頃此處に宿るものがあれば、必ず變死する由であるが、それは曾大方其方共の所爲であらうと鞠問すると、伴の鬼共は大に驚いて云ふやう、我等は決して人を殺すものではない、元は舜帝の時の樂官で、伶倫といふのは我々のことである。兄弟八人あつたが、佞臣の讒言によつて皆冤死し、此處に葬られたものである。然るに今王伯通は吾等が家の上に大きな家を築き、我等は日夜頭の上から壓されて居るのが苦しい爲め、夜な夜な斯うして其悲を訴へやうとすると、此處迄此處に宿した人々は何れも皆大の臆病者で、我々を見ると、自分から氣絶して死んで了ふのである。然るに今漸う始めて先



生のやうな剛勇の英雄に出遇ふたのは、全く天の引遇せて、我等の志が達する時機が来たのであらう。先生願はくは此事を王伯通に告げて我等の骸骨を掘出し、改めて他所に葬るやうに取計てくれ。若し此事が成就するならば、半年の後には王伯通をして本郡の太守となさしむるであらう。して先生への御禮には唯今早速廣陵の一曲を授け申さう。

之れを聞て嵇康大に喜び、夜明けなば直に其由を王伯通に告げて、彼等の望が達せらるゝやう取計ふべきことを契約し、自分が持て居た琴を件の鬼に與へると、鬼共は廣陵の一曲を弾じたり、丁寧に其秘訣を授けた。斯くて嵇康と鬼とは互に弾きつゝ和唱しつゝ、夜明近くまで楽しんで居たが、此時王伯通は自分の家に在て寝て居ると、嵇康が宿て居る家の中で、頻りと陽氣な琴の音が聞えて來る。然かも萬籟寂として聲を收めた真夜中のことなれば、シン、ミ、リした琴の音は何んとなく人の哀を惹く。其處で王伯通は不審に思ふて密と嵇康の家を伺ふと、嵇康は無事て居るのみならず、さも楽しさうに獨言いひながら琴を弾じて居るので、彼は直ぐに内へ這入り、幸に無事であつた事の慶を述べた。

嵇康は鬼から聞た一伍四什を悉しく物語り、扱て其翌日早速人を以て床下の

地を掘らしめると、果して中から八人の骸骨が出た。其處で新しく棺を造て他の清淨した小高い丘を選んで之れを葬つた。すると其後晉の文帝の時、王伯通は果して帝から召されて其郡の太守となり、嵇康は中發大夫と爲つた。

其時嵇康は汲郡の山中に孫登といふ道人が道を修めて居るといふことを聞て、態、其處に尋ねて行き、彼に附從て遊んで居た。精細のことは前に掲げた孫登の傳に記してある。又其後王烈と一所に遊んで山中の石室に一卷の仙書を見出したことは、又王烈の傳に精しく記して置いたから、此處には略す。

嵇康は家が貧乏で、日々の生活も差支へる程であつたので、向秀といふ者と一所に或大樹の下に鍛冶屋を營んで、漸く其日を過して居た。其時潁川の鐘會といふて當時威權を擅にして居た貴公子が、或日彼の許を訪ねると、嵇康は彼に對して禮をも爲なかつたのみならず、此方を振り向きもせず、頻りに鍛冶を働いて其手を休めなかつた。良久、經て鐘會が其處を立去らうとした時に、嵇康はさも嘲るやうに、貴下は如何な事を聞く爲めに態、此處へも出になさつたのであるか、して又今如何な事を見て歸りにならうとするのであるかと尋ねた。鐘會は聞く所を聞て、此處に來た、そして今又見る所を見て歸るのであると、唯一言を

殘して其處を立去つたが、此事からして彼は嵇康を非常に憎み、文帝に讒して、嵇康は大望を抱いて今潜伏して居る臥龍のやうな者である。天下の事別に御心配なさるゝに及ばぬが、唯彼れ嵇康一人は恐ろしい大敵であるから、一日も早く誅戮なされた方がよろしいと奏上し、序に又嵇康の黨員なる母丘儉といふものをも讒言して、共に一所に誅戮せしめた。

此處に徐寧といふものが居て、南海の太守鮑靚に従て道を學んで居つた。或夜隣りの室で頻りと琴を彈ずるものが居て、其技なかく、巧であるので、鮑靚に誰れが彈じて居るのかと尋ねて見ると、それは嵇康であつた。嵇康は鐘會の讒言によつて文帝の爲めに誅戮せられたけれど、そは全く尸解の術を行ふたので、彼の本身は決して滅びなかつたのである。

吳猛

吳猛は字を世雲といひ、濮陽の人である。幼少の時から孝行の名が高く、吳の國に仕へて西安の長官となつて居たが、或日仙人丁義の神方を得て、其名俄かに世に顯はれた。そして其後又許遜といふものが居て、彼の神方を後世に傳へた。

或年暴風が烈しく吹いた時、吳猛は符を書いてそれを屋根の上に投つてやると、何處からともなく、一羽の青鳥が飛て來て、件の符を口に啣み、復た何處ともなく飛び去た。と暫時して風も又俄かに吹き止んだ。其時或人が彼に其故を尋ねると、彼曰く、今南湖に此暴風に遇ふた一の船がある。其船の中には二人の道士が居て、自分に救を求めたので、符を書いて風を鎮めたのである。其後南湖から歸つて來た人に聞くと、矢張り吳猛の言つたのと少しも違はなかつたさうである。此處に西安の長官に干慶といふものが居て、死んでから早や三日になるが、吳猛之れを聞て、彼の命數は未だ盡きて居らぬ筈だから、一つ之れを天帝に訴へてやらうと言ひながら、彼の屍體の側に數日計り添寝して居ると、于慶は忽ち蘇生つた。

吳猛は船に乗て暴風などに遇ふときは、何時も白羽扇を以て水を掻き分けて向ふ岸へ渡つて居つたが、許眞君許遜が昇天した年、吳猛は白鹿の車にのつて、弟子四人を引連れ、白晝昇天して了つた。宋の政和年間、神烈眞人の尊號を贈られた。

鄭思遠

鄭思遠は何處の人であるか詳かでない。彼は律曆の學に通じて居たが、晩年葛孝先に從て仙道を學び、諸々の仙經と煉丹の法とを授けられた後、廬江の馬迹山に住て居た。處が此山に雌雄二頭の虎が居て、或年二匹の子を生むと、母虎が獵師の爲めに射殺され、父虎は之れに驚いて何處へか逃げて了つた。跡に残された二匹の子虎は飢に迷ふて彷徨ひ居るを思遠が見て不憫に思ひ、件の子虎を我家に連れて來て飼ふて居ると、其後父虎は子虎の迹を慕ふて、彼の家を尋ねて來、其儘彼の處に留て立去らなかつた。而して鄭思遠が外へ出る時には件の親虎の脊にのつて、經書及び衣服、仙藥等は二匹の子虎に背負はせて、其後に附從はしめて居た。

某年鄭思遠所用あつて永康の橫江橋を通ると、會友人の許隱に逢ふた。其時許隱は折柄齧齒が痛み出して堪へられなかつたが、豫て齧齒が痛む時、虎の鬚を齒の間に挿むと、痛が直ちに去るといふ事を聞て居たので、鄭思遠に右の由を話した。其處で思遠は親虎の側へ進み寄りて、其鬚を一本抜取てやつた。其時虎

は靜かに臥した儘温順しく、彼が爲す儘に任せて居て、少しも抵抗しなかつたさうである。其後鄭思遠は昇天して丹陽真人となつた。

葛洪

葛洪字を稚川といひ、句容の人である。幼少の頃から非常に學問を好んで居たが、家が貧しかつたので、山に入つて薪を採り、それを賣て筆墨を買ひ、夜は書を借りて來てそれを寫し、遂に儒者を以て名を成すに到つた。

葛洪人となり、淡泊寡慾にして名利を希はず、常に門を閉ちて交際を避け、靜かに天命を樂んで居たが、若し人が書を携へて疑義を尋ねる事があれば、深切丁寧に教へてやり、學問の爲めには、千里の遠い處へも往來して毫も倦んだ様子はなかつた。そして彼は最も神仙の道を好み、祖玄に從て仙術を學び、其秘訣を悉く授けられた。其處で又其學んで得た所の修煉の秘訣を弟子の鄭隱に授け、自分も亦彼から其道の秘術を學んだ。其後彼は南海の太守上黨の鮑玄に從て道を受けたが、此鮑玄は心學の事に精通して居て、將來の事を豫知するに妙を得て居たが、葛洪の人と爲りを愛して、其娘を彼に與へて妻とした。

晉の成帝の咸和初年、司徒の王導が彼を召して主簿の役に任じ、其後官を進めて散騎常侍となして圖書を掌らしめやうとしたが、彼は年が老つたからといつて、執事も辭退して就なかつた。そして丹を煉て長生の術を得やうと望んで居たが、會交趾といふ處に丹砂が多く産するといふことを聞て、自ら進んで勾漏といふ處の良官に成らうとしたけれど、皇帝は彼の才學を惜んで其望を許さなかつた。然し彼は審かに事情を具進して切にそれを請ひ、結束して其任地に赴いたが、途に廣州といふ處に到ると、其處の刺史鄭嶽といふものが、堅く彼を留めて、去る事を聽入れなかつたので、彼は遂に羅浮山に止て仙丹を煉て居た。

扱て彼は此羅浮山に留ること前後七年、優悠閑日月の生涯を送て居て、日々著述の事に心を潜めて居た。そして世の中の儒者が、徒らに周公孔子の道を知て更に神仙煉丹の妙法ある事を知らず、頻りに妄誕の言を弄して神仙の道を誹謗するものが多い事を嘆いて、内外篇一百十六篇を著し、名つけて抱朴子といつた。處が或日彼突然鄭嶽の許に手書を遣して、今より仙界に遊ぶ旨を報じ、一室に靜座したまひ、睡るが如く死んで了つた。年丁度八十一であつた。

扱て鄭嶽は斯くとも知らず、葛洪の手紙を見て大に驚き、取るものも取敢へず、

狼狽して葛洪の許に馳せ付いて見ると、其時は彼已に息を引取つた後である。彼の顔色を見るとなほ生々して居て、手足なども極めて軟かであつた。そして棺に入るゝ爲めに彼の屍體に觸れて見ると、死骸は何時の間にか消え去つて居て、唯衣服ばかりが残て居てあつた。

黄野人

黄野人は葛洪の弟子である。彼は常に葛洪に従て少しも其側を離れなかつた。葛洪が登仙した時、彼は仙丹を羅浮山の或岩石の間に遺して置いたが、黄野人一日之れを發見し、其中の一粒を服して地上の仙人となり、今でもなほ生存して居て、有縁のものは時々彼に逢ふ事があるさうである。

或年或人が羅浮山に遊んで、岩窟の中に一夜を明した事がある。そして眞夜中頃になると、紺毛が總身に生えて居て、衣も着ない一人の男が其處へ現はれた。其時、彼は早くも仙人の類であらうと悟つたので、厚く禮を施して道を尋ねると、件の異人は何んにも答へず、唯カラカラと笑つて、次のやうな歌を歌て、何處ともなく立去て了つた。

雲來萬嶺動。雲去天一色。長笑兩三聲。空山秋月白。
其後彼の男は山を下りて逢ふ人々に、其夜逢ふた異人の容姿を尋ねて見ると、それは全く黃野人に相違なかつたさうである。

麻姑

麻姑は晉の石勒の頃の人で、麻秋が娘である。此麻秋といふは氣象猛々しく、曾て城を築く事があつた時、人夫を使ふに極めて苛酷にして、晝夜少しも其手を休ましめない、唯鶏が鳴く頃少し許休息さすのみであつた。然るに麻姑は性來慈、悲心の深い女で、父の爲めに苛く追使はるゝ工夫共を見て不憫に思ひ、適宜の時期を窺ふて、鶏の假音（まがね）を使ふと、附邊に居る數多の鶏は之れを眞似て、皆一齊に鳴き出し、爲めに工夫共は何時よりも早く仕事を止める事を得た。然るに其後父の麻秋は此事を知て大に怒り、麻姑を撻（むち）たんと爲たので、彼女は遂に家を逃げ出して、仙姑洞に入り、其處に長年仙道を修業した後、城北の石橋の上で終に昇天して了つた。其處で後世件の石橋を名づけて望仙橋と言て居た。
此處に元の時に劉氏鯉といふ者が居たが、其家の前に一の大いなる槐の樹があつた。

つた。或夜夢に一人の玉冠を戴いた仙女が現はれて自ら麻姑と名乗り、祠を修繕したいから、件の槐の樹を譲てくれまいかと頼んだので、劉氏鯉は快くそれを承諾し、扱て夢が醒めた後、彼は如何にも不思議に思つて居ると、それから數日經つて、或日俄かに大風吹き、雷雨烈しく降つて來て、件の槐の樹は何時の間にか消え失せた。其處で、急ぎ人を麻姑の廟に遣して檢べさすと、件の槐の樹は廟の前に倒れて居てあつたさうである。

附記。宋の政和年間に建昌の人で、又麻姑といふ一人の仙女が居て、平州の東南にある姑餘山に於て道を修め、終に真人となつたさうである。故に王遠の妹の麻姑を加へて都合同名異人の女仙が三人居る譯である。

吳彩鸞

吳彩鸞は吳猛の娘である。瑞州の崇元觀といふは、即ち丁義が娘の秀英といふ者が仙丹を煉つた所で、吳彩鸞も亦此處で道を學び、終に得道するを得た。
唐の太和の末に書生に文籥といふものが居て、鍾陵の紫極宮に寄寓して居たが、或年の秋西山に行て諸處を遊覽して居ると、忽ち一人の女に遇ふた。時に件の女歌を歌つて曰く、

若能相伴陟仙壇、應得文簫駕彩鸞。自有繡襦渾甲帳、瓊臺不怕雪霜寒。

文簫之れを聞て、直ちに其仙道を得た女である事を知り、態と其邊を往復して居て、潜かに彼の女の容子を窺ふと、彼の女も亦彼に心があると見え、頻りに秋波を送て、切なる情を眼に言はせ、暫時した後、彼女は岩を陟り、石を擧げて、山の頂指して去つて了つた。之れを見て、文簫も勇氣を鼓して、其跡を追懸け、頓て山頂に至ると、彼の女は文簫を見て、大に喜び、種々と馳走を爲て、厚く彼を饗應し、終に綢繆の情を契ることになつた。と、此時山岳鳴動して、風雨俄に起り、帷を裂き、几を覆した。而して空中に聲があつて、呼ばつて云ふやう、汝、吳彩鸞、私の情に驅られて、漫りに天機を漏らす條、其罪決して輕くはない、以後一世紀の間、人間界に追遣て、暫時仙界への交通を斷つにより、左様心得ると。其處で吳彩鸞は仙界を追はれて、文簫と共に鍾陵へ歸つたが、文簫は家が貧乏で、己獨りの暮しさへ困難であつたので、彩鸞は毎日孫愜が唐詩を寫し、日に一部づゝ書で錢五緡を得た。かやうにして十年許り暮して居る中、漸く世間の人から名を知らるゝやうになつたが、其後或日二人一所に新興の越王山に上り、各一頭の虎に乗て、何處ともなく去つて了つた。

許遜

許遜字は敬之、真君と號す。南昌の人で、吳の赤烏二年に生れた。初め彼の母が、一羽の金色した鳳鳥が飛んで來て、口に啣んだ珠を自分の掌の上に墜すと夢みて、彼を娠んださうである。

許遜生ると、穎悟にして、一を聞て十を知るの才智を備へ、容姿美しくして、偉大夫の面影があり、そして幼少の頃から慈悲深く、嘗て獵に出て一頭の鹿を射殺した時、親鹿が來て、其仔を舐ぶるのを見、大に殺生の悪いことを悟り、以後弓矢を棄て、一切遊獵の樂を止め、心を潜めて博く經史百家の書を読み、天文地理、音律、五行讖緯の學にも精通することを得た。そして就中神仙練丹の術を好み、西安の吳猛が丁義の神術を得たといふことを聞きて、早速彼に従て、悉く其秘訣を受け、又郭璞の卜によつて、西山の陽にある逍遙山の金氏の宅を自分の栖家とし、日仙丹を練ることに勵んで居た。

曾て一の鐵製の燈檠を買て來て、或夜光を點すと、漆が剝げた處に異様の光があるの、熱之れを檢べて見ると、それは即ち金であつた。其處で翌日早速賣主

を訪ふて件の燈燄を還してあつたが、これによつて觀ても彼は極めて廉潔の人であつたといふことが分る。

年四十二の時、即ち晉の武帝太康元年に旌陽縣の長官となつたが、教化洽ねく行はれ、賞罰正しかつたから、人民は皆彼に悦服してあつた。これは何時頃であつたか、或歳凶作て人民が租税を納むる事が出来ないて、困て居た時、眞君は靈丹を瓦や小石に塗り付けて、それを化して金となし、人知れず之れを畑の中に瘞めしめ、彼の租税の滞て居るもの共を呼び出して、件の畑を耕さしめると、土の中から黄金が陸續と出て來たので、彼等はそれを以て租税を無事に納むることが出來た。又或年惡疫が流行して、死する者が毎日何百人と續いた時、眞君は其仙藥を洽ねく人民に頒ち施したので、之れが爲めに死を免れたものは幾千人といふ多數であつた。近國隣邦の人民此事を傳へ聞き、我も〜と眞君の許に押懸けて來て、其混雜云ふ計りもなかつたので、眞君一計を案じ、諸々方々に表札を立て、其下に神水を備へつけて、人民共に勝手に其水をとつて飲ましめた。之れが爲めに流石の惡疫も何時の間にか撲滅して了ふことを得た。其後眞君は晉室が衰へて滅亡するに間も無いことを察し、俄かに官を辭して東國に歸て來た。其

處で蜀の人民共は彼の恩澤を長く後世に傳へる爲めに、諸々に祠をたて、彼が像を刻んで其處に安置し、懇ろに彼を祀つたとのことである。

或日眞君が郊外に遊んで、獨り林の中に息ふて居ると、其處へ女の童が五人やつて來て、各一振の寶劍を獻上した。其處で眞君は、件の女童を一所に家へ連れて歸ると、件の女童は各れも皆劍仙で、毎日唯劍を舞して娛んで居たが、眞君は彼等に從て悉く劍法の奧儀を極むることを得た。其後彼は師の吳君(吳猛)と一所に丹陽の黃堂に遊び、眞誕姆が仙道に達して居ることを聞いて、一所に彼女の許に行いて教を乞ふと、眞誕姆がいふやう、兩人は生時已に仙骨を稟けて來たので、その姓名は已に老君の仙簿に記されてある。昔孝悌王が曲阜の蘭公が許に降て來て、後世晉の世になると、許遜といふ神仙が出て、自分の道を傳へるだらうから、其時は之れを彼に渡してくれといつて、蘭公に金丹、寶經、銅符、鐵券を授けた。其後自分は又蘭公から右の神方を預つて、足下が見えるのを待て居たのである。斯く言ひ了ると、彼女は吉日を擇んで、一の高壇を作り、其上に登て孝悌王から傳へられた諸種の仙方を悉く眞君に授けた。其時眞誕姆は吳猛に向つて、眞君は汝の弟子であるが、然し今では孝悌王の法術を悉く傳へられた一個の真人であ

るのみならず、彼の名は昔から仙籍に登録されて居て、其位高く、其身尊く、天下の仙籍を掌る長官であるにより、汝は今日より眞君を以て改めて師と仰ぐやうにすべしと訓誨し、吳猛も亦眞君の徳に服して彼に従て教をうけた。其時眞君は毎年一度必ず、此處へ來て彼女に拜謁しやうと心に決めて居ると、眞誕姆早くも彼の心の中を見透き、足下再び此處へ參るには及ばぬ、自分は今漸く自分の任務を果たしたから、此處で再び仙界の帝郷へ歸て行かうと思ふと言つて、一莖の茅をとり、南の方を望んで之れを投げてやり、此茅の落ちた所に自分の祠をたてて、毎年秋に一度參詣してくれ、ば充分であると言て、其儘昇天して了つた。其處で吳君と眞君の二人は其茅の落ちた處を探し求めると、それは其處から南方四十里餘隔てた處にあつて、其處に行て見ると、茅が已に繁殖して其邊一面が茅原になつて居た。因て其處に一つの社を建て、毎年仲秋の三日には必ず其處へ行つて參詣して居た。

初め眞君が彼の茅の落ちた處を探し求めて居る時、會眞靖といふ處に休息して居ると、其處の村民が盛んに神に供へる肉を烹て居て、互に戒めて、若し祭の肉に少許でも不淨のものがあると、復た神罰に觸れるから、能く注意しなければ

ばならぬぞと囁き合ふて居るのを、フト眞君が小耳にはさみ、其夜旅合に泊ると、即時に風神を呼んで、其夜の中に其處の社にある林を悉く吹き倒さしめ、翌日村民を呼び集めて已に妖神を退治したから、以後其の祭を行ふに及ばぬと告げた。初て又此村には絶えて水がなく、村民は各れも數十町距てた處へ行て飲料水を汲んで居るのであつたが、眞君之れを聞て不憫に思ひ、社前の水が涸れて空になつて居る澤へ、杖を以て一の穴を作ると、忽ち其處から泉が湧き出て來て、以後村民は遠く水を汲む必要がなくなつた。其他斯様にして人民の苦患を救ふたことは數限もなく、一々此處に列記する事が出來ぬ。

此處に海昏といふ處に一の高山があつて、其處に一頭の大蛇が棲んで居り、附近四十里の間は其毒氣瀰漫して居て、其毒氣に觸れて日に死するもの何百人といふ數を知らない。因て其附邊の住民三百餘人許り、眞君の許へ訪ねて來て救を乞ふたので、彼は快く承諾し、懷帝の永嘉六年、數多の弟子を率ゐて蛇の棲む所に到ると、妖蛇の眷族共眞君の名を聞て恐ぢ怖れ、悉く穴の中へ潜んで出て來ない。眞君因て符を飛ばして海昏の社伯を招き、それに命じて件の蛇を驅り出さしめなければ、なほ出て來ない。其處で南昌の社公を招いて共々力を協せて之れ

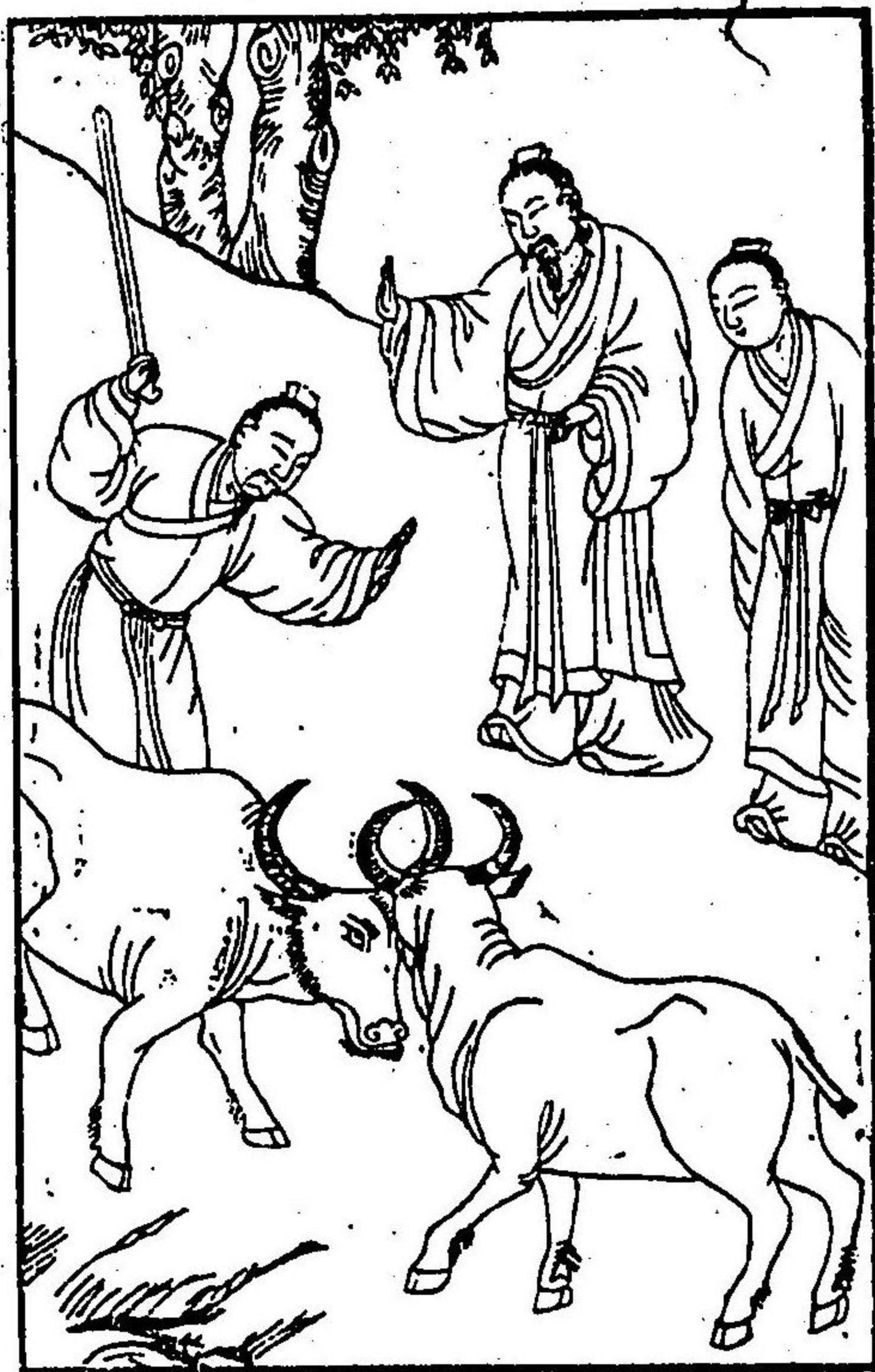
を驅り出さしめると、流石の大蛇も今は堪へかねて始めて穴から出て來た。目は日月の如く光り輝き、口から吐き出す毒氣は四方に瀰漫して之れに觸るゝものは忽ち斃れる。そして件の毒蛇は鎌首をもたげ、火焰を吐きかけながら眞君目懸けて寄り進むと、數百の村民は又眞君を助けて鼓噪して進む。其時眞君は神兵に命じて、彼の妖怪を縛めて身動する事が出來ないやうになし、扱て其首を足の下に踏みつけながら神劍を以て其頸を劈いた。

其時弟子の施岑、甘戟等蛇の側へ驅けよつて其腹を割くと、中から長さ數丈程もある一頭の小蛇が出て來た。村民共之れを見て、件の小蛇をも打殺さんと噪き立つるを眞君堅く制して、彼は未だ害を爲す程に成長して居ないから、妄りに殺しては不可ぬ。此蛇は今から一千二百五十年經つて始めて人民の害を爲す、其時は又自分が再び出て來て之れを誅戮するであらうから、其時まで生して置け。其れの證據に自分の社の前に一株の柏の木を植ゑて置け、其枝が茂て社前の境を拂ふやうになつたら、それは即ち其時であると懸ろに説き示し、尙ほ自分が昇天した後一千二百四十年經たば、豫章の境、五陵の間に地仙が八百人生れ出て、大に自分の道を發揚し、件の大蛇をも退治するであらう。そして其時其等地

仙の長となるもの一人、豫章から出て來るに違いない。楊子江の底が埋まつて河の真中に一の沙洲が出來る時あらば、それは即ち其時であると、精しく話して聞かせた。

扱て件の小蛇は危い處を逃れ、其儘眞直に楊子江の中へ入つて身を隠して了つた。其時眞君はハタと手を打ち、終了たり、今大蛇を亡ぼす事を得たといふもの、蛟精悉く誅滅したといふ譯てはなく、妖氣なほ此天地の間に殘て居る。殊に今逃去つた小蛇は靈物であるによつて必ず今自分が言つた事を聞て居たに相違ない、必ずすれば此隙に乗じて郡城を騒がすや

許 遜



うな事でもあつては一大事だと言つて、直様弟子共を率ゐて郡城へ歸て來た。此事があつて後彼の名は俄かに天下に轟き、其道を慕ふて弟子たらん事を求むるもの引きも切らなかつた。て、眞君或日一計を案じ、炭を化して容貌美しき婦人となし、夜になると、件の弟子共と一所に寝させておき、翌る日一々弟子の身體を檢べて見ると、炭に汚れて居ないものは唯僅かに十人許であつたが、他のものは皆愧ぢて自分の方から逃げ去て了つた。

或日眞君は弟子の甘載、施岑等を率ゐて城邑を見廻りして居ると、忽ち一人の衣冠を着けた美少年が現はれて、自ら慎某と名乗り、眞君に面會を乞ふた。舉止閑雅で、態度徳容、應對振りなかく、物馴れて居たが、間もなく暇を告げて去て了つた。其後で眞君は弟子共に向ひ、其方共は今來た少年を何と思つて見たか、彼は正しく人間ではない、即ち老蛟の精である、自分を試して見る爲めに彼の様な姿に化けて來たのである。容貌態度とも閑雅で居れど、なほ何處かに腥氣が残て居るのが、汝共の眼には見えなかつたか、察する所、此附邊に彼の眷族が棲て居るに相違あるまいと言つて、直様小者を遣して、彼者の跡をつけしめると、やがて彼小者が歸て來て、件の蛟精は、郡城の畔の圖ある水際に、黄牛と化けて沙の上に寝轉

んで居る由を告げたので、眞君早速其處へ出掛けて行き、一枚の紙を剪て、黒牛と化し、件の黄牛に鬪を挑ましめ、一方弟子の施岑に命じて劍を振て、黒牛を助けしめた。其處で彼の蛟精は、施岑の爲めに左の股を斬りつけられ、其場を逃れて城南の井戸の中へ駆け込んだが、眞君は直ちに其跡を追ふて、件の井戸際に到り、符を以て土地の神を呼び出し、件の妖蛇の行方を尋ねて見ると、彼は今長沙の買誼が處へ逃げ込み、一人の美少年と化けて、買玉といふものゝ娘の許に居る事が分つた。

是より先き、件の妖蛟は買玉の娘を垣間見て、其美しい姿に戀慕し、忽ち化けて一人の美少年となりて、買玉の許に出入して居る中、何時しか買玉の寵愛を得て、終に其娘を手に入るゝ事を得た。そして其處に數年計り留て居る中、二人の子を儲け、夫婦の間も睦しく暮して居たが、此者毎年春の末から夏の始へかけて、何處へか出掛けて行き、秋になると、寶貝珠玉の類を大船に載せて歸て來るのが例であつた。是れは恐らく春夏の大水を利用して、通行の商船を覆し、其貨物を盗て來たものであらうと思はるゝ。然し買玉の家族は元より彼者の妖精であるといふ事は少しも知らないので、毎年自分の婿が商で儲けて來るものと計り思

つて、少しも疑はずに居た。處が今年の秋になつて突然空手で歸て來たので、買玉は怪んで其故を尋ねると、件の妖精は伴て、儲けた財貨は悉く盜賊の爲めに奪はれ、剩へ左の股に負傷を受けた事を言葉巧みに話したので、買玉は大に驚き、急に醫師を招いて其治療を受けしめた。

豫めかくあるべしと期して居た眞君は此時詐て醫者に化け、何氣ない風を粧ふて買玉の家に到ると、件の妖精は早くもそれと覺て呼べども出て來ず、買玉が態、起て其室へ迎に行く時、眞君も密と其跡へついて行き、彼の妖精を見るや、即ち聲を勵まして其罪を責めると、件の妖精は忽ち本身を現はし、眞君目懸けて飛びかゝつたが、忽ち眞君の弟子共の爲めに斬り殺されて了つた。其時眞君は水を口に含んで彼の二人の子供に吹掛けると、それも忽ち化して小さい蛇となつたので、又一所に斬り殺して了つた。

此時蛇精の氣を受けた買玉の娘も殆んど蛇身に化しやうとしたが眞君が與へた神符の爲蔭で、本の清淨の人間となる事が出來た。其時眞君は買玉に向て、蛟精の居る所は其下に必らず水がある。今君の居らるゝ家屋の下は僅かに一尺も満たぬ水であるけれど、その實底も知れない深淵である、一日も早く此處を

引去て生命を全うした方がよからうと告げたので、買玉は大に驚き、急に附邊の高原に家を選したが、數日經つと、果して舊の宅地が陥落して、底も知れない深淵となつた。之れを見た買玉の一家は今更眞君の徳に感じて、厚く其恩を酬してあつたさうである。

此處に豫章といふ處に件の老蛟の殘類が猶ほ數多接て居て、盛んに人畜を害して居たが、眞君の歸て來た事を聞て、直ちに誅せられん事を恐れ、皆伴り化けて人間となり、城市の中に散ばり住て居たが、或日眞君の弟子に向ひて、自分の家は長安で代々徳を積み、善を施して、其地方でも尊敬せられて居る。然るに、今聞く所によると、眞君の許に一振の神劍があるとの事であるが、それは如何程の神徳のあるものであるか、承りたいものであると、言葉巧に欺いた。弟子共は彼等の妖精であるとは少しも知らないから、件の神劍は其功德極めて廣大であつて、一度天を指せば、天裂け、地を指せば、地碎け、星辰を指せば、星辰忽ち其軌道を失ひ、河を指せば、河の水逆流し、世にありとあらゆる妖魔は一度此劍に逢へば、其身體微塵となつて碎けるといふ、世にも稀なる神寶であると物語ると、蛇精共はさも感心した風を粧へ、尙ほ言葉巧みに欺いて、若し其神劍でも傷くる事の出來ないも

のがあるならば、それは又何であるかと尋ねたので、弟子共は戲談半分に、それは即ち冬瓜と葫蘆であると告げた。すると妖精共はそれを誠と心得、皆悉く葫蘆や冬瓜に化けて、枝のまゝ蔓のまゝ、楊子江の水に浮んで、何處ともなく逃げ去らうと企てた。

此時眞君は獨り自分の室にあつて書を讀んで居たが、俄かに妖氣が天地をこめて立上つたので、怪しく思ひ、窓を開いてキツと四邊を見廻すと、楊子江の上には、蛟精の化した冬瓜や葫蘆が幾百と數知れず、水に沿ふて流れ行くのを見て、さては彼奴の仕業であつたかと始めて覺り、直様弟子の施岑に命じて、伴の寶劍を以て悉く彼の冬瓜葫蘆を斬らしめた。之れが爲めに血流れて江の水紅に染つたといふ事だ。其時眞君熟思ふやう、此地に昔から蛟螭が棲て居て、其黨類眷族を一朝一夕で滅すことは出来ない、若し後世になつて、其等の者が出て来て人民に害をなす時、誰が居て其れを制するか、これは今の中に何んとか方法を設けて、彼等の害を防がねばならぬと一策を案じ、鬼神に命じて郡城の南の井戸に一本の鐵柱を埋め、其先數尺程を地上に表はして目標とし、其下に八本の索（まき）をかけて、地脈を鈎鎖し、誓をたて、云ふやう、此鐵柱が若し歪むやうな事があつたら、其時蛟

精共が再び起て來やう、其時に我再び出て彼等を退治せん。若し此鐵柱が何時迄經ても歪むやうな事がなかつたら、其れは妖精が總て鎮壓した兆である。是に由て其地の妖精殆んど其跡を絶つて、城民長く其恩惠を蒙ることが出來たさうである。其後眞君は又洪州其他七十餘箇所に斯様な鐵柱を埋め、又は鎮府を立て、永く其他の妖魔を鎮めたのみならず、奸雄（たご）の跋扈に備へた。

明帝の大寧二年、大將軍王敦兵を擧げて俄かに叛し、帝都に向て潮の如く押寄せて來た時、眞君は吳猛及び郭璞と共に王敦の許に尋ねて行き、懇々と其心得を諭し、兵を引いて歸るやうに説き勸めると、王敦曰く、自分は曾て一株の大木が天に聳えて、それが爲めに天が裂けた事を夢見たが、これは如何いふ前兆であるか、一つ公等の判断を願いたい。之れを聞て眞君は暫時考へて居たが、如何も吉兆ではあるまいと言ふと、傍に居た吳猛は木上つて天を破るといふのは、それは「未」の字である、今度の戦は實際覺束ないから、今の中に思ひとゞまつたらよいだらうと言つたので、王敦は驚いて、俄かに色を變じた。其處で郭璞が更めて右の夢を卜ふて見ると、果して不吉の兆であつた。次に王敦は重ねて自分の壽は如何であるかと問ふた。郭璞曰く、公若し今事を擧ぐれば禍立處に到らん、然し此

儘兵を引て武昌へ還るならば、長命疑ふ處がない。王敦之れを聞て大に腹を立て、然らば汝の壽は如何か。郭璞曰く、自分の生命は今日限りて、今日の晝頃には壽が盡きて了ふ。之れを聞いた王敦は烈火の如く憤り、急に兵士に命じて郭璞を擒へ、之れを陣中に斬らしめた。そして眞君と吳猛とは我が身に危難が迫つて來たのを見るや否や、傍にあつた杯をとつて、ハタと地に擲つと、それが忽ち化して白鶴となり、天井の邊を頻りに飛び繞て居たが、王敦は目を舉げてそれを見て居る間に、二人の姿は何處へか消え失せて了つた。其後王敦の軍は果して破れた。

扱て眞君と吳君の二人は王敦の許を逃れて金陵に到り、其處から舟を備ふて豫章に至らうとした時、眞君は船夫に向て唯目を閉ぢて坐て居ればよい、但し如何な事があつても、目を開いて視ては不可と堅く戒しめ、扱て二頭の龍を召して左右から舟を挾て飛行せしめた。良久すると船は矢のやうに空を横切て走り、暫時の間に廬山の頂を過ぎて紫霄峯の金闕洞に至つた。其時二人は暫時洞中に遊ぼうと思ひ、舟をとある林の梢に停めると、木の端が船底に當て、異様の響がしたので、先程から不安の念に心を痛めて居た船夫共は今此怪しい音を聞くと、

思はず目を開いて見た。すると、今迄舟を負ふて居た二頭の龍は此時忽ち舟を斷崖の上に打捨て、何處へか去て了つた。其處で眞君は船夫共を叱て、其破約の罪を責めると、彼等は今更二人の普通人でない事を悟り、九拜して罪を謝した上、重ねて教を乞ふたので、眞君は靈草を服して五穀を避くるの道を教へ、長く此山にとゞまつて不老不死の長壽を得せしめた。

其處で眞君と吳君の二人は各一頭の龍に乗つて其舊宅へ歸つたが、其後數十年の間は専ら仙道を修めて、復た時事に關係しなかつた。扱て此眞君の平生は別に常人と異つた處は少しもなかつた、唯其住居の周圍には鳳凰や白鶴の仙鳥が常に飛び翔て居て、瑞雲が不斷其四邊を立籠めて居た。王敦の亂で東晉の政が亂れてからは、江左の地方には盜賊出沒して居て、曾て平安の日がなかつたが、眞君の居られた地方百餘里の間は盜賊も入らず、年々五穀實りて、人民長く平和を樂しむ事を得た。

孝武帝の寧康二年は即ち眞君の齡一百三十六歳であるが、其年の八月朔日の朝、二人の仙人が天から降て來て、天帝の命を傳へ、彼を以て九州の都仙太史、高明大使の職に任じ、玉膏金丹を各一合、外に紫袍と寶節とを賜はり、且つ昇天の日を

告げて再び天上へ歸て了つた。愈、其期日になると彼は數多の人民及び弟子共から別を惜まれて昇天して了つた。其際彼は跡に残て居る弟子共には夫れ夫れ大功如意丹の方を授けた。

此日は丁度月の十五日であつた。朝から空中に天樂の音が聞えて、祥雲地に雲き、羽蓋龍車、儀仗兵衛、其他仙童玉女、綺羅星の如く空中に居並び、眞君は數人の弟子及び日頃愛養して居た鶏犬迄も附従ひ、白晝に除々と昇天された。其時眞君の僕に許大といふものが居て、其妻と共に會米を賣る爲めに西嶺に行て居たが眞君愈、昇天するといふことを聞き、慌て、歸て來たので、車が覆り、積て居た米を悉く路上に墜した。其時件の米は悉く皆芽萌して、青々と生長したさうである。扱て許大夫婦は眞君の處に馳せ付き、自分等をも一所に連れて行て呉れと泣て哀願したけれど、未だ仙道を得る程の身分でもないからとて、眞君に堅く留められ、唯地仙の術を授けられて長く其地に留つた。

扱て眞君を載せた車が再々と天に昇て、今や漸く雲に隠れやうとする時、藥を煉るに用ゐる石臼と方穀と、又鶏を入れた籠と鼠數匹が、如何した機が、雲を漏れて眞君の宅から東南七里餘隔てた處に墜ちた。そして此月一ヶ月は空中に異

香が薫じて居て、容易に消え去らなかつたさうである。

黄仁覽

黄仁覽は字を紫庭といひ、南城の人である。父は萬石といひ、晉の御史となつて居た。紫庭は許遜に從て仙道を學び、悉く其秘訣を傳へられ、尙ほ彼の娘を娶て妻にした。紫庭曾て青州の從事となつた事がある。其時彼は單身任地に赴き、妻を家に留めて父母の世話を務めさせ、そして自分は毎夜潜かに妻の許に歸て來て、朝早く任地に歸て居たのを、誰一人知つた者はなかつた。

處が或夜、妻の室から笑ひ囁めく男の聲が漏れて聞えた。兩親は怪んで之れを妻に尋ねると、妻は夫の黄君である事を答へた。然し數千里の遠方に居る人が、夜中に歸て來る道理がないので、父母は容易に彼女の言を信用しなかつた。其處で妻は重ねて夫が已に仙術を得て居るから、千里の道も一瞬の間に往來する事が出来る事を告げ、且つ此事は天機を漏らす恐があるゆゑ、誰れにも漏らしてはならぬと堅く戒しめられて居る事を話すと、兩親は果して眞の紫庭であるか如何か、試に自分達にも面會さして疑念を晴らして呉れと頼んだので、其日の

晩方紫庭が来るのを待受けて、妻は兩親に頼まれた一伍四什を物語つた。紫庭も今は止むを得ず其翌朝父母に面會し、自分は官吏となつて遠く離れて居るけれど、毎夜家に歸て居る事を告げ、且つ之れは仙道の秘密であるから口外は無用であると、堅く兩親を戒め、自分が今日まで、兩親に秘して居たのも要するに全く之れが爲めである、と詫びを陳べ、頓て一本の竹枝を青龍と化し、それに乘て再び青州へ歸て了つた。之れを見て、父の萬石も亦志を起し、同じく許君に従て仙道を學ばれた。紫庭には二人の弟があつて、心荒々しく、平素獵を好んで居たが、或日紫庭其志を酬さしめんと思ひ、假に鹿の姿に化け、叢の中に臥して居て、彼等二人を欺き寄せ、忽ち本身を現じて懸々と其不心得を諭したけれど、二人は如何しても彼の言ふ事には従はなかつた。其後紫庭の兩親及び家族と併せて三十二人、或年の某日白晝に昇天して了つた。而して唯彼の二人の弟のみは矢張り獵を止めず、長く其家に留て居た。

郭璞

郭璞は字を景純といひ、河東聞喜の人である。幼少の時から經術を好んで才

名一時に高く、口訥^{くたつ}て談話には極めて拙であつたが、詞賦に到ては中興の祖と稱して中外に重ぜられ、亦陰陽曆數の學にも精通して居た。

此處に郭公といふものが居て、河東に寄宿し、賣卜を以て業として居たが、卜筮の道には極めて精通してあつた。郭璞之れを聞て、彼の門に入り、苦學して其業を受け、終に青囊書二十卷を授けられ、五行天文卜筮の術に精通する事を得て、これより災を祓ひて福を求むる事、掌中の物を探るよりも易く、其名聲忽ち天下に鳴り響いた。處が彼の門人に趙載といふものが居て、或日其青囊書を窃み取つたが、未だそれを讀まない中に、火災にかゝつて焚死

郭璞



して了つた。

其後惠帝、懷帝の時河東に兵亂が起て物騒がしかつたが、郭璞は天下の漸く亂れんとするのを見て、潜かに天下の志士と交を結び、當時の名ある人々の許に入して居た。彼は其後東南の僻地に難を避け、將軍趙固の許に身を寄せた。是より先き、趙固は愛養して居た名馬を失ひ、それより快々として樂まず、門を閉ぢて一切來客を謝絶して居た。郭璞が彼を訪ねたのは恰も此時であつたが、門吏は其事情を物語て面會を謝絶すると、郭璞は自分に名薬があつて、其馬を活かすに極めて容易であると言つたので、門吏は驚いて此事を趙固に告げると、趙固は急に彼を内に迎へ入れて厚く待遇した。其時郭璞は人夫二三十人を募て名々長い竿を所持せしめ、東の方に行く事凡そ三十里許で、一の丘に到着した。此處には一面に林が茂て居て、其中に一字の祠が建てられて居た。其處で件の人夫をして竿を以て其祠の扉を打拍かしめ、祠の中から猴の如うな一箇の動物が飛出したのを難なく取押へて、再び城中へ歸て來ると、件の怪物は彼の死んだ馬の側に進み寄り、馬の鼻の中に頻りと息を吹込む容子であつたが、不思議や、此時彼の死んだ馬は俄かに起上り、鬣を振はして一聲高く嘶いた。其容姿は全く舊と

少しも異て居らなかつたので、趙固は厚く郭璞を賞し、彼をば長く其軍中に留めて置いた。

此處に廬江の太守に胡孟康といふものが居た。或日郭璞は彼の許に到て急に兵を進めて南方へ渡つた方がよいと説き勧めたけれど、胡孟康は何んと思つたか、それには従はなかつた。處が郭璞は豫ねて胡孟康の待婢某と通じて居たのである。或日一策を案じ、澤山の赤豆をは胡孟康の家の周圍に撒き散らして置くと、件の赤豆は夜になると皆赤衣を着た人となつて、十重二十重に胡孟康の宅を打圍んで居るやうに見え、そして眸を定めて能く視ると、忽地消え失せて見えなくなる。胡孟康之れを見て大に怪しみ、郭璞をして之れを卜はしむると、郭璞がいふやう、これは君の家に召使て居る彼の待婢の爲す業であるから、此者さへ遠ざければ、此妖異は忽ちに消えて了ふことを陳べ、更に此處から東南二十里の處に彼女を賣り、そして其際決して價の高下を争ふては益にならぬ由を話したので、胡孟康は彼に欺かるゝとは少しも知らず、彼が言ふまゝに早速彼の待婢を賣つて了つた。其時郭璞は人を遣して價安く其待婢を購ひ、扱て符を井の中に投ずると、件の赤衣の妖鬼は皆一つ／＼自ら其身を縛して井の中へ投じて了

つた。其處で郭璞は難なく件の侍婢を獲ることが出来て胡氏の許を立去つた。其後數十日たつと、果して廬江が陥落して丁ひ官軍の將王導の兵が無事に江を渡つて先へ進むことが出来た。そこで王導は大に郭璞を重んじ、之れより厚く彼を用ゐて參謀とした。

或日王導郭璞に向ひて其身の吉凶を卜はしめた。其時郭璞いふやう、今公の身の上を按ずるに、近き中に震災の患がある、之れを通るゝには此處から數十里許り西の方へ行くと、其處に一の大きな柏の樹がある。仍て右の樹を公の身の長と均しく切て、それをば常に寢處に備へて置けば、此災を免るゝ事が出来ると告げたので、王導大に喜んで其通りに行ふと、果して數日程經つて、大雷鳴が起り、王導の寢處に落雷してあつたが、其時彼の柏の樹は粉微塵の如く破碎したけれど、彼の身は幸に恙なき事を得た。

郭璞の母死んだ時、彼は之れを暨陽に葬つた。然るに其墓が餘り水邊に近く、洪水の虞があるので、或人が之れを心配して郭璞に忠告すると、郭璞は彼處は今に陸となるから心配するに及ばぬと言つたが、其後果して水涸れ沙浮き上り、墓の附近數十里が程は悉く皆桑田となつた。

郭璞は才學を以て一世に重んぜられて居たが、然し性輕卒て禮法に拘はらず、酒を嗜み色を漁て往々度を過す事があつた。それで彼の友人の著作郎于寶と云ふもの、常に此事を心配して、折々は言葉を盡して忠告してあつたが、其時毎時も彼は我々人間が天から受けて居る所の物に限があつて、無盡藏に所有する事は到底出来ない、我々は唯其受けた物を悉く使ひ果さずに、此短い一生を了るのを心配すべきである。酒を飲む事や、女色を弄ぶことは元より深く咎むべきでないと言つて、少しも聽入れなかつた。

此處に又日頃彼と親しく交て居た友人に桓彝といふ者が居て、互に遠慮もない仲であつたから、郭璞が婦人と戯れて居る座敷へても、彼は一向お構なくズンズン通つて居たが、或時郭璞彼に向て、餘の處は一向構はないけれども、自分の厠に居る時だけは其處へ尋ねて來ては困る。若し左様な事が萬一あれば、自分も君も共に殃を蒙るであらうと言つて、堅く彼を戒しめて居た。處が或日桓彝は酒に酔拂つて郭璞の許に到り、折節彼が厠に在るのにも一向頓着なく、眞直に厠の方へ行つて戸を開けると、郭璞は赤裸になつて髪をふり亂し、口に刀を啣いて用便中であつたが、彼桓彝を見ると、忽ち地顔色を變へ、彼程吳々も戒めてあつたにも

拘らず、桓彝が疎忽であつたばかりに遂に此禍に逢ふ事を痛く嘆き悲んであつたが、後果して郭璞は王敦の爲めに身を亡ぼし、桓彝は蘇峻の難に逢ふて一命を落した。

扱て王敦が謀叛を企てた時、温喬庾亮の二人は郭璞に頼んで、今度の一揆の吉凶を占ふて貰つた。其時郭璞は頗る曖昧な返事をしてあつたが、更に彼等二人の吉凶を占ふて見ると、それは極めて大吉であつた。處が此處に崇某といふ者が居て、郭璞の事を王敦に勧めたので、或日王敦は郭璞を召して、自分が此先き如何程長く生くべきかと問ふた。其時郭璞は久しからずして禍に逢ふ事を告げ、更に今回の事を思止て武昌に歸るならば、壽限りなく延びるであらう事を話し、其時王敦然らば汝の壽命は如何んと言ふと、郭璞はすかさず今日の晝頃に盡さるであらうと答へたので、王敦は烈火の如く憤り、直ちに彼を捕縛して南岡といふ處で斬らしめた。其時彼は年正に四十九歳であつた。然し彼はズーツと以前から豫て此災に遇ふ事を知て居つたらしいといふのは、彼曾て所用があつて越城の邊を通る時、一人の男に逢つた。其時彼は件の男を呼びよせて、袴褶を其者に與へやうとした。其時件の男は見知らぬ人から物を貰ふ道理がない

といつて、容易に受取らなかつた。然し郭璞は只之れを受取て置け、後日になつてから、必らず思ひ當る事があらうといつて、無理に其品を受取らしめてあつたが、其男こそ即ち今回郭璞を刑した下手人であつたさうである。而して彼は又害に遇はない前から豫め家人に命じて自分を埋葬する道具を用意せしめ、其場所までも選定してあつたさうである。

扱て郭璞が斬られてから三日程経つて、彼が平日の服を着て或人と話して居る處を南州地方の人々が見て、かくと王敦に話した。王敦不審に思ひ、其棺を發いて見ると、彼の尸體は已に其中には在らなかつた。所謂彼は尸解して了つたのである。其後郭璞は水府の仙伯となつて、水府の事を掌つて居たとのことである。而して王敦が軍に敗れて誅に服した後、郭璞は弘農太守の爵位を追贈された。

郭璞には有名な著書澤山ある。彼は前後親しく試みた卜筮六十餘事を撰録して洞林文抄と名づけた。尙他に新林十篇、卜韻一篇、爾雅の注解本、音義圖、詩註、二蒼方言、葬書、穆天子傳、山海經、楚辭、子虛、等の諸書、及び上林賦を始として、其他作る處の詩歌文章、數萬言、皆世に愛讀せられて居る。

劉綱は字を伯鸞といひ、晉の土虞といふ處の長官である。妻は樊夫人といひ、夫と共に仙道に熟達して居て、鬼神を使役して居た。然し兩人は仙術を知て居ることを堅く押隠して居たので、誰一人としてそれを知つて居るものはなかつた。そして政がよく行はれて居たので、彼が領内は極めて穩かて、旱魃水害の災なく、五穀能く實りて、人民富み榮えて居たが、暇があれば夫婦互に其の仙術を較べ優劣を競ふて、樂んで居た。即ち劉綱が術を以て火を起せば、夫人は又雨を呼んでそれを鎮める。又夫人が庭に植ゑて居る桃を呪へば、枝に結つて居た果實が自然と落ちて來て、夫人の手に持て居る箱の中へ入り、一として地上に落つるものがなかつたが、劉綱が呪ふものには時々、籬の向ふに轉び墮つるものがあつた。又劉綱が一箇の盤を持て來て、それに唾を吐くと、忽ち一尾の鯽魚となる。其時夫人が又其盤の中へ唾を吐くと、忽ち一頭の獺となつて其魚を取て食ふ。又曾て夫婦が四明山に遊んだ時、路に一頭の虎に出遇つたが、其時劉綱が彼の虎を呪ふと、件の虎は地上に伏した儘起上らない、そして却て夫人に向て吼へる。

其時夫人は靜かに件の虎を目掛けて前へ突き進むと、虎は忽ち頭を垂れて畏まつて了ふ。其處で夫人は繩を以て件の虎を縛し、それを家へ連れて來て、宅の床の側へ撃いて置いたことがある。

斯様に夫婦は互に其術の優劣を試みてあつたが、毎時も夫人の方が優れて居た。

初て兩人が愈々昇天するときに、劉綱は役所の側にあつた大きな阜（作）の樹に攀ぢ上り、地上から數丈の高さに到つたとき、漸く始めて昇天することが出来たが、夫人の方は直ちに床の上から昇天して了つた。

東陵聖母

東陵聖母は海陵の人である。劉綱に従て仙道を學んだが、終に道を得て、隱身變化の術に長ずることを得た。其後杜氏といふものに嫁した。此杜氏といふのは全く仙道を信ぜず、聖母が人々の疾を癒しなどして種々の奇術を行ふを見て、妖術を以て人を惑はすものと思ひ、終に之を官に訴へたので、彼女は捕へられて獄中に撃がれたが、間もなく風に乘て獄屋を飛び出し、其儘昇天して了つた。

其時一足の履を窓の下に脱ぎ捨て、あつたが、人民共之を見て願を立て、彼女を祠つた。そして此祠に勝れば如何なる事でも直ちに成就してあつたので、之れに歸依するもの極めて多かつた。そして此祠の上には常に一羽の青鳥が止て居て、物を紛失したものが其祠へ詣て、其物の在る所を尋ねると、伴の青鳥は多くの青鳥を打連れて盗んだ者の家の上に集つて頻りに鳴くので、盜賊は容易に發見せられた。然れば後には盜みをする者も無くなり、境内は極めて能く治つた。若し盜むものがあれば、罪の大きなものは破船に逢ふて溺死するか、或は虎狼の爲めに噛み殺され、罪の小さいものは即ち病にかゝるか、或は負傷をするさうである。

孟欽

孟欽は洛陽の人で、左慈、劉根の仙術を得たあつたが、人民共彼の徳を慕ふて遠く他所から洛陽へ引越して來るものが多かつた。吳の符堅其名を聞て彼を長安に召寄せたが、彼が仙術を以て人民を惑さん事を恐れ、符融に命じて彼を誅戮せしめやうとした。其處で符融は或日彼を呼んで酒宴を開き、頃よい時刻を計

り、左右の人々に自配して、急に彼を捕へしめると、孟欽は忽ち一陣の旋風と化して何處へか消え失せて了つた。其後暫時たつて、孟欽が城の東に居る由を符融に告ぐるものがあつたので、直ちに騎士を派遣して彼を捕へやうとしたが、伴の騎兵が漸彼に追ひ付く頃になると、彼は急に足を早めて逃げ去る、そして其早いことは恰度空飛ぶ鳥のやうで、自らも留まらな程であつた。其處で再び數多の兵を差向け、てやると、途の前に忽ち然と心で大きな聲が出來た。兵士共は渡ることが出來ないから、空しく後へ引返へした。其後符堅が死んで了ひ、今は彼を追害



するものが居なくなつた時彼は再び青州に現はれたが、其後海山に上り程なく登仙して了つた。

范豹

范豹は巴西閩中の人である。久しく支江の百里洲に住て居て仙道を修煉して居たが、每朝河の水に臨んで嘘嗽をする時、水から五色の光が立昇て居たさうである。そして彼は冬でも唯單衣一枚しか着て居なかつたけれど、凍えるといふ事は少しもなく、又晋の桓温の時頭髮が已に斑白になつて居たけれど、宋の文帝の時になつても、矢張り其容貌は少しも變らなかつた。そして又時々人の爲めに吉凶を卜ふ事もあつたが、一々皆的中して居たので人々は不思議に思ふて居た。

或時或人が彼に問ふて先生は天上から此世へ罪を犯して謫流された仙人ではあるまいかと訊ふと、彼は否我は別に謫仙の類ではない、唯久しく此世に居る一箇の道士である。我曾て周の武王が殷の紂王を討つのに出遇ふたが、戦争が急遽離れたとき、武王の前軍は歌をうたひ、後陣は舞を踊つて居るを見たと言へ

てあつた。

其後宋の文帝に召されて帝に拜謁した時、彼は自ら決して臣と稱せず、我は我はと稱して居た。又帝に従て太子の居らるゝ宮殿の前を通つた時、其宮門を指して、此中には博勞といふ悪い鳥が居る。こんな大賊の輩を養ふて居るなど全く皇帝の氣が知れぬと罵つたので、終に皇帝の怒を招き、直ちに捕へられて自殺し、其尸は新亭の赤岸が岡に埋められた。

其翌年范豹の弟子に陣志といふものが居て、或夜床から起て見ると、光明家中にみちて居て恰かも晝のやうに明るく、そして范豹が傍の榻に坐て居た。暫時すると其處へ又一人の老翁が入つて來たが、范豹は之れを見ると、身を起して恭しく件の老翁を上座に出迎へた。

其時陣志は范豹に向て彼の老翁は何人であるかと問尋ねたけれど、彼は唯笑つて居て何とも答へなかつた。そして須臾經つと兩人はやがて一所に外へ立去つて了つたが、文帝後に此話を聞き不審に思ひ、范豹の墓を掘て中を檢めしめると、彼の屍體は已に其處にあらなかつた。之れを見て皇帝は始めて彼の尋常の人でなかつた事を知て、今更彼を殺した事を大に後悔されたさうである。

王嘉字は子年といひ隴西安陽の人である。容貌特の外醜かつたが然し滑稽の才に富んで居て能く人を笑はしめて居た。平生五穀を食はず、美しい衣を着る事を嫌ひ、又世の中の人々と交際する事を避けて、常に東陽谷の洞穴の中に隠れ住んで居た。

彼は未來の事をいふに極めて隱語が多かつたので、當時彼の言葉を能く了解するものが少なかつた。秦の王苻堅兵を率ゐて晉を犯さんとした時、人を彼の許に遣して其吉凶を尋ねしむると、王嘉は唯金は堅し、火は強いと云て、直ちに使者が乘つて行つた馬に乗り、衣冠の裝束を着て徐々と東の方へ數百歩計り歩くと、やがて急に馬を驅けさせて馳せ戻り、慌て周章いた態をして馬から下りると、裝束を脱ぎすて、其儘椅子に腰かけ、其後は一言も言はなかつた。苻堅之れを聞て少しも其意味を解する事が出来なかつたので、再び使者を遣して國の運命は此後如何なるであらうと尋ねると、王嘉は唯一言、未央と答へた。苻堅之れを聞て何と思つたか、今度の進軍は大吉であると言て獨りて勇み立ち、軍を進めて晉

を撃つたが、翌年壽春の戦に大敗北して國終に亡びて了つた。それは丁度癸未の年であるが、王嘉が未央といつたのは未の年に大變な殃（編者註、未央と殃と通音のてある）があるぞといふ意味であつたのである。即ち秦の國は西にあるから金である、晉の國は南にあるから火に當る。處が火に逢へば金は忽ち焼けて了ふ。王嘉が言つたのは抑も此道理を指示したのである。

其後王嘉は間もなく嵩山へ住居を移した。其時姚萇と苻登との間に會、葛藤が生じ、二人は互に睨み合ひの姿であつたが、姚萇或日王嘉を召寄せて、自分が苻登を亡ぼして天下を奪ひ取る事が出来ようかと尋ねた。其時王嘉は略、之れを得る事が出来ようと答へると、姚萇之れを聞て大に腹を立て、得るなら得るてよ、い何にも略、といふに當るまいと言て、忽ち彼を斬り殺し、次で彼の弟子二人も一所に斬り殺した。此二人の弟子は此の日連れなつて一所に散歩して居る時に、途中で偶然王嘉に遇へ、其處から一所に連れなつて、終に此災に遇ふたのであつた。

其後暫時経つと、やがて姚萇の許へ王嘉から手紙が來て、健在の旨を知らして、寄越したので、不審に思い、早速彼の墓を掘返して見ると、豈計らんや、彼及び二人

の弟子の屍體と思つたのは、全く三本の竹の枝であつたさうである。

尾謙

尾謙は呉の魏郡の人である。易の理に精通して居て、建業に在て賣卜を業として居た。一事件で價百錢と定め、日に錢五百を得れば乃ち其日の店は閉ぢて終ひ、其中錢三百は母親へ遣り、残り二百は酒の料にしたり、或は貧しいものに施して遣るのを樂として居た。

晉の海西公或日自分の牀の上に一匹の赤蛇が居るのを見て、驚いてそれを掻き退けんとすると、件の赤蛇俄かに見えなくなつたので、不審に思へ、之れを尾謙に占はしめると、晉の御代は動かぬ磐石の固があつて、これから益昌へて行くが、唯陛下に時とすると此の都を一時落ち延びなければならぬ凶兆があるといふ事であつた。其處で海西公は如何にすれば此災を消伏して身安全なる事が出来やうかと問ふと、尾謙は後年に一人の大將があつて、北の方へ出征して大敗し、士卒三萬人を失ふ事がある、其時に陛下が此災は消伏して了ふてあらうと答へた。處が後果して桓温といふ一人の大將が大軍を率ゐて北方の敵國を征伐し

たが軍に敗れて石頭城へ逃げ歸り、海西公を廢して簡文帝を立てた。

桓温の妻が桓玄を産むとき、産が甚だ困難であつたが、其時尾謙卜ていふやう、公の馬廐の第六番目の墻埒が全く壞れて了つた時でなければ此子は産れぬてあらう、而して此胎内の子は男の子で、後來天下を動かすの英雄となるてあらうと。其處で桓温は大に喜んで謝禮として錢三十萬、夫人も又錢三十萬を贈て、辭退する彼の懷中に無理に納めしめた。

其後彼は日に三事件と定めて卜筮を賣り、毎日客を集めては、面を識て居るもの、居ないもの、差別なく、酒を賣つて氣儘に生活して居たが、其母が死んだ時、自分も亦從來世話になつて居た許氏といふ酒家の主人に暇をつけて何處へか立去て了つた。然るに其後數日經て彼の酒家の人々が落星といふ處のある路傍に、尾謙が地に倒れて居るのを見て、酒に酔ふたものと思へ、手を捉て引張て見ると、それは唯彼が着て居た衣服で、死體は何處へか消え失せて居た。

麻衣子

麻衣子は李和の事である。彼は生れた時から色が白く髪黒く、容姿整へて世

にも稀なる美少年であつた。成長するに従て漸く世の中を厭ひ遂に終南山に入つて麋鹿を伴侶として居たが、一日一人の道士に遇て仙道の秘訣を授けられた。其時件の道士は彼に告げていふやう、南陽の片邊り、湍水の南に一箇の山山の堂があつて、其傍に又一つの岩穴がある。其處は神を煉り道を修むるには此上もないよい處であるから、其處へ往て靜かに道を修めたがよからうと。其處で彼は其道士の言葉に従ひ、件の岩穴を尋ねて其處に十九年餘住んで居た。晉の義熙の年に旱魃がついて天下の人民塗炭の苦を受けた時、張爽ちやうそうといふもの數多の農民を率ゐて彼が許に尋ねて來、頻りに雨を降らして呉れと哀願した。然し彼は不幸にも雨を降らす術を知らなかつたので、何とも答へずにあつたが、此日の夕方十二人の少年忽然と現はれ出て、彼に向て、百姓達が再び請ふたら、猶豫なく其の願を聽届けてやれ、決して心配するには及ばぬから、委細は唯我々に任せて置けといつて再び何處へか立去つて了つた。其處で彼は心に不審を懐いては居たけれど、其言ふまゝに百姓共の願を許してやると、其翌日になつて果して大雨が降て來た。其時曩の十二人の少年が再び其處へ現はれ出て、實は我々は龍の化身である、君の道業が愈熟して來たによつて、我々は今上帝の命

麻衣子

命を受けて、君の行化を助ける爲めに、此處へ遣て來たのであると言て、再び掻き消すやうに失せて了つた。

劉宋の大明初年年一百一歳になつた時、彼は尸解昇天して了つた。

鄧去奢

鄧去奢は衡州龍丘の人で、崇仙宮の道士となつて九峯山の麓に住で居た。幼い時鄧から仙道を學び、苦學精勵して、年三十餘歳の時、即ち劉宋の初年、奢に處州嵩陽縣の安和觀に退隱した。此安和觀といふのは葉靜



鄧去奢

が道を學んだ處である。觀の北五里の處に卯山といふ山があつて、高さ五十餘丈、仰けば瞻襟として、白雲常に其頂を鎖して居た。世の傳ふる處によれば、此山は張天師と葉靜の二人が道を修行せられた處であるさうである。之れを聞て鄧去奢は坐るに昔の仙聖の跡が慕しくなり、此山に一つの庵を作て其處に暫時住て居た。

此山の東南にあつて一つの四角な大石がある。面の闊さは二丈餘もあつて、青嵐朝夕其の四邊をこめて俗氣到らず、松風龍吟を傳へて常に其上の塵を拂へ、神を煉るには此上もなき佳境であつた。其處で彼は朝夕其上に坐して瞑目默想して居ると、或日一人の神人が夢現の間に現はれ出て、斬魔の劍一振と一瓶の仙丹が此石の下に隠くされてある事を彼に告げた。其時彼は此石は天然自然に作られた石で、人力を以て如何とも爲し得らるべくも見えない。且つ未だ道も充分熟して居ない自分が、擅に斯かる幽靜の神境を專領することさへ、己の今の身分に過ぎた果報であるのに、尙ほ此上仙丹と神劍とを望むのは恐らくは僭越に過ぎた沙汰であらう、因て自分は唯二つの品が自づと自分に授る時機の來るのを待つて居る次第であると答へた。件の神人はさも満足さうな顔色を

して、汝若し機を怠まず勤修して道を積むならば、久しからずして右の二品が自然と汝の手に入る時が來るであらうと言て、其儘消え失せて了つた。後三年程経つと、果して右の二品は鄧去奢の手に授けられた。此劍といふは即ち張天師が持て居た七星の寶劍で、石瓶の中の仙藥は其容積大凡一斗、麻の實程の小さい粒で、色は紅くて脆があつてきら／＼と光つて居る。彼は其藥を自分も服し亦病人へも飲しめてあつたが、病人は忽ち癒て了ふ。

此時麗水縣に華道といふものが居て、戦亂引續いた後で世の中何んともなく騒々しいのを好機會とし、地方の土人を集めて兵を擧げ、勢威隣國を壓して居た。處が或日鄧去奢が神から仙丹と神劍とを授けられたといふ事を聞き、急に兵を卯山に指向けて山を圍み、鄧去奢を捕へて己が城に連れて行き、仙丹と神劍とを奪ひ取つた後、彼を一室に押籠めて、暑い夏の一月間少しの飲食物をも與へなかつた。扱て一月経て後、其室を開けて見ると、死んだと思つた鄧去奢は顔色も衰へず、奮の儘に達者で居るのを見て、彼は大に怪しみ畏れ、彼を山に送り歸して遣ると、其夜俄かに大風吹き雷鳴起りて、件の仙丹と寶劍は自ら箱の中を出て、鄧去奢の許へ飛んで歸つた。

其後鄴去春は山に居る事十五年間であつたが、此山に住て居た鬼神は各れも皆彼を見ると怖ぢ恐れて路を避けて居た。其後彼は又暫時他處の道觀に寄宿して居た事もあつたが、其時彼が居間にあつて、毎夜何人か頻りに笑ひさゝめぐ聲がするので、人々が怪しんで彼の居間を差し覗くと、中には別に客らしい者を見えず、唯何處ぞなく好い香氣がして、夏なつと佩玉の響がするのみであつた。或は時どすると、玉冠を戴き絳服せうふくを着け、或は絹衣きぬぎを被た若い男女が數人、彼の四邊を取巻いて居るのを見る事もある。そしてその男女は各れも皆身體から光明を放つて、座敷の中に紫の氣がみちみちて居た。或は鄴去春は突然觀中の道士共に眼を乞ふて仙化することを告げてあつたが、其後數日たつと、果して綵雲が觀の庭に下り、天樂が空に聞えて數多の仙官五色の龍や鹿にのつて彼を迎ひに來た。其時附近の者共は明かに彼が雲にのつて昇天するのを見ることを得た。

韓越

韓越は南陵冠軍の人である。幼い時から神仙の道を好み、身粧みづかひなどには少し

も氣を留めず、奇行奇僻頗る多く、殆んど狂氣じみた人であつた。そして始終何か口に唱へて居て、少しも輟めず出て行くにしても一定の方向なく、唯足に任せ、數百里の遠い處を往復して居たが、其時人が其行先を尋ねると、常に口から出鱈目を喋り、誠の事は一言も話さなかつた。其後郷人の或者が薪をとる爲に大陽山に上ると、溪を隔てた向ふの懸崖けんがの石室の中に、韓越が六七人の仙人と一所に仙經を讀んで居るのを見た。然るに其後韓越は山から歸て來て、樸村といふ所に到つた時、突然路の上に斃れて死んだ。其時家人共が其死骸を家に引き取て葬式を營むと、棺が急に軽くなつたので、怪しんで蓋を押退けて見ると、中には唯竹の枝が一本入つて居たのみであつた。宋の孝武帝の大明年間、韓越の郷人て爲台將といふもの、青州に使者となつて行つた事があつたが、青州の南門の邊りて不圖韓越に出遇つた。其時韓越は少しも年老つた容子はなく、顔色も昔の儘であつた。兩人は互に知て居る人々の身の上を話した末、韓越は家に殘て居る自分の妻が、咽喉を患へて未だ癒らない事を聞き、これを温い酒に入れて頓服とんぷくさすれば直ちに癒るからといつて、爲台將に一服の藥を渡してあつた。扱て爲台將は所用を果して故郷へ歸て來ると、韓

越の家人に遇ふて精しく彼の言葉を傳へ、彼から渡された薬を取出して韓越の妻に飲ますと、彼女の病は忽ち癒てあつたさうである。

陶弘景

二五六

陶弘景

陶弘景字を道明といひ、秣陵の人である。彼が母彼を娠むとき、一頭の青龍懷の中から躍り出て、二人の天人香爐を執て、自分の傍にたつて居ると夢見たさうである。

彼幼い時から才智人に優れ、十歳の時葛洪の神仙傳を讀んで、日夜之れを研究したが、是れより彼は養生の術を究めやうといふ志を起し、或日人に向て、人間が志を一にして、勉め勵まば、道を得るのは左程困難な事でもあるまいと言つた事がある。

彼は身の丈七尺七寸、色白く眉秀で、額細長くして額廣く、耳聳えて居た。そして耳の孔に七十本餘の毛が生えて居て、外部に二寸計り出て居た。右の膝には數十の黒痘があつて、其の形が七星の形に似て居つた。彼の父は妾の爲めに殺害されてあつたので、彼は痛く女色の害に懲りたものと見え、終身獨身で暮した。

た。

彼は書を讀んで學博く識高かつたのみならず、琴に堪能で又書にも工であつて、爲す事すること何事に於ても尋常の人に優れて居たから、幼少の頃より早くも其名が天下に聞え、齊の高帝に召されて諸王子の侍讀に任せられた。そして暇があれば門を閉ぢて書を讀む事を樂とし、古聖賢を友として、獨り潛かに精神を養ふて居たが、家が非常に貧しかつたので、縣の令とならん事を奔走したけれど、皇帝其才智を惜んで其願を許さなかつた。

弘景

其處で彼は永明十年終に職を辭し官を罷めた。朝廷にては其功勞に酬へん爲めに

陶弘景



毎月茯苓五斤と白蜜二斤とを賜へ、諸の公卿は盛んに送別の宴を張て、其席に列なる事を非常なる名譽としてあつた。それで當時人々は宋齊以來斯様に優渥なる朝廷の待遇を受け、又斯様な名譽ある送別を受けた人は曾て一人もないと賞讃してあつたさうである。

初て陶弘景は官を辭して故郷に歸ると、やがて句容の茅山に上つて其處に暫時留て居たが、終に其處に一の館をたて、華陽の隱居と稱して居た。彼は始め東陽の孫遊漾に從て道を學び、符圖經法を授けられたが、其後諸々の名山を徧歴して藥草を尋ねまはり、風景のよい處に遇へば、必らず其處に滞在して吟詠に日を送り、心長閑に其日を送て居た。其時會、沈約が東陽の領守となつて居て、彼の名を聞き、其志節の高いのを愛して、屢書を寄せて彼を呼び迎へたけれど、彼は遂に其招に應じなかつた。

永元の初年彼は三層樓を築いて、自分は常に其上層に起臥し、弟子は其中層に住まはせ、賓客は一番の下層に居らしめて居た。そして彼は平常人に面會する事を厭へて、唯一人の家僮の外は、誰人にも自分の室に出入する事を許さなかつた。彼は幼時から騎射に巧であつたが、晩年には一切それ等を廢して、了ひ唯平

生笙を吹いて樂んで居た。又彼は常に松風の音を愛し、庭園には悉く松を植ゑ、風の朝、月の夕、其間を逍遙し、又は其颯々たる松籟の響に耳傾けて、獨り恍然として物外の妙趣に神を淨まして居た。彼又性甚だ著述を好み、學は最も陰陽五行、山川地理、醫術本草、帝代の年歴、天文星學、鑛物工業等の諸學に精通して居た。著述には學苑百卷、孝經論語集註、帝代年曆、本草集註、効驗方、肘後百一方、今古州郡記、圖像集要、王匡記、七曜新舊術疏、占候合丹法式の諸書あつて、今も世に行はれて居る。そして平生常に張良の人物を崇拜して居て、古來此人に及ぶものがないと言て居た。

武帝未だ太子であつた時から陶弘景と親しかつたが、位に即てからは一層親しく彼を禮遇して、折々は勸めて官に就かしめやうとの意志を暗示す事もあつた。其時は彼は毎時も一匹の牛が愉快さうに水澤の畔に彷徨ふて居り、又一匹の立派な身装をした牛が、御者に連れられて何處へか曳き行かれる處を描いて、帝に示してあつた。帝も亦彼が仕官するの意がない事を知て、深くも彼に迫らず、唯國家に關する或大事件が起つた場合には、即ち彼を呼んで一々咨問をなさるゝのみであつた。それで世間では當時彼を呼んで山中の宰相と稱して居た。

而して八十以上になつたけれど容貌少しも衰へず、少壯の人のやうに壯健であつた。其後簡文帝が南徐州に行幸なされた時、彼が名を聞て御前に召し種々物語られてあつたが、其時彼は頭に葛巾を戴て帝に謁え、數日道の事を談して、而して辭し去つた。

陶弘景

二六〇

彼の弟子に桓闓といふものがあつて、道成就して愈々昇天しやうとしたとき、陶弘景は自分は此迄長らくの間道を修行して居て、自分ながらも大に得る所があるやうに覺えられ、且つ又是迄とても左したる過失もないと思ふて居るのに、自分のみは何時までも此世に留め置かれて、何時昇天し得らるゝ事か實に覺束ない、これは果して如何いふ道理であるか、是非一つ探して見て呉れる様にと、吳々も桓闓に依頼してあつた。其後桓闓は或日彼が許に歸て來て、彼の陰徳は頗る大きなもので、既うの昔に昇天すべき筈であつたが、但だ道を行ひ術を施す際に、多く蟲魚等を用ひて生物の命を傷けた爲めに、昇天の時機が丁度一紀丈げ遅れたのである。そして彼は昇天後は蓬萊山にあつて、其仙都の水上監督の重任に就くやうに、略極つてある由を彼に告げ知らした。

其處で陶弘景は仙藥を煉る際、蟲魚等の生物を用ひないで、單に草木の類を以てすることを研究し、別行本草といふ書を三卷著して、多少自分の罪過を贖ふ事を得たが、或日自ら死期の近づいた事を悟り、豫め其日を定めて、辭世の詩を作り、大同二年八十五歳で卒した。顔色は平常の通り少しも變らず、身體も別に硬ばるやうな事もなく、伸縮も自由であつた。そして一種の香氣が其住んで居る山にみち／＼と、久しい間消え去らなかつたさうである。

桓 闓

桓闓は何人の子で、何處の者であるか詳かてない。陶弘景の家僕となつて十餘年の間茅山に住て居たが、性質極めて謹直にして、言語寡く、用なき時は寂然として一室



桓 闓

二六一

に坐し、獨り無爲清淡を樂んで居た。

處が或日二人の少童一羽の白鶴に駕て彼が庭の前に下りた。陶君之れを見て心に天帝が自分へ下された使者であらうと思ひ、倉皇として件の少童を座敷へ招じ入れると、件の少童は自分が今迎に來たのは桓先生であると告げたので、陶君は之れを聞て不少失望してあつたが、扱て自分の門弟共を數へて見れど、桓といふ姓を以て居るものは一人もない、唯自分の下僕に桓闔といふものが居るのみだ。其處で件の少童に向ひ、桓先生とは桓闔の事であるかと問ひ尋ねると、然りと答へた。そして其少童の云ふ所によれば、彼は平生沈黙を守て居て無爲清淡を樂しみ、神を馳せて親しく天宮に朝して居る事が已に九年になつて居るといふ事であつた。

其時桓闔は天帝から賜つた天衣を身に着け、彼の白鶴にのつて、少童と共に昇天して了つた。

寇謙之

寇謙之は昌平の人である。幼少の時仙人の成功興といふ者に從て嵩山華山

等に遊び、仙薬を探て居たが、遂に嵩陽といふ處に住居を定めた。元魏の始光年間、帝に召されて朝廷に到つたが、其の時崔浩といふものが彼に從て道を學ばれた。

或日謙之は數多の弟子に向て、昨夜師の成功興を夢みた事を語り、そして自分は今天帝から召されて嵩山の仙官に任ぜられたことを告げると、其儘俄に卒して了つた。其時煙の様な青い氣が彼の口から出て高く空中に立昇て、而して半途にして消えて了ふと、彼が身軀は見る間に縮少して、終には其姿は掻き消すやうに失せて了つた。其後東郡の沈猷といふものが嵩山で再び彼に逢ふた時、彼の身軀は銀色に輝いて光明日の如くてあつたさうである。

或人の説によれば、成功興或日寇謙之と共に野に出て遊んで居る時、彼に向て、自分が仙化した後、定めて一人の男があつて薬を汝の許へ渡すであらうから、其時は猶豫なく其薬を服するがよいと告げてあつたが、恰度其言の通り、成功興が仙化した後、一人の男が現はれて寇謙之に一箇の薬を與へた。扱て其薬を見ると、蠶々した小蟲で、臭氣鼻を衝き、一見した計りて胸糞が悪くなるやうなので、流石の彼も之れを服しかねて、如何爲やうかと暫時案じ煩ふて居ると、之れを見

支那仙人列傳

た彼男は歸てから斯様々々と一伍四什を成功興に告げた。其時成功興は之れを聞いて、寇謙之が彼薬を食べられないのは、即ち未だ仙を得る時機に達して居ないのであると嘆息してあつたさうである。又成功興が愈々仙化し去る時寇謙之に向て、明日自分が去つた後で、誰れか自分を訪ねて来るものがあるから、汝は跡に残て居て、齋戒沐浴をして件の人を待て居てくれと告げ、其儘石室に入つて息を引き取て了つた。其處で寇謙之は師から頼まれた通り、齋戒沐浴をして待て居ると、果して二人の童子が現はれた。一人は法服を持ち、一人は鉢杖を持って居る。其處で寇謙之は件の仙童をば早速師の屍體のある處に案内すると、今迄臥し斃れて居た成功興が忽ち蘇返て起き上り、彼の童子が持て來た衣服を着鉢杖とを両手に持て、童子と一所に昇天して了つた。

魏の明帝の初瑞二年、或日太上老君が白馬の車にのり、九つの龍を左右に従へて嵩陽山の頂に來り、仙伯の王方平を使者として寇謙之を御前に招き、天師の位を授けられた。其後又彼は老子の玄孫である神人の李譜文に逢ふて、圖籙真經六十餘卷を授けられたが、其後功滿ちて終に昇仙して了つたとのことである。

張 岳

支那仙人列傳

張岳字は巴玉といひ、齊の封川縣の人で、司空の役人になつて居たが、長生の道を好み、一家擧て齋戒沐浴して毎日大洞真經を誦し、三百の大戒を悉く行ふて居る事略、二十年計りであつた。處が或日一人の神人が藜あぶらの杖をついて彼の家を訪つれ、自分は即ち葛洪であると告げて、上帝の命によつて君に金丹火鼎の秘訣を授くるから、之れを以て治ねく人民の貧苦を濟ふてやるがよい、後日道が成就して昇天する時が來たらば、其時再び御目にかゝる。此事は決して他人に漏らしてはならぬと、堅く戒めて其儘立去て了つた。

其處で彼は葛洪から授けられた件の仙丹を石に塗附けて黄金と化し、それを恰ねく世の貧民に施して其難儀を救ふて居た。梁の武帝の天監二年の秋、或夜空中に彼の名を呼ぶものがあつて、明日の朝家人共を引き連れて山へ行くべき由を告げたので、彼は翌朝になると、下婢の盧瓊唯一人を家に殘し置き、他の人々を悉く引率して附近の山に出掛けた。其後一人の疥癩せいかいを病んだ怪しい道士が彼の許を尋ねて來て、主人の留守である事を聞くと、更に酒庫の在所を尋ね、そ

して留守をして居た件の下婢が其酒庫へ案内すると、件の道士は衣服を脱いで酒缸の中へ入り、暫時して其處から出て來たが、其時には全身に出來て居た疥癩は何時の間にか、悉く痕形もなく癒て居た。

其時彼の道士は件の下婢に向て、自分は葛洪である、主人が歸て來たらば左様申し傳へてくれと言て、其儘立去て了つた。張岳家へ歸て來て之れを聞くと大に喜び、早速酒庫へ駆け込んで見ると、酒に一種の微妙な香氣があつて、それが庫一杯に薫ふて居た。其處で家人共は悉く右の酒を酌んで飲んだけれど、彼の下婢の盧瓊のみは穢ならしい道士の疥癩が目にはら付いて、如何しても其酒を飲む氣にはなれなかつた。

其時張岳は沐浴して新しい衣服に着換へ、一家の家族八十餘人を悉く引率して、祥雲にのつて、白日に昇天して了つた。唯彼の盧瓊のみは半空から雲を踏み脱して墜落したが、後上帝が特に彼女を不憫に思ひ、地仙となして長く仙壇を守らしめて居た。

萬振

萬振字は長生、南昌の人である。長生の道を得て、齊梁二朝の間、或時は形を晦まし、或時は姿を現はして居たが、誰一人として彼の年を知つたものが居なかつた。

唐の高宗の時、此處に一人の漁夫が居て、或海濱で一箇の青石を拾つた。其石は長七尺程あつて、それを叩くと、中に音樂のやうな響がする。其處で郡守は委細の様子を具して件の青石を皇帝に献上すると、皇帝は臣下に命じて件の石を擊碎かした。其時中から出たものは二振の神劍で、鐔の上に萬振の姓名を刻てあつたので、皇帝は大に奇異の思ひをなされ、早速萬振を曜日殿に召して、件の劍を彼に下された。

彼は京師に留て居る中、或日俄かに卒して了つたので、之れを或處に葬つたが、其後數日經て再び彼の棺を開いて見ると、彼の屍體は已に何處へか消え失せて居て、中に唯一本の杖と一振の神劍のみが残て居た。其處で皇帝は詔を下して、これは世にも稀なる神劍で、我々凡人の所持すべきものでないからと被仰て、件の劍を一の銅器に入れて、西山の天寶洞の側に埋めさしたさうである。

徐則

徐則は東海刻の人である。性質寡言寡欲にして、幼少の時から隱遁の志が深く、後深山に入つて永年道を修めて居たが、或日太極徐真人が降て來て、年八十以上になつた時皇帝の師となり、然して其後漸く道を得る事が出来るであらうと彼に話した。其處で彼は天臺山へ居を移し、五穀を斷て専ら松の實を食べて居た。

隋の楊帝晉の王となつて揚州を治めて居たとき、書を徐則の處へ送て彼を召し寄せ、道法を授けて呉れと請ふたけれど、彼は未だ其時機が到來して居らぬからと言て道を教へる事を拒んだが、其晩彼は俄かに卒して了つた。時に年八十一歳である。

其處で晉王は委細の様子を認めて彼の遺骸を天臺山に送り返されたが、其日江都の住民で彼の死んだ筈の徐則が平生と別に異りなく、徒歩しながら天臺山へ歸るところを見たものがあつたさうである。

扱て徐則は天臺山へ歸て來ると、其翌年數多の經書及び道法を書き記したも

のを弟子共に分ち與へ、其儘天上へ架けられた石の浮橋を渡つて、何處へか去つて了つた。其後晉王は彼の像を畫工に描かしめ、當時の學者である柳誓に命じて其贊を作らしめた。

白鶴道人

白鶴道人は梁の武帝の時の方士である。平生舒州の潛山の風景奇絶であるのを愛して居たが、此處に又浮屠の寶誌といふものが居て、同じく此山の景色を愛して居た。其處で武帝は此二人に命じ、何か物を以て各自好む所の場所を識るさば、其場所を各に與へて遣ると約束した。

其時白鶴道人は一羽の鶴を飛ばして其鶴が留つた所を以て記とし、寶誌は持て居た錫を投げ飛ばして、其物が落ちた處を以て記とすることに定め、道人先づ一羽の鶴を放すと、寶誌は續いて空中へ錫を投げ飛ばした。其時錫は鶴の後を追ふて空中を飛び、やがて潛山の麓に落ち、鶴は又他の場處へ舞ひ下つた。そして二人は各其場所に一箇の庵室を築いて、其處に住んでゐた。

王 延

王延は字を子元といひ扶風の人である。九歳の時焦贛真人に従て道を學び三洞の秘訣を授けられたが彼は平生松の實を食ひ水を飲んで居た。周の武帝彼の名を聞て都に召し寄せたが暫時すると彼は頻りに眼を乞ふて遂に再び山へ歸て了つた。

彼曾て西岳に寄寓して居た時のことである。燈油が乏しくなれば何時も一箇の皿を庭の前に出して置く。すると何時の間にか油が其中に充満ちりばになつて居つたさうである。そして來客がある時には何處からともなく二羽の青鳥が飛んで來て今日是れくの客が訪ねて來るからと前以て彼に告げ知らして居た。又彼の側には常に虎や豹の猛獸が附て居て暗に彼を保護して居た。

隋の文帝位を皇太子に讓られた時一箇の仙都觀を築て王延に其觀を主らしめて居た。仁壽四年の春或日彼は門人に向て自分は近日中西岳へ歸て行かうと思つて居ると話して居たが或日俄かに卒して了つた。其處で皇帝は彼の死骸を棺に納めて西岳へ送り返さしめ扱て益西岳の舊宅へ到着した時棺の中を

検めて見ると死骸は何時の間にか消え失せて居たさうである。

孫思邈

孫思邈は華原の人である。幼い時から才智人に優れ七歳の時能く千言の文章を誥記してあつた。そして成長するに及んで深く老莊の學を好み周の宣帝の時周の天下が漸く亂れんとするのを見て俄かに世を厭ひ終に太白山に入つて道を學び氣を煉り神を養ふ事に勉めて居た。彼は天文の學に精しく醫藥の事にも通じて居たので人民の難病を濟ふて陰徳極めて多かつた。

或日のこと途に一人の童子が一匹の小蛇を苦めて居るのを見て不憫に思ひ件の蛇を貰ひ受けて之れを衣に包み藥を其傷處に塗て其蛇を傍の草叢の中へ放して遣つた。するとそれから十日計り經て彼再び郊外へ散歩に出掛けると途に一人の白衣を着た少年に遇ふた。其時件の少年は急いで馬から下りて彼の前に踞り自分は曾て彼が爲めに生命を救はれた蛇の兄である事を告げ種々辭退する彼を無理矢理に引立て其家へ連れて行つた。

扱て件の少年の家といふは立派な城郭で庭には花木生え繁り建物は皆金銀

を鉢めて金碧の光は四邊を照して眩ゆい程である。暫くすると數多の従者に附隨はれ帽子を被て絳衣を着た一人の男が出て来て彼を上座に招じ厚く彼の恩義を謝した後、傍への青衣を着た一人の少年を指してこれこそ君に助けられた小年であると紹介し、山海の珍珠を備へて厚く彼を待遇した。然し彼は自分は五穀を避けて氣を服して居る道士であることを告げて、唯酒計りを馳走になつた。

孫思邈

其時彼は潜かに側の人を袖を引いて、此處は何といふ處であるかと尋ねると、其者は此處は徑陽の水府であると答へた。彼は心の中に水底にも不思議な處があるものだと思ひながら、三日計り其處に滞在した後、愈々暇を告げて歸るときになると、主人は數多の金銀絹綉の類を出して彼に贈らうとしたが、思邈が堅く辭して受取らなかつたので、更に其の子供に命じて、龍宮の妙藥凡そ三十種計りを彼の前に持て來さしめ、此は世にも珍らしい藥劑である。君が世を濟ひ人を救ふ上に於て、何等かの御用に立つてあらうからと言て、それを彼に贈つた。

扱て彼は蛇神の水府から歸て來た後、件の藥を人々に試みて見るに、各れも皆著しい効驗があつたので、此藥を千金方の一として厚く珍重してあつた。

隋の文帝彼の名を聞て、徵して國子博士となさうとしたけれど、彼は其召に應じなかつた。然し唐の太宗が召された時、始めて京都へ詣て皇帝に拜謁したが、其時皇帝は彼が容貌の華かて若々しいのに不尠驚かれたさうである。永徽三年には彼が年は正に百餘歳であつたが、或日沐浴して新しい衣冠に着換へ、自分は今から無何有の郷に遊ばうとするのだと言て、家人に別を告げ、其儘息を引き取て了つた。然し一ヶ月餘経ても其顔色少しも變らなかつたが、棺に入れて葬らうとした時、其死骸は何時の間にか消え失せて、唯衣服ばかりが棺の中に遺て居た。

其後唐の明皇帝が蜀の國に行幸なされ

孫思邈



た時、夢に孫思邈が現はれて、武都から産する雄黃といふ藥劑を索め乞ふたので、皇帝は翌朝中使に命じて右の品十斤を齎らし、峨眉山の頂にそれを送らしめて遣ると、山の半頃で頭巾を被り、褐衣を着た一人の白髮の老人が、二人の青衣を着た少童を引具して現はれ、件の中使に向て、傍の大きな盤石を指して、持て來た藥を此石の上に置くやうに命じ、次に其石の上に記されて居る文字を寫し取て、皇帝へ持返るやうに話した。仍て中使は熟と件の石の面を眺めると、其處に藥の禮狀を認めた百餘言の文字が記されて居て、それを初めから寫し取ると、寫すに隨て初の方から文字が次第々に消え失せ、全く寫し了ると、石の上の文字も亦全く消え失せて了つた。そして須臾たつと、白い氣が疾く湧いて來て、件の老人を押包んだかと思ふと、やがて彼の姿は掻き消すやうに失せて了つた。

此處に又成都といふ處に一人の僧侶があつて、毎日法華經を誦して居て、兵亂があつたけれど、幸に兵災にも罹らず、無難に行ひ澄して居た。處が、或日一人の男が訪ねて來て、彼を其家へ請じて、經を誦せん事を乞ひ、而していふやう、自分の老師が疾にかゝつて久しく經てど癒らないので、其處で今貴僧を請じて經を誦して貰ふのである。して自分の老師の聽かんと望んで居るのは、寶塔品の一部

であるとの事であつたが、件の僧は快く之れを承諾して寶塔品を誦して居ると、其處へ老師が次の一間から現はれて來た。老師といふのは、既う大分年が老つた老人で、身には粗末な野服を着、手に藜の杖を携へ、兩方の耳が長く延びて肩に垂れて居た。

扱て件の老人は讀經を聽き了ると、藤蔓で作つた盤に竹の箸をつけ、別に一の盆に麥飯を盛つて、其上に杞菊を挿した數箇の甌を出して、件の僧に供養した。其處で彼の僧は一口件の飯を食べて見るに、鹽鹹の味はないけれど、其美味い事甘露のやうで、普通の物とは全く異つて居た。そして彼の僧が愈々其處を辭して立歸らうとした時に、老翁は錢一鐔を出して彼に與へ、羸の男に命じて彼を途中まで送り出さしめた。其時僧は彼男に密と主人の名を尋ねると、彼男は掌の上に孫思邈の三字を書いて示したので、之れを見た件の僧は大に驚き、再び彼男を見上げた時には、彼男の姿が消え失せて最早其處には居らなかつた。其處で先刻貰つた錢を取出して檢めて見るに、それはやはり眞の錢であつた。

此事あつた後、彼の僧は身俄かに輕くなり、一生無病息災で暮らして居たが、宋の眞宗の時には、已に二百歳を超えて居た。そして其後何處へか立去つて了つ

て、誰一人として其行方を知つたものは居なかつた。

張果

張果は何處の者であるか、其傳記詳でない。彼は平素恒州の中條山に隠れて居て、仙術を修行して居たが、當時已に餘程の年になつて居た老人が未だ兒童であつた時分に、彼は最早數百歳の老人であつたといへば、彼の年は已に幾百歳になるか、殆んど推測する事が出来ない位である。

彼は平生一匹の白い驢馬にのつて、毎日數萬里の道を歩いて居たが、休息する時分は件の驢馬を折り疊んでそれを箱の中に入れるに、其厚さ僅かに紙位しか無かつた。そして復た乗る時には水を口に含んでそれに吹かけると、復た舊の如く白い驢馬となるのであつた。(編者註、世靈家此事を描くに箱を美化して驢馬に變じ、驢馬より馬が飛出す處を描くやうになつた。)

唐の太宗高宗の二帝使を遣して彼を召し寄せたけれど、彼は其の命を奉じなかつた。其後則天武后が彼を召した時に、彼は妬女廟の前で伴て死んだ真似をする時、時は丁度夏の暑い眞盛りで、肉が忽ち腐敗して蟲を生じ、堪へ切れぬ程臭氣が四邊に香ひ出した。其處で武后の使者は彼を全く死んだものと思ひ、其儘

都へ引返して了ふと、其後で張果は再び起上つて恒州へ身を隠した。

開元二十三年明皇帝通事舍人の裴晤に命じて、恒州に到て張果を呼迎へしめ、たが、其時張果は裴晤と對坐して寒暖の會釋を爲して居ると、突然氣絶して倒れ、其儘忽ち息が絶えて了つた。然し須臾すると張果は再び起上つて蘇生返つたけれど、裴晤は之れを見て深くも張果に遁らず、其儘朝廷へ返つて斯く／＼の次第と審さに復命した。其處で明皇帝は更に中書舍人の徐嶠と通事舍人の虎重玄の二人に命じて、天子の御書を持って張果を迎ひに遣し、彼を集賢院に留めて置いて厚く禮遇し、公卿各大臣をして其處へ行て彼に拜謁せしめた。其時皇帝は言葉を低うして神仙の道を問ひ尋ねられたけれど、彼は一言も答へず、而して毎日唯昏昏として睡て居るやうな態で、何一つ食べるでもなく、唯酒ばかり毎日飲んで居た。

或日皇帝が彼を殿上に呼んで酒を饗應ふた時、彼は辭退して、小臣は二升を過せば最う迷酩して了ふので、とても御意に召す事が出来ぬ。唯小臣に一人の弟子が居て、此者なら一斗位の酒は大丈夫飲めるであらうと言つたので、皇帝之を聞て大に喜び、早速其弟子を呼び迎へしめた。須臾して一人の小道士が宮殿の

簾の上から庭前へ降りて來た。年は十五六位で、姿容美しく、態度飽くまでも閑雅て居た。其時明皇帝は側近く彼を呼び、酒を賜ふて略一斗許に及んだとき、張果は最上此上彼に酒を強ひる事を押止め、もし強いて勸めて彼に度を過さしむるやうな事があれば、彼は決と無禮な事を爲出來かすてあらうからと言つたけれど、明皇は少しも聽入れず、頻りに彼に酒を勸めると、彼は全く昏醉して、其儘其處に倒れて了つた。其時冠が頭から轉がり落ちると、酒が噴水のやうに彼の頭から夥しく湧き出し、彼の姿は忽ち化して一箇の榼かきとなつた。之れを見て皇帝を初め、殿上の公卿宮嬪共は皆驚いて目を見張つたが、扱て熱と件の榼を見るに、豈計らんや、それは集賢院の中に在る榼で、其容積は僅かに一斗の酒が入るものに過ぎなかつた。

此他、彼が宮中にあつて行ふた仙術は各れも皆奇々妙々を極めて居て、一々此處に書き盡す事が出來ない。

張果或日人に語て、自分は堯の丙子の歳に生れて侍中といふ役に就いて居たと言つたが、然し彼の容貌を見ると未だ七十歳を超して居るとは見えなかつた。其時邢和璞といふものが居て此人は能く人の壽命を見分くるに妙を得た人て

あつたから、或日彼を呼んで來て、張果の年齢を判断せしめると、唯愕然として何歳位になるか、とんと推測も出來なかつたさうである。又此處に師夜光といふものが居て、如何な無形の鬼神でも明瞭めいりょうと視る事が出來てあつたが、張果丈けは其姿が如何しても彼の目に見えなかつたさうである。

或冬の寒い日、皇帝は密とひそかに酒を張果に勸めた。此頃酒を漬した酒を飲んで、別に苦痛を覺えないものは實に人間以上の者だといふ事が、一般の迷信となつて居たのである。其時張果は三杯計り仰飲あがりのみると最上微醉まろい機嫌となり、如何も不味い酒だと囁きながら其處へ寝轉んで了つた。そして須臾すると、彼は頻りに自分の齒が縮んで行くやうに思はれたので、側の人々を呼んで如意をとつて來らしめ、齒を一々撃ち墮して、それを帶の間に入れ、別に藥を出して齧かにつけると、又玉のやうに眞白な新しい齒がゾクゾク生え揃つた。

又或年皇帝は咸陽といふ處に狩をして一匹の大鹿を獲たので、大官に命じてそれを煮て調理せしめやうとすると、張果之れを押止めて、これは仙鹿で已に千歳の齡を経て居る。昔漢の武帝の元狩五年、臣が武帝に侍つて上林に狩をした時、矢張り此鹿を捕獲してあつたが、其時も直ぐに放ち返してやつたと言ふと、皇

帝は冷笑つて、鹿といつても幾何もある、それに時代が餘り經て居るから、何の鹿であつたか慥かに見分がつきがない、そして又漢の武帝の時の鹿が左様何時までも長生して居る筈がないと言て、容易に彼の言を聽き入れなかつた。其時張果は重ねて、武帝が彼の鹿を放つた時、銅牌に月日を記して、左の角の下に結び付けた筈であるといつて、件の鹿の左の角の下を檢めると、果して二寸許の銅牌があつて、文字は已に磨滅して最う讀むことが出来なかつた。其時皇帝は然らば元狩は今から幾年になるかと張果に尋ねられると、彼は暫時頭を傾けて考へた末、始めて昆明池を開墾したのは癸亥の年であつたと思ふ、そして今年は丁度甲戌であるから、彼是れ今から八百五十二年許り昔であらうと答へた。其處で早速太史を召して曆を校べさすと、果して彼が言ふ處と大差がなかつた。

或日のこと皇帝は葉法善といふものに向て、張果は随分不思議な人物であるが、果して如何なる者であるかと尋ねられた。其時彼は答へて云ふやう、小臣はそれを能く知て居るけれども、若それを言へば、小臣は忽ち死して了はねばならぬから、答する事は出来ぬ。若し陛下是非にそれを聽きたいと思召すならば、玉冠を脱ぎ、跣足になつて、小臣の一命を救ひ玉ふべき事を約束なさるゝならば、

お話申してもよろしいとの事であつたから、皇帝は若し話して聞かすならば如何んな事でも爲ると堅く約束をなされた。其時葉法善は、張果は普通の人間ではない、彼は天地が漸く出来上て、混沌が漸く分れ初めた頃、其處に生れた一匹の白い蝙蝠であると言ふと、其儘目鼻から夥しく血を出して地上に僵れ伏した。之れを見て皇帝は大に驚き、急ぎ冠をとり、跣足になつて、深く自分の罪を謝罪せられると、其處へ張果が忽然として現はれ出で、此奴饒舌者、天地の機密を漏らす恐があるから、嚴重に所罰して遣り度いけれど、陛下が切りに哀願しなされるに免じて、今度丈けは一命を助けて遣ると言て、水を含んで彼の顔に吹かけると、彼は復た舊の如く蘇生返つた。

其後皇帝は益々張果を重んじて、その像を畫工に描かしめ、之れを集賢院に掲げて更に大尊號を贈て通玄先生と稱して居たが、張果は頻りに暇を乞ひ、終に恒州へ歸て了つた。其時皇帝は彼に絹三百疋を賜はれた。天寶の初年、明皇帝再び使を遣して彼を呼び迎へしめると、張果は之を聞き、何んと思つたか俄かに卒して了つた。其處で彼の弟子共が其死體を葬らうとして、ふと其棺を開けて見ると、彼の死體は已に其中に在らなかつた。皇帝之れを聞て、接霞觀をたて、永く

崔子玉
彼を祀られたさうである。

崔子玉

崔子玉名は珽といひ、（たか）蔚州彭城の人である。彼は晝は人間界の事を掌り、夜は陰府の事を理めて居たので、世間で一般に彼を崔府君と稱して居た。彼が父の譲は、初め子が無かつたので、妻と共に衡岳の神に禱ると、或夜夢に一人の仙童が一箇の玉の箱を捧げて来て、これは上帝から汝等夫妻に下し玉はつたものであるといつて、彼等夫婦に件の箱を授けた。仍て件の箱を開けて見れば、中に美麗な玉が二つ入れてあつたので、夫婦は各一つ宛呑むと見て、夢が忽ち醒めて了つた。其後妻は崔子玉を娠んで、隋の大業三年六月六日彼を産んだのである。

子玉幼い時から才智人に優れ、遊戯するにも世の常の小兒とは大に異て居た。唐の貞觀七年に進士の試験に應じて及第し、瀛州長子縣の知事に叙せられたが、妖鬼を拂ひ、姦邪を摘發すること神明の如く、國治まり民安らかにして、人々皆其神徳に服して居た。

或日一つの布令を出して、五月望日から望の後の一日までは一切射獵しては

ならぬと嚴達した處、人民の中に潜かに郭外へ出て兎一隻を狩取つて、役人の爲めに召捕へられた者が一人あつた。其時子玉は件の罪人に向て、此官廷で所罰せられん事を願ふか、それとも又陰府で處刑を受けん事を望むか、何ら（ど）を好むかと尋ねた時、件の罪人は陰府は目に見えぬ處で死なねば行かれぬ場處であるから、早速陰府で處刑を受けたい旨を答へた。其時子玉はそれならばと言て、直ちに彼の縛を解いて放ち返さしめた。處が其夜彼の獵人の夢に一人の黄衣を着た鬼が彼の家へ遣て来て、無理に彼を棺のやうなものの中へ入れ、それを或宮殿の中へ運び行くと、やがて彼を其處から取出して廣庭へ引出した。上座を見上ぐると、其處に子玉が玉冠を戴て嚴然と控へ、そして又左右には數多の冥官が控へて居て種々と罪狀を取調べ、其罪の輕重によつて或は其壽命を縮め、或は其幸運を減じ、或は祿位を削ぐ等、夫れ々の刑罰を行ふて居たが、今彼の獵夫を見るに先づ一通り其罪狀を取調べた末、明晩判決を言渡す由を示げて、再び彼を棺のやうなものの中へ入れて自分の家へ歸らしめた。斯様に彼は其後毎夜夢の中で刑罰を受けて惱み苦しめられたので、痛く後悔をしてあつたさうである。

此處に雕黃嶺に一頭の虎が棲て居て人民に害をなす由を聞き、崔子玉は早速

孟完といふものを遣して件の山に赴き、其處に祀てある祠に一枚の符を納め、
すと何處よりともなく、件の虎が現はれて来て、件の符を口に啣へ、孟完の後に附
隨て縣廳へやつて来た。其時子玉は件の虎を叱て其罪を責めると、件の虎は自
ら階段の石に頭を撲き付けて死んで了つた。又太宗の時崔子玉は滄陽縣の知
事に遷されたが、其縣の西南五里の處に一の大河があつて、或年河水氾濫して多
くの田畑を害する事があつた。其時、彼は河の上りに一の壇を設け、其上に立て
上帝に訴へると、忽ち江の中から一匹の死んだ大蛇が水面に浮び出た。其後件
の河は長く氾濫するといふやうな事がなかつた。

或日のこと崔子玉は揚叟といふものと博奕を爲て樂んで居ると、其處へ忽ち
黄衣を着た男が數人現はれ出て、手に符を持って来てそれを子玉に渡し、上帝の命
を奉じて、彼を磁州郡の長官に任して其土地を理めしむる旨を告げた。と、暫時
して又百餘人ばかりの大勢が玉の珪玉の帶、紫の官服と資冠とを捧げて彼に與
へ、五岳の名を列記した旗を押し立て、籥を鳴らし、樂を奏して、其盛んなること、丁
度王侯の行列のやうであつた。そして又暫時すると、一人の神仙が恭しく一頭
の白馬を率ゐて来て、子玉を其上に乗せ、愈、昇天し去らうとした時、子玉は暫時馬

の足をとめて、自分の子二人を側近く呼び寄せ、自分が愈、此世を去る事を告げ、
そして百字の銘を書いて、二人に與へ、吳々も後來を戒めてあつた。其時彼の年
は正に六十四歳である。

安祿山が反した時、玄宗皇帝或夜夢に一人の神人を見た。其時件の神人は自
ら滄陽の長官崔瑗である事を名乗て、賊は自づと滅亡するであらうから、別に心
配するに及ばぬと告げて消え失せて了つた。其處で皇帝は其翌日早速子玉の
廟を建て、彼を封して靈聖護國侯とした。

宋の高宗金の兵に破られて鉅鹿へ遁れた時、馬が斃れて了つたので、跣足にな
り、折柄の烈しい雨を冒して何處ともなく道を辿て來ると、忽ち路三方に岐れて
居る處へ出て、何方へ行けばよいやら途方に暮れて居る處へ、忽ち前方に一匹の
白馬が現はれた。其處で其馬を捕へやうと思ふて其後を追かけながら、不知不
識一箇の神社に達した。其處で其祠の廡下へ進みよつて見るに、傍に一箇の土
で作つた白馬があつて、それが全身汗みどろになつて居た。其時日はドンブリ
と暮れて了つたので、其一、夜は祠の廡下に明す事にした。然るに夜半になつて
紫衣を着た一人の男が現はれて、持て居た杖で地を叩きながら、帝を廡下から追

出すと夢見て忽ち目が醒めた。

其時帝は俄かに空腹を覺えて堪へ切れなかつたが、祠の中で何者か人の聲がするので、中に這入つて壇上の木像を見ると、それは即ち夢の中で見た紫衣の男で、上の額には、磁州都土地崔府君の八字を題してあつた。そして何者の仕業か其額の後に一箇の器物が隠して在て、中に肉が澤山入れてあつた。其處で、皇帝は充分に其肉を食ひ了り、扱て外へ出て見ると、復た囊の白馬が居て帝の前にたつて道を案内し、斜橋谷といふ處に到て俄かに何處へか消失せて了つた。處へ耿南中（耿南中）が民兵數千を率ゐて皇帝を探し求めて居るのに出逢ひ、遂に無事に身を全うする事を得た。仍て皇帝は崔府君の恩に謝せんが爲めに、其後立派な廟を立て、彼を祠られた。

明崇儼

明崇儼は洛州の人である。父は安喜といふ處の長官で、其時父の屬吏に能く鬼神を使ふ男が居たが、崇儼は其者に從て盡く其術を授けられた。其後彼は唐の高宗に召されて朝廷に仕へて居たが、或年夏の真中に帝が雪を望むと、彼は暫

時の間に陰山へ往て氷雪を取て來て帝へ進めた。又或年冬の寒い日に帝が瓜を望むと、彼は又錢百文を以て直様何處からか瓜を購ふて來た。其時皇帝は彼に何處から求めて來るか尋ねられると、緱氏老人の畑から購ふて來た由を答へてあつた。其處で皇帝は早速件の老人を召して瓜の事を尋ねると、彼は此頃一の瓜を得て、これを土中に藏して置いたら、それが何時の間にか紛失して了ひ、其代り錢百文を其處から掘り出した由を物語つたさうである。

章善俊

章善俊は京兆の人で、母の名は王氏といふ。初め彼を娠んだ時、魚肉の類を食べると腹が痛み出し、野菜を食べると別に異状もなかつたので、母は潜に此事を不思議に思ふて居た。

善俊は生れて十三歳になつた時、道士の韓元最に遇ふて仙道の秘訣を授けられ、其後は二人の少童が常に彼の左右に侍て居た。彼は聖中の後を嗣て昇仙觀に住て居たが、或日一人の神人が現はれて、汝は抑も何者なれば無斷に此處へ來て住み込んで居るのか、一刻も早く此處を立去らばよし、さもなれば辛き目に遇

して遣らうと叱つた時善俊は微笑を含んで、神人は自分を試めず爲めに左様な事を被仰るのであらうといつて少しも意に留める様子がなかつた。之れを見て、件の神人は俄かに疎忽の罪を詫びて立ち去つて了つた。

善俊或年所用があつて、壇城の店先を通ると、店の邊りに一匹の黒犬が居て彼を見ると馴々しく寄り近つき、其儘彼に付き隨て離れなかつたので、彼も件の犬を家へ連れて歸り、名を烏龍と呼んで戀ろに養ふて居た。そして後年彼が太上君から召されて、昇天し去る時、彼の犬は忽ち變じて長さ數丈の黒龍となり、善俊を乗せて何處ともなく飛び去て了つた。

王遙

王遙字は伯遼、江西鄱陽の人であるが、仙術を學んで能く病を治すに妙を得て居た。そして彼は病を治すに符水とか又は仙丹等のものを用ゐず、唯八尺計の幅廣の布をとつて、それを病人の下に敷かしむるのみであつた。又邪鬼等の妖物を追拂ふときには、地上に獄の形を畫き、そして石を叩いて件の邪鬼共を呼びよせ、彼等を悉く件の獄の中に押籠めて、手強き罪科に處するのであつた。

曾て一人の弟子に竹篋を負はしめて、遠地に旅行することがあつた。其時雨に逢ふても彼の衣服は決して濡るゝといふ事がなかつた。然るに或夜山路にさしかゝると、二つの炬火が突然前に現はれて彼を導いて前へ進むので、彼は心に不審を抱きながらも件の炬火に隨て行くと、圍ある一の石室に達した。其處には二人の神人が居て、其夜は一所に音楽など奏して楽しく打明した後、さて翌日其處を辭して立去らうとすると、件の二人の神人は王遙に向て、何故何時までも人間界に留て居るか、早く仙界へ來たがよからうと責めたので、彼は直ぐに再び此處へ來る由を答へ、其儘其處を辭して我家へ歸ると、今度は彼自ら件の竹篋を背負ふて、何處ともなく立去つて了つたさうである。

司馬承禎

司馬承禎字は子微、洛州温の人である。潘師正に従て仙道を學び、悉く其秘訣を授けられ、其後治ぬく諸國の名山を遊歴して居た。唐の武后に召されて朝廷へ到つたけれど、幾程もなく其處を立去て了つた。そして陳子昂、王維、李白、孟浩然、賀知章、盧藏用、宋之問、王適、畢構の輩と相往來して、悠々浮世を餘所に閑日月を

送て居た。世人以上の十人を指して仙宗十友といつて居る。

睿宗の世京師に召されて身を治むるの道を尋ねられた時、彼は道は日に減損して行いて無爲といふ静寂の境に到るのが極致で、是れ即ち身を治むるの法であると答へ、又重ねて國を治むるの道を尋ねられたるに對しては、國は恰かも身體と同じ理窟で、心を虚うし、氣を養ひ物と共に消長して相忤ふ所なく、又何事についても私を挟む所さへなくば、天下は自ら治まるであらうと答へた。

司馬承禎朝廷を辭して天台に歸つて來た時、盧藏用は終南山を指し示して、彼の山中に甚だ景色の優れた處があるから、彼處へ行つて住んだら如何だ、何にも天台に限る譯でもあるまいと言ふと、承禎は、否然うてない、僕の身から見ると、彼の終南山は仕官を望むものゝ、撰び住むところて、其等の者の爲めには至極都合の好い山であらうと答へた。初め盧藏用が此終南山に隠れて居る中、不圖朝廷から呼び出されて暫時官途に就いた事があるので、彼は態々斯く言つたのである。

此處に焦靜貞といふ婦人が居て、良師を求むる爲めに遙かに海を超えて蓬萊山に到つた時、其處で遇然一人の道士に逢ふて、天台に司馬承禎といふ有徳の

真人が居る由を聞き、急ぎ本國へ歸て來ると、直様天台山上つて承禎に面會し、彼に從て大に道を究めてあつたが、其後程なく、彼女は昇天して了つた。然るに其後彼女は再び此下界へ降て來て、薛季昌といふものに、司馬承禎の道德高く、やがては東華上清真人の位に任ぜらるゝ人である事を告げたさうである。

唐の開元年中、文靖天師が承禎と一所に千秋の賀節に赴いた時、終夜齋をして獨り長生殿に直居して居ると、夜半になつて、四邊も物靜かになつた時、何處やら清い聲で小兒の經を讀む聲がするので、密と物蔭から覗いて見ると、其聲の主は承禎であつた。熟々みると、彼が額の上に錢の大きさ程の光があつて、それが四邊に照りかゞやいて居る。そして件の聲の出るところを能く見極むると、それは全く承禎の頭の中から自づと出て來る聲であつた。彼は其後人に向て黄庭經に、泥丸九真皆房あり、方圓一寸此中に處る。といつて、真人の腦中には一個の圓光が在るといふ事を聞て居る。又昔左神公子といふ仙聖は夜寝て居て自然に言語を發して居たと聞て居るが、今承禎は果して其れと同一である。彼は實に世にも稀なる高德の仙聖であるといつて、痛く彼を嘆賞してあつた。

承禎一日弟子共に向ひ、玉霄峯に上つて東の方蓬萊山を望むに、近頃其處は新

たに一人の神仙が降て来て居る。そして自分は今東海小清童君東華君の許より使を以て呼び迎へられて居るから直ぐに其處へ行かねばならぬ由を告げて、其傭蟬脱して昇天して了つた。年は丁度八十有九。玄宗皇帝親ら彼の碑文を撰ばれた。後世彼の住んで居た處を馬仙村といつて居た。

彼の著書には修真秘旨、天地官府圖、坐忘論、登真系等の數種がある。其後彼は皇帝から銀青光祿大夫の位を贈られ、更に貞一先生の證を賜はられた。

謝自然

謝自然は蜀の華陽の女仙である。幼少の頃から才智人に優れて居た計りてなく、容姿も清爽せいそうて何處となく氣高く、言語といひ、舉動といひ、總てが普通の人と異つて居た。

處が或日一人の道士に逢ふて黄老の仙經を授けられ、それより年四十の時家を出て有らゆる名山の洞府を訪ね、靈跡と聞けば如何な處へも尋ね往てあつたが、或日天台山の玉霄峰に司馬承禎といふ神仙が住んで居ると聞て、早速其處へ尋ねて行き、弟子となつて薪を採つたり、炊事を爲たりして篤く彼に仕へて居た。

或日承禎は彼女に其欲する所のものは抑も何であるかと尋ねると、彼女は渡世の法を授けて貰ひたい趣を話した。承禎は淺墓な女の考から、終には大道を授すやうなことになるは爲ないかと心配したので、其時は暫時沈思黙坐して居て、敢て其法を傳へやうとは爲なかつた。

然斯して居る中早くも一年は経過して了つた。然し承禎は少許も其法を授けて呉れる様子は見えないので、謝自然も今は大に失望し、蓬萊に往つたらば定めて良師が居るであらうと思ひ、或日突然承禎の許を暇を乞ふて立出て、一枚の蓆じふを波の上に浮べ、其上に乗て海を渡らうとしたが、途中で新羅の船に逢て、其船に乗移り、數ヶ月波の上を先へくと進んだが種々の氷怪に出喰し、辛い目に逢ふたのみならず、波が荒らくて、到底も先へ進まれさうにも見えなかつたので、遂に圖ある孤島に船を着けて、一夜を其處で明かすことにした。

其時自然は獨り岸の上の上陸して、或山の頂に登り、四邊の景色を眺めて居ると、忽ち數人の道士が青衣を着た數多の從者を引連れて、其處へ現れた。そして其中に容姿端嚴にして玉冠を戴いた一人の道士が居て、自然を見、汝は何者で、そして又何處へ行くのであるかと尋ねた時、彼女は自分の名を名乗り、且つ是か

貞孟
 二九四

ら蓬萊へ往て良師を探さうと思て居ることを物語ると、件の道士は笑て言ふやう蓬萊は此處から東の方大凡三千里の波路を隔て居て、船などの通すべき處でない、道德の極めて優れた仙人でなければ到底其處へ到ることは難しい。それよりも汝の師である司馬承禎こそ道德深甚の神仙であるによつて、是から再び本國へ立返り、司馬承禎に就て熱心に修行した方が汝の爲めによいのであると痛く彼女の心得違を警めたので、之れを聞た彼女も、今更自分の輕卒であつたことを大に後悔し、直ちに舊の船へ歸て來て、それから數月計り經つと、再び天台山へ歸て來た。而して再び司馬承禎に謁えて委細包まず打明かし、深く自分の罪を詫びたので、承禎も大に氣の毒に思ひ、其程熱心なのであるならば早速教へてやらうと云て、吉日を撰んで高い壇を築き、上清の秘法を悉く彼女に授けた。扱て謝自然は茲に年來の宿望を遂ぐることを得たので、其後蜀の國へ歸て來て居たが、貞元十年の某日白晝に雲にのつて昇天して了つた。

貞孟

貞孟は何處の人であるか詳かでない。

平生酒を飲み丹藥を服し、年四百歳になつたけれど、顔色艶々して居て、恰かも少女のやうであつた。彼又飛行の術に長じ、空中に坐て居ながら地上の人と談話をする。又地中に入つて姿を隠すに、先づ足から次第に地中へ没して、腰胸に及び、終に全く身を没して了ふのである。又指を以て地を掘る真似をすれば、忽ち其處に一の井戸が出て、清い水が頻りに湧き出る。又手をあげて屋根の瓦を指すと、瓦が自然に此方へ飛んで來る。曾て桑葉を摘採る事があつたが、其時數千株の桑葉一時に飛んで來て、小山のやうに堆高く積み上つた。其後十餘日程經てから息氣を強めて此桑の葉を吹くと、一枚々々復た舊の枝へ飛び歸つて前のやうに青々と繁つた。又墨水を口に含んで白紙の上へ吐き出すと、それが即ち文字となる。而かも其文字は何れも皆夫れ／＼或意味をなして居たさうである。其後彼は大治山の奥へ入つて仙化して了つた。

許宣平

許宣平は新安歙縣の人である。唐の睿宗の景雲年間に、城陽山の南麓にある小さい塙の上に一の庵室を築いて其處に住み、靜かに仙術を修めて居たが、顔は

丁度四十位に見え、脚非常に早く、驅けて行く馬にも容易く追ひ付く事が出来てあつた。そして時々薪を賣りに市へ出る事もあつたが、其都度彼は擔ふて居る薪の上に一の酒瓢を結び付け、夕方微醉機嫌になつて鼻唄うたひながら家へ歸て来る。其唄はかうである。

負薪朝出賣。沽酒日西歸。借問家何處。穿雲入翠微。

かやうにして時々市へ通つて居る事が略三十餘年であつた。彼は錢があればそれを貧人に頒ち與へ、又病に苦んで居る者には藥を與へて其生命を救ふて居た。そして若し人が彼の家へ尋ねて往くと、彼は毎時も不在で、唯壁の上に次のやうな詩が題されてある。

隱居三十載。築室南山巔。靜夜翫明月。閑朝飲碧泉。樵人歌隴上。谷鳥賦岩前。樂矣不知老。都忘甲子年。

彼の作つた詩は大分多くあつたけれど、彼は別にそれを録し留めて置くといふ事なく、常に驛の宿舍の壁へ其詩を書き付けて置いたので、當時驛舎などで流して居た歌の中には彼の詩なども大分多かつたさうである。

李白曾て東方に遊んだ時、旅舎の壁に張てある彼の詩を見て、これは極めて道

徳の高い真人の作つた詩であると言て大に感嘆してあつたが、後宣平が作つた詩であると聞て早速新安に行いて彼を尋ね、其後も度々彼の許を訪づれた。然し宣平は毎時も不在であつたので、李白は終に左のやうな詩を壁の上に題して歸つた。

我吟傳舍詩。來訪仙人居。烟嶺迷高迹。雲林隔太虛。窺庭但蕭索。倚杖空躊躇。應化遊天鶴。歸當千歲餘。

宣平家へ歸て來て此時を見、自分も亦次のやうな一詩を題した。

一池荷葉衣無盡。兩畝黃精食有餘。又被人來尋討著。移庵不免更深居。

其後彼の庵室は野火の爲めに延焼して了つたが、宣平は何處へ行つたか、其妻は終に見えなくなつた。然るにそれから百餘年経て懿宗の咸通十二年に、彼が曾孫の許明恕といふものゝ下婢が一人の僕をつれて、或日南山へ薪を探りに行つたとき、山中に一人の男が石の上に腰をかけたが、頻りに桃を食べて居るのを發見した。其時件の男は彼下婢に向て、汝は許明恕の下婢であるか、我は即ち明恕の祖先に當る宣平といふものである、家へ歸つたら左様主人へ言傳へてく

れと言て、一の桃をとり出して彼女に與へ、そして復た此處の山神が此桃を非常に惜むによつて、此桃を家へ持て歸らずに、此處で早速食べて了はなくてはならぬぞと言つたので、件の下婢は、其桃を食べて見ると、其味が形容の出來ない程美味しかつた。

扱て下婢は家へ歸ると、主人の明恕に宣平に逢つた一伍四什を物語つた。其時彼女は長者を呼ぶ禮式も何にも知て居らなかつたので、宣平の諱を其儘に言ひ出すと、主人の明恕は腹を立て、禮を知らぬ女だといつて、杖を以て彼女を散々に撃つた。すると、彼女の女の姿は忽ち掻き消すやうに失せて了つたが、其後或人が南山で彼女に出逢ふた。其時彼女は顔は非常に若々しくなり、身に樹の皮を着て、とある林の中へ駆け込んで見えなくなつて了つたが、其歩の早い事は丁度鳥が風を切て空を飛ぶやうであつたさうである。

王可交

王可交は華亭の人である。毎日河へ往いて釣をして居たが、或日河の中流に一艘の彩舫を浮べ、中に七人の道士が居て、頻に彼の名を呼んで居るやうに覺え

たので、王可交は不審に思ひながら、靜かに舟を進めて、彼の船に近倚て見ると、中から一人の道士が現はれ出て、王可交に向ひ、汝は仙人の骨相を備へて居るから、努めて道を修業するがよいといつて、二つの栗を與へた。食べて見ると、飴のやうに甘かつた。其時件の道士共は一人の黄衣を着た男に命じて彼を岸迄送り返さしめたが、扱て岸に上つてから振返して見ると、今迄自分が乗て居た舟も、自分を送て來た男も、何處へ行つたか、忽ち其姿が見えなくなつた。そしてフト頭をあげて四邊を見廻すと、自分が今立て居る處は天台山の瀑布寺の門前であつた。て、王可交は暫時夢心地で其處に立て居ると、一人の僧が出て來て彼を見咎めたので、彼は路に迷ふて此處へ來た事を示げ、且つ自分が家を出たのは三月三日である事を告げると、件の僧は今日は九月九日であるから、最う君が家を離れてから彼是れ半年計りになるぞと言つたので、之れを聞て彼は益々驚いて了つた。其後彼は五穀を斷て道を修め、妻子をつれて四明山に上つたが、何處へ行つたのか、其後彼の姿を見たものは一人もなかつた。

李筌

李筌は幼少の時から神仙の道を好み、自ら達觀子と稱して少室山に住んで居たが、嵩山の虎口巖の邊りて一の立派な玉の匣（匣）を拾ひ、中を開て見ると、黄帝の陰符經が入つて居た。それは即ち寇謙之が曾て此處に藏つて置いたもので、大分年數が經て居る爲め、本が痛く靡爛して居たのを彼は丁寧（丁寧）に修繕を加へ、其中から肝要な處だけを抄録して、それを數千度繰返して讀んで見たけれど、遂に其意味を曉る事が出来なかつた。

其後葉の國へ行つた時、彼は驪山の麓で一人の老姥に逢ふた。其老姥といふのは頭の上に髻を結つて、周圍の髪を肩へ散らし、着て居る衣服は散々に破れて、杖に倚りかゝつて居る様一見して普通の者でない事が分つた。其時偶々路傍に樵夫共が遺した火があつて、それが燃え出して側（側）の樹に焼け移つた。之を見たら、件の老姥は獨り點頭（點頭）しながら、火は木より生ず、禍發して必らず尅すといつたので、李筌之を聞き大に驚き、此語は黄帝陰符經の中にある語である、それを知て居る汝は果して如何なる者であるぞと尋ねると、彼の老姥は齒をむき出して笑ひながら、自分が陰符經を受けてから最う三元（三元）五百六十年（五百六十年）と六ヶ年になる。それは鬼も角として、それを知て居る汝は抑も何處の者であるかと尋ねた。其處

て彼は事細かに嵩山で陰符經を發見した事を物語るると、彼の老姥は熟々と彼の容貌を打眺め、汝の骨相を見るに、賊に道を得るの相が備て居るといつて傍の石の上に腰を下し、夕方まで彼の爲めに陰符經の講義をなし、更に彼を家へ連れて往つて麥飯を馳走した。そして暫時すると、彼の老姥は袖の中から一の瓢を取出して、李筌に溪の水を汲んで來いと吩咐けた。

其時李筌は件の瓢を持って溪へ下り、水を其中へ一杯に注ぎ込むと、忽ち其重さが千斤以上になつて、自分の力ではとても支へる事が出来ず、見る／＼其瓢を水の中へ沈めて了つた。其處で彼は太に驚き、急ぎ老姥の許へ馳せ歸て見ると、其の老姥も家も消え失せて、唯麥飯のみが數升ばかり、其處に遺て居たので、彼は其麥飯を飽くまで食ひ食つたが、それから彼は全く五穀を斷つようになつた。

唐の開元年間に彼は江陵の節度使の副御史中丞となつたが、此時彼は太白陰符經十卷を著し、又中台志十卷を作つた。然し李林甫といふものが居て、彼を極力排斥したので、彼は竟に官を辭して山へ隠れ、其儘其行方を晦まして了つた。

李白

李白字は太白といひ、興聖皇帝九世の孫である。彼の父は隋の末年西域に徙つたが、神龍の初年、中國へ歸て巴西といふ處に滞在して居た。彼の母或夜長庚星が懷に入ると夢みて李白を孕んだので、李白と名づけたとの事である。彼は年十歳の頃から詩文及び經書に通じて居たが、成長すると岷山に隱れて官に就くことを欲しなかつた。其時益州の長史に蘇頌といふものが居て、或日彼を見て大に其才學を賞し、漢の相知にも劣らぬといつて感嘆してあつた。其後李白は長安に赴いて賀知章に面謁した時、賀知章は彼の詩を見て大に其才學を愛し、彼を玄宗皇帝に薦めた。其處で皇帝は彼を金鑾殿に召して時事を訪ねられると、彼は頌一篇を賦して奉つた。そして皇帝が彼に御馳走を賜つた時、彼は親ら一切の料理をしてあつたので、皇帝は早速詔を下して彼を供奉翰林に任じられた。

皇帝或時沈香亭に宴を開いて牡丹を賞せられた時、李白を召して樂章を作らしめんとし、使者を彼が許へ遣はすと、彼は丁度其時醉ひ臥して居て、搖り起しても中々目を覺さなかつたから、左右に附て居た人々は冷水を持って來て彼の顔に潑いたので、彼はやうく目を醒して、皇帝の前へ伺候した。其時皇帝は特に

李白

三〇二

愛妃の揚貴妃に命じて李白の爲めに其硯を捧げしめたが、彼は筆を揮て清平調の詩三篇を書して奉つた。それから宴會ある毎に必ず彼を召して興を助けしめて居た。

或時李白は痛く酒に酔ふて前後を忘却し、高力士に命じて自分の靴を脱がしめたことがあつた。然るに高力士は彼が驕慢なのを憤て痛く此事を遺恨に思ひ、李白を惡様に讒したので、皇帝は大に憤て彼を重き罪に處せやうとしたが、揚貴妃が種々と皇帝を宥めたので、彼は一命を助かる事が出来た。白

此事あつてから彼は自分が朝廷の籍紳共に容れない事を覺



李白

三〇三

り、益々放縱に身を持ち崩して、張旭等と毎日酒を飲んで酔ひ倒れ、自ら稱して酒中の仙と言て居たが、後幾程もなく、官を辭して山へ歸つて了つた。そして安祿山が謀反した時、永王璘李白を召して謀主としたが、軍敗れて、李白却て敵に捕へられ、今や將に斬られんとした時、此處に郭子儀といふものが居て、曾て并州といふ處で罪を犯して將に刑せられんとした處を、李白の爲めに救はれてあつた恩義を深く感じて、自ら其官位をすて、且つ皇帝から賜はれた銀印を賣て、其金を以て李白の罪を贖つたので、李白は死罪になるべき處を一等減ぜられて、夜郎といふ所に謫流せられた。其後彼は大赦に會ふて再び潯陽に歸て來たが、其後又或事に連坐して獄に縛がるゝ事となつた。然るに此處に宋若愚といふものが居て、吳の兵三千許を率ゐて河南に赴く途次、會々此潯陽を通つて李白が獄中にある事を聞き、早速獄中から彼を救ひ出して參謀とした。然し彼は其後幾程もなく又自ら職を辭して了つた。

其後代宗皇帝使を遣して李白を召しよせやうとしたが、彼は酒に酔ふて河の中に墮ち、水に溺れて死んだといふ事を聞て、即ち其事を止められた。

其後元和の初年、或人が海上で李白に逢ふた事があつた。其時李白は一人の

道士と高い山の上に坐つて樂しさに話して居たが、須臾して件の道士と共に一頭の赤虬に乗て何處ともなく飛び去て了つた。

此處に白樂天の後裔に白龜年といふものが居たが、或日嵩山に上つて四方山の景色を賞美して居ると、忽ち一人の男が現はれて、李翰林相の使者である事を告げ、彼を引連れて一人の衣冠束帶した風姿の立派な神人の前に案内した。其時件の神人いふやう、我は即ち李白である。唯今は神仙となつて、此處に居て上帝に賤奏する一切の役を掌て居るが、既う殆んど百年許りになる。君の祖先である白樂天は現に五台にあつて功德所を掌て居る。彼はかく言ひ了つて一巻の書を取り出し、此書を見れば禽鳥のいふ事が總て解るといつて、それを白龜年に與へた。

其後世の傳ふる所によれば、李白は東華上清宮の監督で、清逸真人となり、白樂天は蓬萊の長仙主となつて居るといふことである。

殷七々

殷七々名は文祥といひ、又道筌ともいふて居た。深く仙術に達して居て、冷ね

く天下を遊歴して居たが、年は幾何になるか、誰一人としてそれを知つたものは無かつた。曾て經州といふ處で藥を賣て居たが、靈台の蕃漢といふものが病にかゝつた時、彼の藥を買うて服すると立處に治つて了つた。而して彼は錢を得れば悉くそれを貧しい者に與へ遣して居たので、世間の人々は皆彼を神の如く尊んで居た。

唐の周室といふ者が浙西地方を鎮撫して居た時に、七々の名を聞て或日彼を召寄せ、扱て聞く所によれば、汝は種々の仙術を知て居て、自由に花を咲かしむことを得るさうである。因て此九月九日の重陽には、自分の爲めに是非一度其仙術を演して呉れまいかと頼むと、七々は快く承諾した。扱て愈々九月九日になると、俄かに四方の山々峰々が花を以て埋められ、恰も陽春三月頃の陽氣と少しも變らなかつた。其處で周室は數多の從者を引連れて、其處此處と毎日遊興に浮かれて居たが、數日經つと、件の花は一時に消え失せて、再び元の淋しい秋色に立返つた。

其後或日のこと、周室は數多の賓客を招いて酒宴を催すことがあつて、七々も同じく招かれて其席に連なつたが、其時席に待つて座興を助けて居た倡優の中

に一人の婦人が居て、七々が獨り一座の人々から痛く尊敬せらるゝのを見て、妬ましく思ひ、彼に對して始終輕蔑の態を示して居た。

其時七々は之れを見て、一つ彼の婦人を困らして遣らうと思ひ、忽ち二つの栗の實を取出して、それをば名々隣から隣へと順々に送り傳へしめた。處が此栗の實は一種言ふに言はれぬ美妙の香を放つので、一座の人々は自分の許へ栗の實が廻て來ると、誰も彼も、件の栗を鼻の先へ持て來ては、其香を賞美して居たが、やがて栗の實はめぐり廻つて、彼の倡優の許に到ると、案の如く、彼女も亦栗の實を鼻の先へ持て來て一寸其香を嗅いだ。此時不思議や件の栗の實は忽ち化して二つの小石となり、彼女の鼻の先へ粘着いて、幾何引張ても離れない。加之に爨の美しい香氣が忽ち變じて人糞の惡臭となつたので、彼女は苦痛の餘り精神錯亂し、紅裙を蹴返して座敷中舞ひ廻つたから堪らない、頭に挿して居た花釵は地に落ちて微塵に碎ける、美しい髪は解けて振り亂れる。加之、座敷に掛けて置いた琴が此時自然と聲を發して鳴り出したので、之れを見た一座の人々は思はず手を拍て笑ひ崩れた。然し後には件の女が悲しい聲をあげて啼き叫んだので、今は側の人々も不憫に思ひ、種々と七々を宥めて其法を解かしめると、鼻の先

の小石が忽ち離れ落ちて再び舊の栗となり、琴の音も忽ち鳴を止めて、碎け散つた花鈿も亦舊のやうになつた。

邢和璞

邢和璞は瀛海の邊りに住んで居たが、人の心中を讀む術に長じて居て、他人が何か心の中に計畫して居たことを判然言當てるに妙を得てあつた。其後彼は嵩穎の邊りに住居を移して、其處で書を著して穎陽書算心旋空の秘訣を述べたが、彼は又法術を以て即死した人を活かす術にも通して居た。

而して唐の明皇帝の開元十二年、彼が京都へ到つた時などは、豫ねて彼の名が天下に鳴り響いて居たものだから、滿都の貴人相争ふて彼の許を尋ね、彼が門前は常に車や馬で雑沓してあつた。

彼の友人に一人の男が居て、白馬坡の邊りに住んで居たが、或日俄に即死して後に残された母親は痛く嘆き悲んで居る處へ、會、邢和璞が所用あつて訪ねて行き、彼が死んで日數も大分経て居るといふことを聞て大に驚き、早速彼の死體を牀の上へ寝させ、自分も亦其側に添臥をし、稍々良久してから彼は起上つて湯を

使ひ、復た前のやうに友の死骸の側に寝て居る中、暫時経つと、彼の死んだ友は俄に息氣を吹返して起上つた。

此處に又邢和璞の知人に崔司馬と云ふ者が居て、或年病氣にかゝつて殆んど生命も危いと云ふ頃になると、彼はツト床の上に起直つて、二聲三聲邢和璞の名を呼び、愈、僕を見棄たのであるかと叫ぶと、良久して傍の壁に何者か頻りに穴を穿つ音が爲て、小さな

一の孔が出来たと思ふと、件の孔は見る見る中に大きくなつた。其處で彼は其孔から外の方を覗いて見ると、邢和璞は紫の衣を着て立派な冠を戴き車の上に坐つて數百人の従者を前後左右

邢 和 璞



に附隨へて現はれたが、崔司馬を見ると矢庭に聲を掛け、自分は今是から太乙帝の許へ行つて、君の病を救ふて遣らうと思ふ。暫時の間我慢を爲て居て呉れと言ふかと思ふと、其姿は忽ち消え失せて、同時に件の孔も亦消え失せて了つた。其後果して數日經つと、彼程重かつた崔司馬の病も全く癒て了つた。

或日那和璞明日の夕方一人の珍客が見えるから、能く其邊を掃き清めて置くやうにと弟子共に命じ置き、且つ其時は決して自分の室を覗いては不可ぬぞと堅く戒めた。處が其翌日になつて果して一人の男が尋ねて來た。見れば身の長儀に五尺不足で、肩幅といふと優に三尺程もあつて、頭は身體の半分もある。身には眞紅な衣を着、手に笏を持て居て、長い髯を捻りながら時々大口を開いては笑ひ出し、頻りに話を爲て居たが、其言葉は普通の人間の話す言語でなかつたので、他人はそれを聞いても少しも了解することが出来なかつた。其時那和璞の友人で、かねて彼の許に寄寓して居た崔曙といふ者が、フト庭先を通りかゝつた時、件の客は忽ち彼を見咎めて、今の男は泰山老師ではないかと、潛かに那和璞に尋ねた。而して夕餉を御馳走になると、件の客はやがて暇を告げて立去つた。其時那和璞は崔曙を呼んで、今の客こそ即ち上帝で、態と戯に彼様な變挺な姿を

爲て來たのである。而して先刻君を見て、泰山老師で無いかと言つたのを君は聞て知る居るかと問ふと、崔曙は其時君は常に自分のことを指して泰山老師の後身であると言て居らるゝけれど、自分は果して泰山老師の後身であるか如何か、前の世のことは毫も記憶しては居ないと答へた。

其後那和璞は突然姿を隠して了つたが、何處へ行つたのか、世に彼の行方を知て居るものは一人も無し。

吳道元

吳道元は陽翟の人で、字を道子といふ。此字は彼の幼少の時分の名であつたが、後改めて其字に爲たのである。幼少の時賀知章、張顛等に就て書を學んだが、何等の得る所もなかつたので、後轉して畫を學んだ。然るに畫は彼の天稟の性に合したと見えて、早くも畫道の奥儀を極め、幾程もなく其名が天下に響き渡るやうになつた。

最初彼は兗州の瑕丘の尉となつて居たが、後明皇帝に召されて朝廷に仕へる身となつた。而して此時から彼の名は漸く天下に聞えるやうになつたといふ

が彼の畫は全く張僧繇の筆法に倣つたものである。そして世間では實際彼を以て張僧繇の後身であるかの如く信じて居た。

吳道子曾て或僧の爲めに一頭の驢馬を畫いたことがあつた。其後夜になると窓の外に蹄の音が爲て時々彼の僧の夢を驚したことがあつたさうである。又曾て龍を畫いたことがあつた。其時其鱗甲が各れも一つ／＼動いて居るやうて而して雨が降る毎に座敷に煙霧が生じてあつたとのことである。

宮中に高さ數尋の墻壁が有つたが、明皇帝或日吳道子を召して其壁の上に山水の景色を畫かしめた。其時彼は墨水を容れた一個の大盤を持って來て、墨水を悉く皆件の壁の上に撒かしめ、次に幕を以て來て其上を覆ひ隠さしめた。それから良久經て後件の幕を取去らしめると、山水の風景が現々と其處に現はれて、木でも草でも人でも鳥でも皆一々生動して居るやうに思はれた。其時吳道子は靜かに其畫の前に進みよつて、一々指を以て其場所を説明した後、或岩の處を指して、此岩の下には一の小さい洞があつて、其中には一人の仙人が住んで居ると言ひながら、件の岩の上を指て軽く叩くと、其處に忽然として一の門が現はれ、中から一人の童子が出て來た。其時吳道子は皇帝に向て、小臣が今陛下の案内

をして此洞中の景色を御覽に入れ申さうと言ひながら、先づ自ら進んで件の門の中へ進み入り、手を振て頻りに帝を差招いた。其時帝は暫時躊躇して其門の中へ入りかねて居る中、件の門は忽ちはたと閉められて了ひ、今まで美事に畫かれてあつた山水の繪も、亦吳道子の姿も忽ち消え失せて、墻の表面は復た舊のやうに無地の白壁となつて了つた。

羅公遠

羅公遠は鄂の人である。開元の某年の中秋宮中で月觀の酒宴を催された時、玄宗皇帝はフト中空に芥え渡る月影の清いのを御覽になつて、あの月の世界には金殿玉樓が有つて數多の美しい天女が棲んで居ると聞て居るが、朕に羽さへあらば、今宵のやうに澄み渡つた夜に、其月宮とやら云ふ處へ行て見たらさぞ愉快であらうと獨語せられたのを、其時帝の側に侍て居た羅公遠はそれは造作もないことである。若し御意とあらば何時でも案内申しませうと言つたので、帝之れを聞て大に喜び早速其用意に及ぶと、羅公遠はツト座を起て椽先へ出て、持て居た杖を空中へ投げると、それが忽ち化して一の浮橋となり、其色銀の如くに光

り輝いて、其端は遠く雲の上に隠れて見通すことが出来ぬ。其時羅公遠は皇帝を誘ふて、此橋の上を渡り、須臾の間に月宮へ到着した。

扱て月宮へ到着して見ると、幾百と數知れぬ金殿玉樓軒を並べ、薨を連ねて雲の上に聳え、繪に見るやうな美しい仙女數百人、各、光り輝く計り装を凝して、霓裳羽衣の一曲を舞ひ收めた。其時帝は深く感ぜられたものと見え、其後宮中へ歸て來ると、早速伶人を召寄せて、更に此霓裳羽衣の曲を真似て作らせられた。さて皇帝と羅公遠の二人は月宮を辭して再び宮中へ歸る時、件の浮橋は歩に隨て次第々々に消え失せ、二人が再び宮中へ到着した時には、彼の橋は全く消え失せて、影も形も見えなくなつたさうである。

其後羅公遠は皇帝に隱形の術を授けたけれど、悉く其法を傳へなかつたので、帝は其身體を隠すことは出来ても、着て居る衣帶や巾角は猶ほ人の目から隠すことが出来なかつた。其處で、皇帝は如何にも是れを残念に思ふて、或日羅公遠に此事を語ると、彼は笑て、陛下は常に道を以て一の道樂と思ふて居らるゝが、若し真に仙術を學び盡さうと思召すならば、斷然御位を退き、浮世を棄て、弟子の禮を執て小臣に従へなさい、然すれば小臣が知て居る限りの仙術を悉く授け申さ

ぬとも限らぬ。だが陛下に果して是丈の勇氣があらるゝか如何かと、反對に帝を詰つたので、帝は烈火の如く憤て其無禮を叱責すると、彼は忽ち走て、圖ある柱の中へ身を隠し、今度は口を極めて皇帝の過失を罵つた。是に於て皇帝益々腹を立て、臣下に命じて件の柱を引抜いてそれを裂き碎かしめると、羅公遠は更に礫の中へ身を隠した。然し石が美麗な透明の大理石であつたので、中に居る彼の姿が一寸位の長になつて表面から能く透過て見える。其處で皇帝は更に人に命じて件の礫を破り碎かしめると、今度は其破片の一つに彼の姿が寫て居て、孰れが果して羅公遠の眞の姿であるか、俄に判別が付かぬ爲め、道の皇帝も暫時呆然として立て居らるゝと、今迄見えて居た羅公遠の姿が一時に何處へか消え失せて了つた。

其後皇帝の使者が詔を奉じて蜀の國へ赴いた時、黒水に到る途中で、ト羅公遠に出逢ふた。其時彼は使者に向て、朝廷へ歸つたら宜しく皇帝へ申傳へて呉れと言つて、其儘何處へか立ちて了つたさうである。

雞窠中の仙兒

唐の時、李員といふもの時の帝の詔を奉じて某國へ使者となつて行かれた途次、瓊州といふ所て一人の老翁に出逢ふた。此老翁は楊避舉といふもので、時に年八十一歳である。其父及び叔父なる人は各れも皆一百二十歳餘の老人で、猶ほ健て居た。そして又其老翁の祖父である宋郷といふものにも遇ふたが、聞けば其人は已に百九十五歳であるといふことだ。其時側の雞の窠の中に一人の小兒が頭を出して自分を見下して居たが、其名を尋ねると、之れは宋郷には九代の祖先に當る忌といふ者で、一年中食べもせず、飲みもせず、笑ひもせず、話もせず、毎日斯うして此處に住居るのであるが、年は最う幾つになるか推算が出来ぬとの事であつた。

申泰芝

申泰芝は字を元之といひ、唐の洛陽の人である。母は楊子といひ、或夜仙芝を呑むと夢見て彼を孕んだので、彼を泰芝と名付けたとのことである。彼は久し

く各地を遊歴し、名所舊蹟を訪ねて居たが、其後邵陵の余湖山に留て、一向道を修煉することに勉めて居た。

或夜玄宗皇帝は湖南に白雲先生と名乗る道士が居るといふことを夢に見たので、翌日早速人を遣して尋ね求めしめた處、遂に申泰芝が余湖山に居るといふことを聞て即ち彼を朝廷へ召寄せ、大國師の尊號を賜へて玄真觀に住まはせて置いた。其處で彼は常に張果、邢和璞、羅公遠、葉法善、尹愔、何思遠、史崇秘の徒と一所に皇帝に従て遊んで居た。そして后妃の楊貴妃と内人の張雲容の二人は時々申泰芝が藥を煉て居る傍に在て、種々道のことなど問尋ねて居たが、張雲容或日傍に人無き機會を窺ふて、密と申泰芝に長生の藥を請求めた。其時申泰芝は藥を與へることは別に異議もないが、但だ此藥を服すれば忽ち生命が絶えて了ふぞと言つたけれど、張雲容は強て乞ふて聽入れなかつたので、泰芝も終に其熱心なのに感動され、絳雪丹といふ仙藥を一粒とつて與へ、扱ていふやう、此藥を服すれば髪にも言つた通り直ちに息氣が絶えて了ふ、されどそれが爲めに身體が崩れるといふことは決して無い、但だ棺を大きく作り、穴を廣く掘り、棺と穴とに珠玉を一杯積み込んで、魂魄が空中へ飛散て了はぬやうに注意すれば宜し。

然る後百年を経過すれば、復生の氣が再び廻て来て、汝は再び蘇生することが出来るであらう、是れが即ち太陰煉形の法で、此法を行へば最初は地仙となるが、再び百年を経過すると、昇天して真人となることが出来る。

其後張雲容は玄宗皇帝が東洛に行幸なされたのに隨行してあつたが、蘭昌宮に於て急に病にかゝり、生命も己に旦夕に迫つた時、始めて皇帝に申泰芝から密に仙藥を貰て服したことを打開け、自分が死んだ後の手當を委細に頼んだ。其處で皇帝は彼が死んだ時其遺言通り手厚く葬て遣したが、其後憲宗皇帝の元和末年、即ち彼が死んでから略百年計り經つと、張雲容は果して薛昭といふ道士に遇ふて再び蘇生することを得た。

扱て申泰芝は其後朝廷を退て余湖山の舊宅へ歸て居たが、後終に昇天して了つた。そして宋の時妙寂靈修真人の尊號を贈られた。

徐佐卿

徐佐卿は蜀の人で、唐の天寶年間道士となつて居たが、平生暇さへあれば一羽の鶴と變じて山澤の邊りに遊んで居た。然るに或日玄宗皇帝西苑に於て獵を

催された時、會、佐卿が化した鶴を見て乃ちそれを射ると、其矢が彼の羽を射通してあつた。佐卿は其夕矢を帯びた儘家へ歸て來て弟子共に右の趣を告げ、件の箭を抜取てそれを壁の上に懸け、箭の主が來た時に渡して呉れと命じて置いたが、其後程經て、玄宗皇帝が蜀の國に行幸なされた時、徐佐卿の住宅の壁に懸けてある箭を見、且つ其來歴を精しく聽て、世にも奇異の思をなされてあつたとのことである。

裴玄靜

裴玄靜は李言が妻である。或夜獨り家に在て留守居をして居ると、庭先で頻りと人の笑ひ密語く聲がするので、怪んで戸の隙から覗いて見ると、庭の上に二人の見馴れぬ女子が立て居て、頻りに何事か話して居る。二人共年の頃は十六七で、其美しいこと天女のやうで、身に纏ふて居る衣服は何れも皆珠玉を鑲めた立派な物であつた。そして侍女と覺しい女が數人計り其側に附て居た。然悉して居る中、何處からとも無く囁曉たる天樂の響が聞えて來て、一種形容の出來ない好い薰香が室の内迄匂ふて來た。

此夜一羽の白い鳳鳥が何處からとも無く飛んで来て、驚き怪しむ裴玄静をば脊に載せて、復た何處ともなく飛び去て了つたが、それ限り裴玄静の行方は終に知れ無くなつたさうである。

帛和

帛和字は仲孔、一説には字を仲理と爲てある。遼東の人で、地肺山の董奉に従て仙道を修行し、五穀を斷て神を養ふことに勤めて居たが、其後又西城山に上つて王君に師事した。或時王君彼に向て、道の秘訣は然様卒に得らるゝものには無い、挽まず倦まず勤修して居る中には遂に悟る所が出て來るであらう、自分は暫時瀛洲へ行て來るから、其方は此石室の中に留て居て、毎日四方の石壁を能く注意して、見るがよい、終には此壁の上に何か書かれた文字を見出すことが出來て、それを讀んだら始めて得道する時が來るであらうと告げて、何處へか立去て了つた。

其處で帛和は獨り跡に残て毎日石壁の上を眺めて居たが、一年経ても、二年経ても、更に文字らしいものが見當らない。漸く三年経て始めて太清經神丹の方

三皇の文及び五岳の圖を見出すことが出來たので、彼は朝夕其等の文字を暗誦することに勉めて居た。須臾經て王君が歸て來て之れを見、帛和に彼の道が漸く成就したことを告げた。其處で帛和は林慮山に上て其處で仙丹を煉り、終に地仙となつて永く其山に留て居たが、此林慮山といふ山は一名を隆慮山と呼び、南は大行山に連り、北は恒岳に接して居る。そして此山には昔から一基の仙人樓があつて、其高さ五十丈、森然として高く雲に聳えて居る様は頗る壯觀であつたと傳へられてゐる。

顏真卿

顏真卿は字を清臣といひ、師古五世の孫に當る。學博く文章に巧であつたが、唐の開元年間進士に擧げられ、其後擢んでられて監察御史と爲つた。而して德宗皇帝の建中四年大梁の李希烈といふ者が謀反を企てた時、顏真卿は帝の命を奉じ、問罪の使者として李希烈の許へ赴くことになつた。其時彼の知人共は彼が生きて再び還ることの萬々難しいことを察して、長樂坡といふ處に寄集て彼が爲めに送別の宴を開いた。其時彼は酒に酔ふて座敷を跳ね廻り、そして人々

に向ひ自分は先年陶八々といふ道士に遇ふて刀圭碧霞の仙丹を授けられ、それを服した爲め今日になれど猶ほ此通り健者である。又自分は七十歳の時災難に逢ふて一命を失ふことがあるけれど、再び蘇返り、其後の運勢は總て皆大吉である。諸君には羅浮山に於て重ねて御目にかゝるであらうと言て、其翌日大梁に赴いたが、李希烈は果して彼を捕へて殺し、其屍骸をば城市の南に葬つた。其後數年經て、眞卿の遺族が彼の墓を掘返して見ると、彼の容貌は恰も生きて居るかのやうに艶々しく、全身悉く金色に變じて居て、爪が長く延びて手の甲へ抜け出て居り、鬚髮共に長く延びて數尺程に及んで居た。其處で家人共は改めて彼の屍體を僊師の北山に葬つた。

此處に洛陽に一人の商人が居て、或日羅浮山で二人の道士が圍ある樹の下で棋を娛んで居る處を見た。其時一人の道士は件の商人が洛陽の者であると云ふことを聞て、北山の顏氏の家族へ宛てた一通の書狀を托した。其處で彼の商人は洛陽へ歸て來ると、早速顏氏の許を訪ねて彼の手紙を渡すと、家人共は之れを見て大に驚き、是れこそ我家の祖先眞卿の筆蹟であると言て、早速彼の塚を發いて見た。棺の中には已に何物をも残して居なかつた。其處で羅浮山に赴いて

彼の踪跡を探求めたけれど、遂に彼に遇ふことが出来なかつた。其後世間の傳ふる所によれば、顏真卿は仙界に在て北極驅邪院の左判官を務めて居るとのことである。

黄升

黄升は長汀の人である。幼少の時、から仙道を修め、錢貨を水中へ沈めて之れを呼べば、件の錢貨は自づと水の中から飛んで出る。又汞を火爐の中へ入れ、之れに陰陽の氣を通して煉れば、件の汞は即ち白金となつて出る等、種々の奇妙な仙術に出じて居た。

此處に蔡道といふ道士が居て、其者が死んだ時、黄升は棺を作て彼を葬つたことがあつた。其後暫時經て、或日蔡道から手紙が來て、崆峒山に在て彼を待て居る由を言寄越したので、黄升は早速崆峒山へ行て蔡道に面會すると、蔡道は仙化する時、道の秘訣を記した書物を壙の隙間に藏て置いた儘、遂に忘れて來たから、君が若し家へ歸つたら、それを讀んで修行の助けにして呉れと言ふと、其儘彼の姿が掻消すやうに失せて了つた。

其處で黄升は急いで蔡道の舊宅へ歸り、墻の隙間を其處此處と探して見ると、果して一卷の書物が現はれたので、彼はそれを反覆繰返して讀んだ。是より彼は鬼神を使役する術に熟達してあつたが、其後尸解昇天して了つた。

王昌遇

一王昌遇は曾て梓州の獄史となつて居たことがある。其時此處に張姓と呼ぶ一人の仙人が居て、梓州といふ處で鼠の妙薬を賣て居たが、或日王昌遇は鼠の爲めに手足を噛まれたので、右の薬を買て來て鼠に食はしめると、不思議や件の鼠は皆々翼が生えて何處ともなく飛去て了つた。

其後彼は或所用を帯びて瀧といふ處へ赴き、其處で再び彼の張姓に出逢ふたので、復た件の薬を買ふて自らそれを服用した。其時張姓は彼の名を易玄子と改めさせ、一匹の馬を與へてそれに乘て家へ歸らしめた。

扱て王昌遇の易玄子は家へ歸て來て件の馬を見ると、それは即ち見るも恐しい一頭の龍であつた。而して其年の九月九日彼は終に昇天して了つたが、是れからして梓州の地は薬を賣る市として、永く後世に有名となつたのであるといふことだ。

呂巖

呂巖字は洞賓、唐の蒲州永樂縣の人である。其祖先は渭の禮部侍郎で、父の呂讓は海州の刺史であつた。彼は貞元十四年四月十四日己の刻の生れてあつたので、又の號を純陽子とも言て居た。初め彼生るゝ時、異香四邊に薫し、何處となく天樂の響が爲て、折柄一羽の白鶴が室の中へ入つて來て、窓に懸けて置いた帳の中へ飛込んだと思ふと、其姿が忽地消え失せて、何處へ行つたか其行方が分らなくなつて了つた。

彼は生れた時から頸長く、額骨高く、額が廣くて、身體肥え太り、鼻が高く秀でて居て色が黄白であつた。そして左の眉の隅に一の黒子があつて、足の裏には龜の甲の形した紋が附て居た。身の長八尺二寸、平生好んで華陽巾を被り、黄襦の衫を着て、其上へ太皂織（よじり）を繫けた姿は、如何見ても昔の張子房に似て居た。而して未だ、嬰兒であつた時分、馬祖或日彼を見て大に驚き、此兒は容貌骨格世の人と甚だ異なつて居る、後世必らず天下を濟ふ所の仙聖と云るであらう。若し他日

廬山に行くことがあつたら、必らず其處に長く留て居れ、若し又鍾山に行くことがあつたら、能く／＼氣を注けて輕卒の振舞をするなど、堅く戒めてあつた。

呂巖は幼少の頃から才智人に優れ、讀書詩賦文章等何でも出來ないと云ふもの無く、特に仙道は最も好んで勤修して怠らなかつた。處が或年廬山に遊ぶと會、火龍真人に逢ひ、天遁劍の用法を審に授けられた。而して唐の會昌の年即ち彼が年六十四歳の時、二度まで進士に登用せられたけれど、彼は何時も拒んで官に就くことを欲しなかつた。

或年呂巖は長安の或酒屋で、一人の青い頭巾を被り、白い袍衣を着た隱者に逢つたが、其時件の隱者は壁の上に次の三絶句を題して彼に示した。

坐臥常携酒一壺、不教雙眼識皇都。
乾坤許大無名姓、疎散人間一丈夫。
得道真仙不易逢、幾時歸去願相從。
自言住處連滄海、別是蓬萊第一峯。
莫厭追歡笑語頻、尋思離亂可傷神。
問來屈指從頭數、得到清平有幾人。

呂巖は其男の風丰が世の常の者でないのみならず、其詩迄が如何にも飄逸の韻致に富んで居るのを見て、是れ必らず世に優れた隱士であらうと早くも悟り、禮を厚くして盟交を乞ふと、件の隱者は自分の爲めに是非一篇の詩を賦して其

志す所を明して貰ひたいと求めたので、呂巖は傍にあつた筆を執て、次のやうな詩一篇を賦して彼に示した。

生在儒家遇太平、懸纒重滯布衣輕。
誰能世上爭名利、欲事天皇上玉清。

此時件の隱者は自分の名は雲房といふもので、住居は終南山の鶴嶺であることを告げ、君は自分と一所に遊ぶ心が無いかと尋ね、兩人は共に連立て或宿舍に泊つたが、雲房は自ら手を下して炊事を働いて居る隙に、呂巖はフト枕に就て身を横にすると、其儘眠つて了つた。其時彼は斯云ふ夢を見た。

自分は進士の試験に及第して朗署から臺諫翰苑秒閣及び諸清要の官に累進し、顯位身に添へて家富み榮え、又或富豪の娘を娶て子を生むと、其子供は頓て又成長して妻を迎へ、斯くて數多の孫甥等を儲けて、四十幾年の間、一家宗族各れも富み榮え、自分は又十年計り宰相の役を務めて居て、權勢双ぶものが無かつたが、會、或事からして罪を得て一家離散し、自分は嶺表といふ處へ流されて、佗しい憐れな境涯に沈淪した。そして彼は此處に始めて浮沈定めなき世の態を悟りて、獨り熟々と果敢なき身の運命をかこち居ると夢みて、忽ち眼が醒めた。

扱て眼を覺して見ると、雲房は未だ傍にあつてセツセと飯を炊いて居る最中

てあつたが、彼は今呂巖が眼を醒したのを見ると、獨りクス／＼笑ひながら、黃梁猶未熟。一夢到華胥。と聲高かに吟したので、呂巖は大に驚き、君は自分が今何を夢見たか、それを知て居るかと思ふ。雲房云ふやう、其れは能く知て居る。然し君が此から浮世に在て見る夢は最と複雑で最と變化のあるものである。然し要するに五十年の人生は一瞬の夢で、志を得たとして別に喜ぶにも及ばぬ、又失敗したとして別に悲しむにも及ばぬ。而して此人世其物が己に大きな一の夢であるといふことは、唯浮世の夢を見盡した後始めて悟ることが出来るものである。呂巖之れを聞て忽ち自分の未熟であつたことを後悔し、それより彼は雲房に從て一心に長生の道を學んだ。

或日雲房は呂巖の心を試して見やうと思ひ、彼に向て、君の身體は道を求めるべく未だ充分完成しては居らぬ。強て道を求めやうと思ふならば、少なくとも今數世を経て、身體が充分煉上る時を待たねばならぬと言て、其儘何處へか立去て了つた。其處で呂巖は大に發憤して、今迄學んだ儒教の學問を全然棄て了ひ、一意専心になつて仙道の研究に力を込めた。

扱て呂巖を發憤せしむる爲めに一時姿を隠した雲房は、其後間も無く歸て來

たが、今度は彼の精神を試めす爲めに前後十回の試験を遣つた。即ち或日のこと、呂巖が他所から家へ歸て見ると、家族の者共は何時の間にか悉く病死して居た。然し彼は之れを見なければ、少しも悲しいといふ氣色もなく、唯懇に厚く葬式を營んで遣ると、今迄死んだと思つた家族共は皆一時に蘇生して、舊と少しも異狀が無かつた。

次に、或日呂巖は市に出て商を爲て居ると、買ふ者は廢奴も這奴も皆値の半分か拂はなかつたが、然し彼は少しも之れを争ふ氣色はなく、其半分の價をとつて其品物を買手に渡して遣つた。

次に或年の元日、呂巖の門前に一人の乞丐が來て、頻りに施惠を請ふて止まぬので、呂巖は財布の中から錢を出して彼に與へて遣ると、件の乞丐はなほ飽足らで強請つた上、最後には惡口雜言を放つて散々彼を罵つたけれど、呂巖は唯微笑して居て少しも怒らなかつた。

次に、或日呂巖が山の中で羊を飼ふて居る處へ、一匹の餓ゑた虎が迷て來たので、彼は羊を悉く蔽ひ隠し、自身親ら件の虎に向ふと、件の虎は之れを見て忽ち何處へか逃げ失せて了つた。

次に呂巖は或日山中の茅屋に坐て靜に書を讀んで居ると、其處へ年の頃十七八と覺ゆる美しい女が遣て來て云ふやう、自分は此處から遠く離れた都に住んで居る者であるが、自分の両親が此附近に住んで居る由を聞て、久振に尋ねて來たけれど、路に迷つて人里へ出ることが出來ない加之日も早や暮れ果て、腹も空き、足も疲れて、最早一步も先へ進むことは難しいから、今宵一夜の宿を貸して呉れど、羞を含んで頼み入る容子は、如何な道心堅固の聖でも心を動さぬはあるまいと思はれた。そして彼女は夜更になると、呂巖の側に膝行寄つて頻りに秋波を送り、落花流水の情を寄せて、切りに彼の心を動かさうと試みたれど、彼は端然と座つた儘、少しも猥な姿態を見せなかつた。そして彼女は三日計り彼の許に留て居たが、呂巖の道心堅固で遂に動かすことが出來ないのを見ると、遂に何處へか立去つて了つた。

次に、或日呂巖が外出した跡へ盜賊が忍び込んで彼の多くも無い家財道具を悉く盗み去り、朝夕の食餉の用意にさへ差支へることとなつたけれど、呂巖は少しも惜しいと思ふ容子は無く、自ら他人の田畑を耕して其賃銀で少しづつ道具を購求めて居たが、或日例の如く畑を耕して居ると、土の中から數十の錢貨が出

た。其時彼は件の錢を其儘其處に置き、其上に舊の如く土を掩ひ被せて了つた。次に、或日彼は市へ出て數個の銅器を購ふて來て、能く観ると、それは悉く金で造つた器物であつたので、彼は大に驚き、早速其店へ出掛て往て件の器物を悉く銅製の物と取換へて來た。

次に、或日此處に一人の怪しい道士が居て、大道の真中に店を擡げて藥を賣て居たが、其云ふ所によると、此藥を服すれば忽ち死んで了ふけれども、後再び此世に生れ來て仙道を得ることが出來る、世にも珍らしい妙藥であるとのことであつた。然し世人は死ぬといふことを畏がつて誰一人其藥を買ふ者は無く、彼は十日計りの間毎日路に出て客を求めて居たが、一文の商買も無かつた。然るに呂巖は或日フト其處を通して件の藥の効能を聞くと、大に喜んで早速それを買求めて服して見たけれど、別に何等の異狀も無かつた。

次に或年春雨が長く降續いて、何處の河水も溢れて大洪水となつた時、彼は多くの人々と一所に舟を浮べて河の中頃へ到ると、波が荒くて危険此上無かつたので、他の人々は怖れて皆々後へ引返して了つた。然し彼のみは少しも恐るゝ氣色なく、萬難を犯して向ふ岸へ渡り、遂に多くの罹災者を濟ふてあつた。

次に第十回目の試験は就中困難なものであつた。即ち或日彼が獨り一室の中に座して居ると、何處からともなく奇妙な姿態をした鬼魅が澤山集て來て、彼が家の周圍を取圍み、手にく得物を提げて彼を害しようとして企てた。其時彼は少しも懼るゝ氣色無く、端然と座つた儘靜に彼等の爲すが儘に打任せて居ると、鬼魅共は之れを見て互に何事か囁き合ひて、何處ともなく立去つて了つた。須臾すると今度は數千の夜叉が現れて一人の死んだ男を引立て來た。扱て件の死人を見ると、是は又如何したとか、滿身に生血が滴て居て、見るから身の毛もよだつ程である。其時件の死人は裕と大きな眼を開いて、怨めしさうに呂巖を睨み、苦しい聲を揚げて、自分は前の世に汝が爲めに殺害せられた者である。夫故に今來つて仇を復さうと思ふのである。何事も皆自分が作つた罪の報ひであると觀念して、覺悟を極むるがよいと言ひながら、起上り様、彼を目掛けて掴み懸らうとした。其時呂巖は落付拂つて、自分の生命を殺して、それで汝の怨が晴るゝのならば、自分に於ても少しも憾が無いと言ひながら、刀を執て將に自害しようとする。忽ち空中に彼の男を叱る聲がして、夜叉も件の男も共に一時に消え失せて了つた。

と思ふと、其處へ思もかけぬ雲房が現はれて來て、掌をうつて笑ひながら、呂巖に向ひ、是迄の種々の出來事は皆自分が仕組んだ芝居で、全く君の心を試さうとしたのであるから、悪くもつては困る。最早此上は君に於て聊も疑ふ所がないと云て、直様彼を伴ふて鶴嶺へ赴き、其處で悉く上眞の秘訣を審に授けた。

其時清溪の鄭思遠と太華の施真人の二人が東南の方から雲に乗て遣て來て、雲房の側に座を占め、呂巖の其處に居るのを見て、雲房に渠は何者であるかと怪しみ尋ねたので、雲房は呂海州の讓が子で、呂巖と云ふ者であることを告げ、呂巖を呼んで二人に紹介すると、思遠は呂巖を熟々と眺めて、容貌といひ、目差といひ、何處となく精が籠て居て普通の者と異つて居る。後には屹度廣徳の仙聖となるであらうと言て、甚く彼を賞讃した末、暇を告げて何處ともなく立去て了つた。

其時雲房は呂巖に向て、自分が天上の仙宮に詣るのに一定の期日があつて、其期日に臨まなければ、私に天上に詣ることは出來ない。若し仙宮に詣る機會があつたら、老君に汝のことを奏薦してやらう程に、今暫時此處に留て居よ、然しそれとても長いことは無い、是れから十年経つた時に再び洞庭湖の邊りて汝と會ふことがあると告げて、靈寶畢の法と靈丹數粒とを彼に授けた。然るに其處へ

忽然として二人の仙人が現はれ出て、金簡寶符を捧げてそれをば雲房に授け、且つ上帝が彼を以て俄に九天金闕の選仙に任ぜらるゝ旨を告げたので、雲房は重ねて呂巖に向ひ、自分は今急に上帝から召されて昇天しなければならぬ。汝は暫時人間界に留て居て徳を建つることに勉めるがよい、孰らにしても早晚は自分と同じやうな身分になるのであるから、其時の到來するのを心長閑に待つが得策であらうと言て、彼の迎に來た二人の仙人と一所に雲に乗て忽地昇天して了つた。

扱て呂巖は雲房に別れた後、江淮の邊りに遊んで人民に害をなす妖邪を除き、或は湘潭岳鄂兩浙汴譙の地方に往來して人民に災を爲す者を除いて居たが、當時彼は自ら名を變じて回道人と稱して居たので、彼は即ち世にも尊い呂巖其人であるといふことは、世間の人々も餘り知らなかつた。

宋の政治年間一個の妖鬼が居て白晝宮中に現はれ、種々の祟をなす外に、數多の金錢財寶を始として、宮中に仕へて居る妃嬪共を盗んで何處へか立去るので、宮中の騷動一方ならず、諸々の陰陽師を招いて禁厭の法を行つたけれど、少しも鎮定する様子が無い。其處で皇帝大に御心を惱し、如何かして此妖魔を退治し

て遣らうと、六十日の間齋戒沐浴して天地の神々に騰られると、或日夢に一人の異様な道士が現はれた。頭に碧蓮の冠を戴き、身に紫鶴の氅を着、手に水晶の如意を持ち、東華門の方から、靜に遣て來て皇帝の前に跪き、自分は上帝の命によつて宮中に祟を爲す妖鬼を除かん爲めに、此處へ參つた者であると告げ、一人の金甲を着けた丈夫に命じて、彼の祟を爲す妖鬼を引捉へて、一々之れを啗ひ殺さしめた。

其時皇帝は件の丈夫を召して其名を尋ねると、崇寧真君の關羽であることを告げたので、皇帝は試に汝の義兄弟の張飛は今何處に在るかと問尋ねられると、張飛は代々男子の身と生れ代りて天子の爲めに忠を盡して居る。今後相州の岳氏の家に生るゝ男の子は即ち此張飛の後身であると答へた。次に皇帝は件の道士に向て其名を尋ねると、姓は陽といつて四月十四日に生れた者であると答へ、其儘姿が消え失せて了つたので、其後皇帝は姓は陽氏で四月十四日に生れた者は誰れであるか、治ねく天下に詔を下して詮索せしめると、それは疑もなく呂巖のことであつたから、皇帝は呂巖に正妙通真人の尊號を贈て厚く彼を祀てあつた。

扱てその後彼の相州の岳武穆即ち岳飛が生れた時彼の父或夜張飛が自分の妻の胎内を借りて再び此世に生れ出づることを夢に見たので、張飛の飛の字をとつて其子に名づけたとの事である。

李賀

李賀字は長吉といひ唐の宗子で、其先は鄭國の王から出て居る。身體纖長く、眉細く、指の爪長く生延びて一尺許りあつた。幼少の頃から才智人に優れ、七才の頃詩文を作るに大人も及ばぬ程であつたので、世の人々は皆神童と稱して驚嘆して居た。韓愈皇甫湜しよの徒初め彼の名を聞かた時は容易に信じなかつたが、或日彼の家に尋ねて行き、詩を賦せしめた處、李賀は立處に筆を授つて詩を賦したので、二人は之れを見て、各れも其神才に敬服して了つたさうである。

其後李賀は協律郎となつて、年廿七才の時卒して了つたが、彼が斷末魔に臨んで愈、息氣を引取るといふ際に、一人の緋衣を着た天人が一頭の赤虬に駕り、太古の籙籙石文の様な文字を記した一枚の版書を手に持て、靜かに天上から降りて來て、李賀に上帝の命によつて彼を迎に來た由を告げた。其時彼は床から轉び

下りて、老母が今病んで居るから暫時猶豫して貰ひたいと、涙を流して哀願した。然るに件の天人は笑て聽入れず、天上の白玉樓は苦痛悲哀といふことは毛程も無き、常樂世界である。此世に在て心身を苦しますよりも、天上の生活は如何計り幸福であるか分らぬ、それに上帝は頻りに足下を召して在すにより、一刻も早く參られた方がよろしからうと言て、厭がる彼をば無理矢理に引立て、天上へ連れて行くやうに見えたが、それから少頃すると李賀は忽ち息絶えて了つた。

韓湘子

韓湘子字は清夫といひ、韓文公の猶子である。性磊落であつて物事に拘泥すること嫌ひ、極めて放縱な生活を好んで居たが、或年純陽先生呂巖に遇ふて共に一所に諸方に遊んで居る中、桃の木の上から墮ちて其儘尸解仙化して了つた。そして養父の文公の許へ歸て來た時、文公は彼が己に此下界の人間で無いといふことを夢にも知らず、例の通り其怠惰を責めて頻りと儒學を勉強するやうに説き勧めた。其時韓湘子は自分の今學んで居るものは、儒學では無くて、世にも尊い仙道の學問であることを告げ、次のやうな詩を賦して文公に示した。

青山雲水窟。此地是我家。子夜食瓊液。寅晨咀絳露。琴彈碧玉調。爐煉白珠砂。寶影存金虎。芝田養白鴉。一瓢藏造化。三尺斬妖邪。解造逡巡酒。能開頃刻花。有人能學我。同共看仙葩。

文公此詩を見て笑て云ふには、汝如何にして造化の妙を奪て、其意の通り自由にする事が出来やう。恐らくは虚言を吐て我を欺くのでは無いかと、容易に彼が言ふことを信じなかつた。其處で彼は文公の前に空樽を持て來て、暫時經て後右の空樽を開くと、中には黄金色した銘酒が一杯入て居た。次に又一握の土砂を持て來て鉢の中へ入れると、暫時經て其土の中から一莖の草が萌え出し牡丹に似て稍、大い美しい花を咲いた。而して其花の中には金字で

雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。

の二句が記されてあつたが、文公は之れを讀んでも少しも意味が解らず、是れは何の意であるぞと湘子に尋ねた時、彼は唯笑て、後になつて必らず思ひ當たるこ

とがあるからと言て、精しく説明をしなかつた。其後幾何も經たぬ中に、文公は佛骨表のことで罪を得潮州へ謫せられて其處へ赴く途中、藍關といふ處で大風雪に逢ふて困難を爲た。其時、何處よりか忽然

として韓湘子が現はれ、文公に向て、先日花の中にあつた一聯の句は、即ち今日のことを詠んだものであると言つたので、文公も始めて其意味を悟り、暫時天を仰て嗟嘆して居たが、頓て此聯句に前後の句を附て遣らうと言て作られたのが、即ち彼の有名な一封朝奏九重天云々の一篇である。そして其夜は藍關の宿舎に泊て互に種々と身の上のことなど物語り合ひ、其翌日湘子は別を告げて立去る時、此藥を服して居れば決して瘴毒に罹る患がないからと言て、瓢子につめた藥を文公に與へ、尙ほ言葉を續けて、幾程も經たぬ中に再び朝廷へ呼返さるゝ時が來ることを告げ、而して此後再び汝と遇ふことが出来やうかと文公が尋ねたのに對して、彼は唯此先のことは天機を漏らす處があるから、豫め言ふことが出来ぬと對へて、其儘何處へか立去て了つた。

瑕丘中

瑕丘仲は瘞の人である。百餘年の間藥を賣て生活して居たが、或年地震て家が壊れた時、棟の下になつて變死して了つた。其時此處に一人の悪者が居て、彼の死骸を水の中に放り棄て、其藥を悉く奪ひ取り、何喰はぬ顔を爲て其藥を賣

て居ると、或日己に死んだと思つた瑕丘仲が彼の店先へ尋ねて來た。て、件の男は大に驚き、頻りに自分の罪を詫びると、瑕丘仲は別に深くも彼の罪を責めず、唯世間の人をして自分が仙道を得た者であると云ふことを知らしむれば、それで充分であると言て、其儘何處へか立去て了つた。然るに其後彼は北方の夫餘王の驛舎の役人となり、一度傳馬に乗て再び故郷の穽へ歸て來たことがある。北方の人々は皆彼を以て天上の仙界から、暫時此世へ滴流された仙人であらうと噂して居たさうである。

江 叟

三四〇

江 叟

江叟は何處の者であるか、其傳記は詳て無い。平生能く笛を吹くことに妙を得てあつたが、或日園ある槐の樹の上に一人の神人が立て居て、荆山へ往いて鮑仙を尋ねて見よ、屹度汝の爲に好い事があるからと彼に教へたので、彼は教へられた通り、荆山へ往て鮑仙に遇ふと、彼は一管の笛を取出して江叟に與へた。其處で江叟は人の居無い深い谿の邊りて、試に件の笛を吹いて見ると、忽然として一頭の龍が現はれ出て、驚く彼を脊負ふて何處とも無く立去て了つたが、聞く所

によれば彼は、其後水仙となつて居たさうである。

許栖岩

許栖岩は岐山の麓に住んで居たが、唐の貞元年間進士の試験に落第してから長安に住居を移した。其時一匹の蕃馬が市へ賣りに出たので、彼は之れを見ると俄に欲しくなり、先づ或道士に請ふて件の馬を卜ふて貰ふと、此馬は龍の血を稟けた物で、若し此馬を手に入ることが出來たならば、遂に昇天たる事が出来るであらうとの事であつたので、許栖岩は大に喜び、早速千金の價を出して件の馬を購ふた。

其時會、魏の令公が蜀の國の王となつて居たが、許栖岩或日右の令公に謁見しようと思ひ、件の馬に乗て劍閣山を通ると、馬は足を脱して百丈もあらうと思はるゝ深い壑底に墜落した。然るに幸にも谷の底には枯葉が推高く積んで居たので、自分も馬も別に負傷も何にも爲なかつた。其處で彼は馬の足に任して、何處ともなく先へ進んで行くと、數十里計にして、一の洞口の前へヒッ、ッ、コリ出た。見れば、其邊一面に花木が生え茂て居て、其處に一の池がある。池の傍に一軒

許 栖 岩

三四一

の石造の家が有て、内には一人の白髪の老人が居て石塙の上に横になり、傍に二人の女が附て居た。そして今許栖岩が来たのを見て大に驚き、此處は太乙元君の家で、普通の人の來べき處でない、汝は如何して此處へ來たのであるかと問尋ねたので、許栖岩は委細漏さず其故を話すと、件の二人の女は此事を老人の元君へ話したと見え、元君は此時靜に起上て、汝は人間界に在る時何を好んで讀て居たかと問ふた。其處で彼は臆する景色なく、仙道を好んで老莊の二書と黃庭經とを讀んで居た由を答へると、元君は重ねて右の三書に對して汝は如何思ふて居るか尋ねられたので、彼は暫時沈吟した後、莊子は一個の真人で、踵を以て息氣を爲て居た。老子は其道玄妙の奥に入つて居て、殆んど常人の窺ひ知る所でない。黃庭經に到ては要するに長生の道を説いた一部の仙書に過ぎぬものであると、憚る所なくスラ／＼と答へた。元君は之れを聞て、汝は餘程道を心得て居るやうに見えると言て、彼を自分の傍に坐らしめ、彼の二人の女に命じて石髓を酌んで彼に飲ましめた。

姑くすると、侍女の一人が穎道士の遣て來たことを告げて引退ると、摺違ひに穎道士が其處へ入つて來た。許栖岩は座を避けながら密と件の道士を見ると、

豈計らんや、それこそ藝に自分の馬を相て呉れた道士であつたので、彼は大に驚き、其後自分の身の上に起つたことを手短に物語ると、件の道士は幾度か嗟嘆し、自分が昔彼の爲めに卜ふて遣つた卦が愈、今日になつて眞實となつた喜びを陳べて共々笑ひ興じて居る處へ、俄に一人の仙童が現はれ、彼の主人の東皇君が元君を呼迎へて今夜曲龍山に於て觀月の酒宴を催す由を告げたので、元君は許栖岩を顧みて、自分と一所に東皇君の許へ趣くやうにと説き勧め、二人一所に仙童が連れて來た龍に乗て其處を出發した。

扱て元君と許栖岩の二人は頃刻の間に曲龍山へ到着した。見れば釣橋、浮橋は各れも皆千歩もある長い大仕懸の結構で、宮殿の柱は林のやうに高く空中に聳え立ち、其頂が雲に隠れて能くも見えない。玉欄、錦帳は何れも皆數寄を凝したもので、其壯麗なことは辻も筆にも繪にも描き盡せない程である。

正座にあつた東皇君は元君を見ると、座を離れて態、階梯の處まで出迎へ、そして一所に來た許栖岩を一目見るや、汝は許長史の孫で無いか、自分は先日汝の祖父の長史と一所に酒を飲んであつたが、汝が今日此處へ來ると云ふことは豫て知て居たと言て、彼を座敷へ招して酒肴をすゝめ、夜が更けて興も闌になつた頃、

座敷に侍て居た仙女に命じて青城丈人の歌を誦はしめた。歌に曰く
 玉砌瑤階泉滴孔。玉簫催風和煙舞。青城丈人何處遊。玄鶴唳天雲一縷。
 扱て月觀の酒宴も終ると、元君は許栖岩と一所に再び羸の龍に乗て我家へ歸
 て來たが、途中で一個の大構の城郭の上を通つた時、許栖岩は元君に此處は何處
 であるかと尋ねると、それは新羅國の王城であると云ふことであつた。暫時し
 て又圖ある海濱の上にとると、其處に又一の小さい城郭が遙か下の方に、霞の底
 になつてチラ／＼見えるので、此處は何處であるかと尋ねると、それは唐の登州
 であつた。

扱て許栖岩は元君の洞府へ歸て來た後、懇に暇を告げて歸らうと爲ると、元君
 は一寸彼を呼留めて、汝は已に石髓を服して居るので最早普通の人間ではない、
 千歳の長壽を保つ仙人の身であるから、人間界へ歸ても今日のこととは決して世
 間へ漏らしてはならぬ、それから又女色は吳々も慎んで近づくるな。そして遠
 からぬ中に復た汝と再會する時機があると思ふからと云て、其心得を細々と説
 いて聞かせ、而して許栖岩が愈馬に乗て其處を立去らうとした時、元君はフト件
 の馬に目を注て、此馬は自分の洞府に久しく飼馴した龍である。先年田畑の植

物を害した懲罰に暫時人間界へ謫つたのである。汝若し人間界へ到着したな
 らば、涓溪の邊で此馬を解いて放つて呉れ、然すれば此馬は舊の龍と爲つて再び
 此處へ戻て來るであらうと告げた。

扱て許栖岩が愈、暇を告げて洞府の門を出やうとする處へ、侍女の一人が慌て
 出て來て彼を押留め、此馬を解いて放つ時に、序に驍縣の田婆が針を少許贈て
 呉れよと丁寧に頼んだので、彼は心快く承諾して其處を辭し、須臾にして驍縣な
 る我家へ歸て來た。時は正に唐の宣宗皇帝の大中五年で、彼が家を出てから殆
 んど六十年許りの長い月日になると聞て、彼は今更のやうに吃驚した。

其處で彼は或日田婆の針を尋ねて其針を求めると、件の老婆云ふやう、先日太
 乙家に仕へて居る紫雲姉妹から手紙が來て、或人に頼んで針を注文したから、其
 人が見えたら針を渡して呉れと細々と認めてあつたが、それは全く足下であつ
 たかと言て、針を一束渡して呉れたので、彼は件の針を馬の鬣に結ひつけ、涓水の
 邊で彼の馬を解き放つと、馬は忽ち一頭の龍と化して何處へか飛び去て了つた
 其後許栖岩は匡廬の邊りに棲んで居たが、時には顯はれ、時には姿を隠して、隱
 見出沒更に一定して居らなかつたさうである。

伊和玄解

伊和玄解は何處の人であるか詳でない。容貌は恰も十五六の少年のやうで、常に一匹の黄色な牝馬に乗て青州袁州の間を往來して居たが、其馬といふは平常芻粟を食はず、又糞たぐりもかけず、唯一枚の青い毛氈を脊の上に布いて、常に其上に乗て居た。而して彼が人と話すのを聞くに、何時も皆千年以上の古い事て、其によつて彼の年を推測すると、彼は是數百年長命をした者であることは疑なかつた。

唐の憲宗皇帝或日彼の名を聞て朝廷へ呼寄せ、宮中の九華室へ留めて置き、紫芝及び酒を賜ひて時々親らも訪問し、頗る丁重に取扱て居たが、玄解は元來朴訥な男で、人臣の禮儀などに習て居ないから、随分無禮な振舞も多かつたけれど、皇帝は何時も斯うした男だと見知て別に深くも咎めなかつた。處て或日皇帝彼に向て、汝は年が大分老つて居るにも拘らず、何故に斯様に常に若々しくして衰ふることがないかと尋ねられると、彼は海上に三種の靈草があつて、一は雙麟芝といひ、二は六合葵といひ、三は萬根藤といふ。此草を食べて居れば誰でも常に

若くなつて居ることが出来るかと答へた。其處で皇帝は彼に件の三種の靈草を請受け、それを庭前に植ゑしめ、先づ自らそれを採て試に服して見ると、我ながら精神が爽かになつたやうな心地がした。

其後玄解は頻りに暇を乞ふて山へ歸らんことを願つたけれど、皇帝は彼を惜んで容易に聽入れず、却て宮中に木を刻んで蓬萊三山の摸型を作り、それに種々な彩色を施した帛を張り廻し、又は美しい珠玉たまなど懸けて裝飾し、而して或年の元日に玄解を呼んで件の蓬萊山を示し、扱て彼に向て、道を得た神仙でなければ此蓬萊山に到ることが出来ないと言ふが、それは眞實かと尋ねられると、彼は微笑みながら蓬萊山へは道程果して何程あらうか、行かうと思へば數秒の間に往復することが出来る。恚う言終ると彼の身軀が忽ち二三寸の小男となり、件の蓬萊宮の摸型の中へ入つて終に見えなくなつた。而して傍に見て居た群臣共が各々聲を揚げて彼の名を呼んだけれど、彼は遂に再び其處から出て來なかつた。

皇帝は之れを見て今更彼に欺かれたことを後悔し、追慕の餘り殆んど寢食を廢して懊惱なされたが、其後件の蓬萊山を名づけて特に藏眞島と呼んで居た。

然るに其後十日計り經つと、青州といふ處から使者が見えて、十日計り以前に玄解が牝馬に乗て、海を渡りて東の方へ去るのを見たると上進して來た。

王四郎

王四郎は唐の洛陽の尉王琚が姪で、幼少の頃から仙術を好んで、久しく家を出て、諸方に流浪して居た。

元和年間王琚が所用を帯びて調といふ處へ赴き、鄭の國から都へ上つて途次天津橋の上を通ると、王四郎は突然彼の馬の前に現はれ出て、彼に金五兩を與へた。そして其金といふのは普通のものとは異なつて居て、色が眞紅で鶏の冠の色と同じであつた。其時王四郎は彼に向ひ、此金は世の常の物と全く違て居るから、世間の俗人に售り渡すやうなことを爲す、京都へ着いたら直ぐに張蓬といふ者を訪ねて之れを渡せ、二千兩は黙て先方から拂ひ渡して呉れるであらうと言て、其儘立去らうと爲た時、王琚は急に彼を呼留め、今は何處に居るか尋ねると、彼は此頃迄は王小屋山の洞天に住つて居たが、今日にも一家を引連れて峨眉山へ引越さうかとも思つて居ると答へたので、然らば唯今は何處に寓つて居るか

と重ねて問ふと、中橋の附邊の宿舎で席家といふ所に居る由を答へた。て、王琚は其日旅宿に着くと、早速席家といふ旅舎を探覓めたが、其時王四郎は已に其家を立去つた跡であつたから、其家の主人を呼んで王四郎の行李は何程有つたかと尋ねて見ると、妻妾が彼是四五人あつて、車馬荷物共何れも皆華美を極めた物で、其數も少なからぬ様子であつた。

扱て王琚は其處を出發して愈、京都へ着いた時、張蓬といふ者を尋ねて件の金を出して彼に示すと、彼は大に喜び、早速二千兩の錢を仕拂ふて寄越した。其後も彼は屢、張蓬の許を訪ねたけれど、其後は何處へ立去つたのか、附邊の者に尋ねて見ても、彼の行衛は皆吳分らなかつた。

柳實元徹

柳實元徹の二人は共に衡岳の人である。唐の元和年間、夫れ、驩慶の二州に居る父の許へ歸省するとして共に一所に長い旅を爲たことがあつた。其時登州といふ所から海を渡りて交趾の方へ到らうと爲たが、其夜俄に颶風が起りて舟を繋いで置いた網を斷切り、船を遙かの沖の方へと吹流し、船は波に揺られながら

一晚海上を彼方此方と漂流して、遂に圍ある孤島に漂着した。

扱て夜が明けてから柳元の二人は件の島に上陸して見ると、其處に一の廟があつて、中に白玉天尊の像が安置され、神前の案の上には黄金で作つた一個の香爐が置かれてある。其處で二人は先づ其社壇に腰打掛けて暫時休息し、一夜波にもまれた身體を休めて居ると、東の空から一簇の紫雲が海の上を此方を指して、恰も大波が一時に押寄するがやうに飛んで來た。そして須臾すると、髪を雙環に結ふた一人の仙女が手に玉の篋を捧げて現はれ出て、柳元の二人を見て怪しみ尋ねたので、二人は委細包まず難風に遇つたことを物語る、件の仙女は大層氣の毒がり、今須臾經つと、至虛尊師と南溟夫人の二方が此處に見えらるゝ筈であるから、暫時此處に待て居るがよい、而して若しお前達二人の難儀を聞かれたならば、何とか善いように取計て呉れるであらうと言て、件の仙女は廟の中へ入り、天尊の像の前に詣て香を炷いた様子であつた。

暫時すると、果して至虛尊師、南溟夫人の二仙が各自い鹿に乗り、彩霞を飛ばして遣て來られた。柳元二人は地に平伏して禮拜し、委細の事柄を押包まず話して救助を求めると、至虛尊師は獨り心に點頭しながら一方の南溟夫人を顧みて、

彼等二人を本國へ送り返す相談を爲された。其時南溟夫人は熟々彼等二人を視て、お前達の骨柄を相るに仙氣自ら溢れて居る、終には屹度仙道を得ることが出来るに相違ない、そして兩人には夫れくの宿縁があつて、既に約束された師が定められて居るから、其師に遇ふ日を心靜かに待つが宜い、然し折角斯うして遇つたのであるから、紀念に何か一つ贈て上げやうと言訖ると、癡の仙女を顧みて二人を本國へ送り届けるやうに吩咐け、そして此二人の往く先は百花橋である由を聞て、夫人は一個の玉壺に次のやうな詩を添へて二人の者へ渡した。

來從一葉舟中來。去向百花橋上去。若到人間扣玉壺。鴛鴦自解分明語。

扱て柳元の二人は彼の仙女に連れられて其處を出發したが、間もなく百花橋に到着した。橋の長さは數百尋あつて、欄子の傍には種々の名も知らぬ花が咲いて居て、紅白相交り、黄紫相映じ、其綺麗なことは目も醒むる計りである。そして能くく視ると、長い橋と思つたのは數多の龍が相連り合つたものであつた。其時件の仙女は懷中から蜘蛛の形した、小さい物が入れてある一の小盒を取出して、何を隠さう、妾は水中の仙女で、曾て番禺の一少年と情を通じて一人の子を産んだが、三つになつた時、ふとした事から其子と郎夫とに別れて了つた。而

して其子は南岳夫人が養ひ取て更に南岳の神へ遣されたが數年前南岳の回雁峯から自分の今居る水府へ便りがあつた節、自分の子が曾て玩んで居た玉の寶環を其使者に托して、自分の子へ渡して呉れるやうに頼んで遣つた處、件の使者はそれを押隠して自分の子に與へなかつた。其處で今も前達には是非頼み度いのであるが、若し本國へ歸つたら、回雁峯の使者の廟へ詣て此盒を其祠の中へ投り込んで呉れ、然すれば件の寶環は自然と前達の手に入るであらう、そして件の寶環を獲られたら、直ぐに南岳に居る自分の子へ宛て送つて貰いたい、然すれば自分の子は亦も前達に對しても相當の報ひを屹度爲るであらうと物語り、件の小盒を二人に渡した。

其時彼の二人は先刻南岳夫人の詩に、若到人間扣玉壺、鴛鴦自解分明語、といふ二句があつたことを想出して、彼は何の意味であるかと尋ねると、仙女は深くも其理を語らず、唯何事か起て思案に餘ることもあつたら、其時には此壺を軽く叩け、然すれば其内に自ら聲を發するものがあつて、其間に答へるであらうとの意味であることを告げた。次に、然らば我々に夫れく定つた師があるのとこのとであるが、其師といふのは何人であるかと尋ねると、仙女はそれは南岳の大極

先生であると教へ、其儘別を告げて何處ともなく立去て了つた。

扱て柳元の二人は百花橋で仙女に別れ、其後間もなく自分の家へ歸て來ることが出来たが、爰に家を出てから今日迄最う十年の長い月日を経過して居て、前には未だ乳呑兒であつた小供が最早立派な青年となり、而して兩人の妻は死んで最う三日程経て居たのを見て、二人は各れも吃驚した。

其處で兩人は急に件の玉壺を叩いて、妻を蘇生せしむるには如何したらよいかと尋ねると、中から聲が爲て、回雁峰の使者の廟へ行いて、速かに仙女から授けられた小盒を投げ込めば一つの妙薬を得べし、其薬を以て死人に服さすれば立處に蘇生するであらうと告げたので、兩人は急いで右の回雁峰へ赴き、使者の廟を尋ねて其祠の中へ件の小盒を投げ込むと、須臾して一頭の黒龍が祠の中から飛び出て、一の玉環を地上へ投げ落した。其處で兩人は件の玉環を拾ひ取てそれを南岳の廟へ納めると、忽ち黄衣を着た一人の少年が現はれて、二個の黄金で作つた合を出して兩人に與へ、此中の薬は返魂膏、といつて死んだ者を活かすに神功のあるものである、假令死んでから一年経つた後でも、其功能は決して失せるやうなことが無いと告げたので、兩人は大に喜び、右の薬を家へ持返して各、其妻

の頂うへへ右の藥を塗て遣ると、死人は忽地息氣吹返して起上つた。

本村懋の仙人

三五四

其後二人は一所に連立て南岳山に太極先生を尋ねたが、一年経ても廻り合はなかつた。然るに或日雪が非常に降積つた朝、一人の老人が薪を負ふて來るのにフト出逢ふた。其時二人は件の老人を見て殊の外不憫に思ひ、携へて居た酒を煨めて馳走し、見るとも無く其負ふて居た薪に目を留めると、其薪の切口に各、太極の二字が刻まれてあつたので、二人は大に驚き、急に座を下つて禮拜し、彼の南岳夫人から授けられた玉壺を取出して委細包まず其故を話すと、件の老人は玉壺を見て、是れこそ自分が平生玉液を貯へて置いた壺であると云て、其儘兩人を伴ふて祝融峯へ上て了つたが、柳元の二人は其限り再び家に歸て來なかつた。

本村懋の仙人

此處に休友といふ處に權同といふ者が居て、元和年間進士の試験に落第したので、江南地方に流浪して居たが、或年病にかゝり起臥おきふ自由ならぬ爲め、本村懋ほんむらたけの某といふ者を傭ひ入れて略、一年計り使て居た。

或日權同は彼者を市へ遣して甘豆湯を買はしめると、彼は唯少許の水と炭と

を買ふて來たが、暫時して一束の木の枝を折て來て、それを手で兩三度揉んだ後、微さしく火の上に翳すと、其物ものが忽ち甘草となつた。之れを見て權同は心の中で扱あても不思議なことを遣る男だと思て居ると、良久して今度は一握の沙を何處からか持て來て、それを鉢に入れて捏ねると、忽ち皆豆となつた。其處で彼は件の甘草、豆とを湯の中へ入れて甘豆湯を作り、それを權同へ薦めたが、權同が之れを服すると、其病は忽ち癒て了つた。

其處で權同は件の僕に是迄の忠勤を厚く謝し、充分の謝禮を爲たいが、見る通りの貧乏故思ふに任せぬことを審に物語り、而して汝の爲めに村の人々を呼集めて多少の路銀を工夫して遣らうと思ふから、是れて少量の酒と肉とを整へて呉れと言て、着て居た衣を脱いで彼に與へると、彼は顔に笑を含みながら、是計りでは兎ても足らぬ由を告げ、自分によい思付があるから自分に一切任して呉れと言て、一株の枯れた桑の木を斫て來て、それを薄く扁平へいぺんく切刻きりぎりみ、盤の上へ載せて之れに息氣を吹懸けると、不思議や其物ものが忽ち化して數十斤の牛肉となつた。又水を數個の瓶に汲んで來て、同じくそれに息氣を吹懸けて酒となし、村の人々を呼集めて鱈腹御馳走し、其返禮として村の人々から數十反の緞帛を貰つた。

本村懋の仙人

三五五

之れを見て權同は益、彼の普通者たゞもので無いことを知り、今更自分に彼を見る明の無かつたことを慚ぢて、深く是迄の無禮を謝し、改めて彼の從僕とならんことを請ふと、其時彼は始めて自分は仙人であるけれど、罪を犯した罰によつて人間界に謫せられた者であることを告げ、然して自分が今下賤の身と生れて權同に備はれたのも、固より自分が犯した罪の報ひで誰をも咎むべきでない、其外天帝の許を得て再び仙界に歸るべき時期が未だ到着して居ないから、猶ほ從來の通り此處に暫時留めて置いて貰ひたいことを話した。其處で權同も彼が言ふ儘に是迄通り家僕として使つて置いたが、然し彼は從來のやうに呼捨にして召使ふのが如何にも心苦しい處から、其當惑する様子が明かに彼の顔に表はれて居た。彼仙人も之れを見て却て却て氣の毒に思ひ、或日權同に向て、君が斯様に自分に對して遠慮をされるやうでは、却て君の志を妨げることになるからと言つて、懇に暇を告げ、尙ほ人生の富貴榮達といふ者は皆天命の然らしむる所で、人力の左右し得る所でない、唯其境遇に安んじて物と共に推移するのが一番幸福なのであることを説き聽かせ、其儘何處ともなく立去て了つた。

盧山人

盧山人は何處の人であるか詳でない。唐の寶曆年間荆中といふ處に住んで居て、木材や石灰等を賣つて生活して居たが、時々不思議な奇術を行つては人々を驚かして居た。

此處に買人かひびとに趙元卿といふ好事家こうじやで居て、盧山人の仙術に達して居ることを知り、即ち彼に從つて其術を習ひ覺えやうと思ひ、木材等の買物に事寄せて足繁く彼の許に出入し、其都度何時も多少の茶菓等を買つて來ては、盧山人の機嫌を取つて居たが、盧山人は早くも彼の心中を見貫き、或日彼に向て言ふやう、君は木材等を買ふ爲めに自分の許へ來るのではあるまい、實は自分が仙術を知つて居ることを見て、それを知り度い爲めに斯うして時々自分の許へ來るのであらうと星を指されて、趙元卿も今更其明鑑めいかんなのに敬服し、密に自分の意中を明かして仙術の教授に預り度いことを懇願した。

其時盧山人は彼に向て、今日午時君の主人の身上に一大變事が起るであらう、然しそれも、自分が今云ふ通りにすれば幸に其禍を免るゝことが出来る故、一刻

も早く主人の許へ歸て自分が言つたことを告知らした方がよい。それは今日午頃なつに脊に一個の囊を負ふた一人の商人が君の主人の許へ來て物を強請ねだるであらう、其時は戸を閉ぢて彼を家の内へ入れてはならぬ、而して若し其者が怒出して亂暴を働くやうなとてもあらば、其時は一家族を連れて河のある處へ避難するがよい、然すれば唯錢三千四百の費用で事が濟むと告げたので、趙元卿は大に驚き、急ぎ主人の許へ馳せ歸て、斯々の次第と盧山人から聞いたことを包まず物語る、と主人の張氏は豫ねて盧山人の賢明なことを聞て知て居るので、早速家族を戒めて深く奥の座敷へ隠れて居らしめ、四邊の戸締を嚴重にして待て居ると、午なつ近くなつた時、果して一人の妙な男が遣て來て物を乞ふた。然し家人共は堅く戸を閉めて誰一人之れに應ずる者が無かつた。て件の男は遂に怒出し、足を揚げて戸を踏破らうと爲たけれど、板が丈夫なので破ることが出来ない。彼是する中近隣の者共が數十人、其處此處から集て來て騷擾し始めたので、主人は家族を引連れて裏門から逃出し、或河の邊りへ避難を爲た。

扱て件の男は散々亂暴を働いた末、遂に其處を立去て了つた迄はよかつたが、數百歩計り先へ進むと、突然厥つき倒れて其儘其處に絶息して了つた。然る處に

其處へ彼男の妻が遣て來て、夫の死骸を見ると非常に泣き悲んだので、傍に見て居た人々は委細包まず彼女に物語る、と彼女は大に怒て張氏の家へ吐鳴り込み、警官に向て張氏の暴狀を訴へた。其時警官は張氏を呼んで事の顛末を逐一聽取り、張氏の方に少しも罪が無いことを認め、た時、警官は張氏に向て只彼の男の死を償ふさへ爲れば宜しいことを告げ、妻も亦其判決に同意した。て張氏は彼男の爲めに一切の棺具を整へ、そして彼の葬式を營んで遣つたが、其費用は盧山人が言つた通り、僅か三千四百文で悉く濟んであつた。

此事があつてから盧山人の名が俄に世間に廣まり、毎日盧山人の處へ、押掛けて來る者が引きも切らぬ有様であつたから、彼も今は其煩擾に堪へかね、終に其處を去て復州の境界かぎに到り、陸奇といふ者の住家すまの傍に舟を維といて、其處に暫時身を隠し、而して、近い中に此處も引拂て京都に居る知人の許へ行かうと思て居ると、此事何時しか陸奇の耳へ入つた。其處で陸奇は或日彼の許へ尋ねて行き種々身の上のことなど問尋ねると、盧山人は陸奇に向て、彼が住宅の後に黄金を入れた一個の瓶びんが埋められてあることを告げ、然し是は今年漸う三才になる小供の所有となるべき物で、他人が漫りに取て横領すると禍直ちに其身に起るか

盧山人
 三六〇
 ら吳々も注意して、一文なりとも其錢を掠め取てはならぬぞと話し頓て其儘京都の方へ出發して了つた。

扱て盧山人が京都の方へ出立した跡で、陸奇は奴僕に命じて家の後の空地を掘らして見ると、地下數尺の處に一枚の板があつて、其板を取りのぞくと、果して大きな瓶が其下に埋められてあつて、中に燦爛たる黄金が一杯入つて居た。其時陸奇は盧山人が言つた言葉を妻に話して此中の一錢たりとも取てはならぬぞと堅く吩咐てあつたけれど、妻は之を見るより俄に慾心を起し、件の黄金萬錢程密と盜取て懐へ押隠すと、折柄傍に遊んで居た娘の子が暴かに頭痛が爲ると云て、四顛八倒の苦を始めたので、陸奇は今更盧山人の戒を破つたことを後悔し、急に馬を飛して盧山人の跡を追懸け、晝夜兼行して漸く彼に追ひ付き、斯々の次第と始から終りまで物語り、深く其戒に背いた罪を詫びて救を求めると、盧山人は之を聞て大に腹を立て、肉身の者と金錢と比較して孰が重いと思ふかと叱り付けたので、陸奇は俄にハツと心付き、急ぎ我家へ引返して來て、件の盜み取た金を元の瓶へ納めた上、其瓶を舊の處へ埋めて了ふと、子供の病は忽ち癒て了つた。其後盧山人は再び復州へ歸て來て、或日數人の朋友と一所に山林水澤の邊を

逍遙して居ると、路で盛裝を爲て酒に酔ふた、六七人連れの縉士に出逢ふた。酒臭い息氣が四邊に匂ふて、通り過ぐる人々は皆袂て鼻を掩ひ隠してあつたが、盧山人は彼等を一目見るなり忽ち聲を荒らげて叱責し、何時迄現在の行業を改めないのか、天罰今に其身に及んで汝等の生命は直ちに失はるゝてあらうと言ふと、件の者共は悉く地に平伏して一向其罪を謝した。其時盧山人に連立て居た人々は、大に怪しみ、彼に其理由を尋ねて見ると、件の縉士は皆路人を脅して金錢を掠め取る盜賊であつた。

盧山人は時に白髮の老人となり、時に美少年の姿となつて、其容貌常に一定しては居なかつたが、さて彼は平生何を食べて居たのか、誰一人としてそれを知て居る者は無かつた。

威道遙

威道遙は藟尋が妻である。何時頃から仙道を覺えたのか分らないが、平生一室の中に獨坐し、五穀を斷つて神を養ふことに勉めて居た。處が或日の朝、其家の屋根が自ら粉微塵に壞崩て、恰も雲のやうに一團になつて空中に舞ひ上つ

たが、室の中の物は別に何等の異状もなかつた。其時彼女は數多の仙女と連れ立て、雲の中を彼方此方と戯れて居たが、頓がて雲も收つて見れば、彼女は何處へ立去て了つたか、其姿は己に其處に在らなかつた。

唐居士

唐居士は郴州の人である。其名は何と云てあつたか、世にそれを知て居る者が居無い。然し當時世間の人々は皆彼が己に百歳以上になつて居ることは信じて疑はなかつた。

此處に楊隱之と云ふ者が居て、幼少の頃から非常に仙道を好み、常に唐居士の許へ訪ねて来て居たが、或夜居士の許に宿泊することがあつた。其時居士は其娘を呼んで下絃月子を持って來いと吩咐ると、暫時して娘は片紙のやうな物を持って來て、それを壁の上へ貼付けた。すると居士は其前へ坐て禮拜し、今夜來客があるによつて、光明を賜へて呉れと頻りに禱ると、不思議や、件の片紙から俄に一道の光明が發射して四邊を照す様は、恰も燭火と少しも變らなかつた。

裴航

裴航は唐の長慶頃の人で、進士の試験を受けたが不幸にして落第したので、鄂渚の附近に遊んで胸の鬱憤を癒して居た。然るに此處に彼の舊友に崔相國といふ者が居て、彼に痛く同情を寄せて錢二十萬計りを彼に贈つた。其處で彼は其錢を持って囊の恥辱を洗かん爲めに再び京都へ引返し、路々船に乗て二三日を波の上に暮し、急がぬ旅の悠々と諸方を見物して居たが、同じ船に樊夫人といふ一人の美人が乗て居ることを聞き、一度其姿を見ようと思ひ、種々氣をつけて機會を覗ふて居たけれど、夫人は常に室の中に垂籠て居て滅多に外へ出なかつたので、彼は遂に夫人を見る事が出来なかつた。

其處で或日彼は心に一策を案じ、夫人の侍婢の裊烟と云ふ者に頼んで一篇の詩を夫人の許へ送つて遣つた。其詩に曰く、

向爲相越猶懷想。况遇天仙隔錦屏。倘若玉京朝會去。願隨鸞鶴入青冥。

すると數日経て、夫人の許から侍婢を介して言寄越した返事には、自分の夫といふは今漢南に居るが、近い中に官を罷めて田園に退隱しようと思つて居る。

其處で一應妾の意見をも聴て然る後何うなりと決め度いと云ふ事で、其れが爲めに自分は今種々と行末の事を考へて獨り煩悶して居るのである。であるから、今浮いたことなどに心をよせる暇も無い。だが貴郎と斯うして同じ船に乗合したのも何等かの宿縁であらうと思ふから、互に話し合ふて旅の徒然を慰める位にして欲しいとあつて、最後に一篇を詩を示して居る。

一飲瓊漿百感生。玄霜搗盡見雲英。藍橋便是神仙窟。何必崎嶇上玉京。

扱て船が愈々襄漢に着くと、樊夫人は侍婢に化粧道具を入れた箱を持たしめ、裴航には一言の會釋もなく、其儘上陸して了つた。之れを見て裴航も續て上陸し、急に其跡を追跡して其行衛を探したけれど、一向に分らなかつた。

それより彼は一向路を急いで藍橋といふ驛を通ると折節咽喉が頻りに渴いて堪へ切れなかつたので、傍の民家に行つて水を乞ふと、其家は三四間程の茅屋で、一人の老媪が軒の下に坐て麻糸を緝て居たが、裴航の姿をデロ／＼眺めて稍々輕蔑した調子で娘の雲英を呼び、一甌の漿を持って來て彼に勸むるやうに吩咐けた。其時裴航はフト樊夫人の詩に雲英の語が有つたのを思出し、加之に處も矢張り藍橋であるので、彼は心の中に不審訝しく思ふて居た。暫時すると戸口の前に

懸けて置た葦で編んだ籜の下から、細い美しい手が出て、姿甌を眼の前へ突出した者がある。

其處で裴航は件の甌を受取て之れを飲むに、實に甘露の味が爲て我知らず喉を鳴して悉皆飲み乾して了ひ、其物を再び籜の内へ返す際に思切て内を覗くと、二八計りの美しい女の子が一人羞を帯びて其處に立て居た。

之れを見ると裴航は俄に心を動かし、急に彼女が戀しくなつて堪らないので、身體が大分疲れきつて居るから、暫時の間此處に休憩さして呉れと老媪に請ひ、軒の下に腰を掛けて暫時息を休めて居る中、先刻水を呉れた女の子は彼老媪の孫娘であることを聞き、扱て結納はドッサリ遣るから彼の娘を自分の妻に呉れないかと老媪に談判すると、老媪笑て言ふには、自分は最う大分年も老て居るから、若し適當な郎君があつたら一日も早く彼娘を嫁付けて終ひたいと、爰時から思て居るのである。然る處昨日突然一人の仙人が見えて、靈藥を一匙與へ、此藥を玉の臼に入れ玉の杵を以て搗き、百日經つた後これ呑めば不老不死の壽命を得て、末長く樂しむことが出來ると教へたので、實は其玉の杵臼を手に入れたと思つて居るのである。それで若し郎君が眞實に彼娘を欲しいと思ふならば、

其玉の杵と臼とを持って來れば、何時でも娘を差上げ申さう。
 裴航は之れを聞て大に喜び、百日経たば決と玉の杵臼を探して持て來るから、其れ迄は何人にも契約を爲てはならぬぞと堅く約束し、彼は其れから京都へ到着すると、直ぐに四方を奔走して玉の杵臼を詮索し、道で友人等に出逢ふても素知らぬ振して通り過ぎて居た。其處で彼を知て居る者共は皆彼を以て發狂した者と思ひ、誰一人として彼を相手にする者が居無くなつたが、然し裴航は結句之れを煩くなくつて良い幸福と思ふて居た。

扱て然斯して居る中、彼は或處でフト一人の玉商人の老翁に遇ひ、自分が故あつて玉の杵臼を探求めて居る由を告げると、件の老翁は近頃魏州の卞老の許から音信があつて、魏州に一人の玉の杵臼を賣て居る者が居ることを知らして寄越したが、君が其れ程熱心に探し求めて居るのならば、君の爲めに委細のことを認めて卞老の許へ左様言て遣らうと言て、一通の紹介狀迄認めて呉れた。其處で裴航は其紹介狀を以て魏州へ赴き、件の卞老に面會して委細包まず物語ると、件の卞老は錢二百緡なければ其物を手に入ることが難いと言つたので、裴航は財布の底を叩いて有限りの錢を出したが、それでも猶ほ少し足りなかつたの

で、下僕と馬とを賣拂て其玉の杵臼を購ふた。

其處で裴航は件の玉の杵臼を大切に懐中して藍橋の老媪の許へ行くと、老媪は大に喜んで早速娘の雲英を彼に與へることに爲た。其時件の雲英は今直ぐに婚禮を爲てもよいが、成る可くは百日の間藥を搗てから、其後で悠焉婚禮を濟したが、よからうと異議を申出したので、裴航も止むを得ずそれに同意した。其時老媪は帶の間から仙藥を取出して裴航に與へて毎日それを搗かしめ、夜になれば裴航の藥と曰杵とを戸袋の中へ藏て置た。

然るに此處に一つ航不思議なことは、夜半になると毎夜件の戸袋の中で何者か頻り



に薬を搗く音がするので、或夜裴航は怪んで密と其中を覗いて見ると、驚いた一匹の兎が居て頻りに薬を搗て居るのであつた。

扱て愈、百日が経つと、老媪は件の薬を服し、そして裴航に向て、自分は一足先に仙洞へ行て廣く姻戚の者共に其旨を通知し、愈、黃道吉日を撰んで婚禮の式を舉ぐるから、汝は暫時此處に在て使を遣す迄待て居て呉れと言て、娘の雲英を連れて後の山へ登て了つた。然るに數日経つと、件の老媪の許から一人の使者が見えたので、彼は其使者と一所に老媪の住家へ行て見ると、其處は極めて宏壯華麗な建物で、雲に聳える高樓、蜂窩のやうに取廻した廻廊、金銀を鑲めた大門小門、それから室々を飾る錦帳繡帷等何れも皆華美を盡し、而して使て居る仙童玉女、其數幾百人、其豪華なと帝王でも此程迄は出来まいかと思はれた。

其時老媪は裴航に向て、彼は素と裴真人の子孫で、仙人となるべき宿縁は已に業に生れた時から有て居たのであることを告げ知らせ、次に諸の姻戚の人々へも彼を引合した。

其時髪を鬢髻に結び、身に霓衣を着た一人の女仙が居たが、老媪は是は汝の妻の姉であるとして紹介したので、裴航は丁寧に初對面の禮を述べると、女仙は顔に溢

る計りの笑を湛え、最早妾を忘れたのであるかと言つたので、裴航は驚いて顔を擧げて熱々視ると、豈計らんや、此仙女は即ち彼の樊夫人であつたので、彼は今更痛く羞入つて、曩の日の無禮を切りに陳謝した。後で聞けば、此仙女は名を雲翹夫人といひ、劉綱仙君の妻で、今は真人の位に列して玉皇女史となつて居らるゝとのことであつた。(樊夫人のとは劉綱の傳に精しく出て居る)

是に於て裴航夫婦は老媪に連れられて、自分達の爲めに設けられた玉峯洞中の住宅に引移り、其後は一切五穀を避けて絳雪瓊英の神丹を服して居たが、身體何時しか自然と軽くなり、毛髪も何時しか紺緑に化し、それに多くの仙術を覺え、位も追々に進められて終に上仙に叙せられた。

太和年間裴航の友人に盧顥といふ者が居て、藍橋驛の西でフト裴航に出逢つた時、裴航は己が仙道を得た來歴を精しく物語つた上、更に藍田の美玉十斤と紫府雲丹一粒とを盧顥に與へ、而して互に別るゝ時になると、裴航は故郷に残て居る親戚故舊の人々へ宛てた手紙を彼に依頼した。其時盧顥は彼の袖を控へて、君が愈、仙道を得られたからは、友達甲斐に一言の教を自分に授けて呉れと請ふと、彼は其心を虚にし、其腹を實たすといつた老子の言葉を引て、今の人々が却て

其心を實たすことに勉めて居るから得道することが出来ぬ由を告げ、更に言葉を續けて、一體人の心には妄想と云ふ者が多く有つて、而して腹からは絶えず其精液を外に漏して居るから、並大抵の者には虚實の妙理を味いて仙道の秘奥を悟ることが出来ぬ。其故普通の人々には或は不死の術とか、或は還丹の方とか、夫々適當の道が設けられて居るのだ。今それを精しく説いて聽かしてもよいが、然し君は未だそれを教はるべき時機に及んで居ないから、仙界の秘事は容易に漏らすことが出来ぬと言訖ると、其姿が忽ち掻消すやうに失せて了つた。

軒轅集

軒轅集は平生羅浮山に住んで居た。當時の人々皆彼を指して已に數百歳になつて居るかのやうに言傳へて居たが、然し彼は顔色少しも衰へず、髪長く垂れて地に届き、暗室に坐て居れば兩眼輝いて燈火の如く、其光長く曳えて數十尺の處迄達して居た。而して彼は時々程遠からぬ谷に下りて藥草を探るとがあつたが、其折には必らず龍虎が現はれて、暗に彼を護衛して居た。而して齋會などに招かるゝことがあれば、一時に十數軒から招かれても、夫れ夫

れ分身の法を行ふて其家に至り、他の客と同様に飲食してあつたが、其時には毎時も袖の下から二升入位の酒壺を取出し、それを一座の客へ夫れ／＼馳走するに酒は幾何でも湧き出て来て、曾て盡きたといふとがなかつた。

彼は元來非常な大酒家で、十斗を傾けても酔倒れるといふことは無く、そして夜になれば其長い髪を束ねて盆の上へ載せ、酒壺を枕にして寝る。又千里の遠い處に居る人でも、朱符一枚を飛して瞬間に此方の意を向へ通ずることが出来、又病人などある時には、持て居た手巾で件の病人の身體の上を撫て、摻る眞似をすると、如何な病でも即時に癒てあつた。

宣宗皇帝或日彼を朝廷へ呼寄せ、如何すれば長生することが出来るかと問尋ねられた時、彼は女色淫聲を遠ざげ、清爽したものを食べ、餘計なことに精神を勞することや、浮いた娛樂に精氣を消耗す等のことを避けて、萬事仁徳を旨として人に情を懸けて遣れば、自然と天地の大徳に感應して、堯舜禹湯の大道を身に體することが出来る、況して長生の道などは造作も無いことであると答へた。其時皇帝は一つ彼の法術を試さうと思ひ、盆の中に一羽の白鶴を隠して、此盆の中に何物が有るか、と彼に尋ねさすと、彼は聲に應じて一羽の白鶴が隠してあること

を答へたので、皇帝も大に彼が神通の宏大なるを賞讃せられて、厚く彼を待遇せられた。

軒轅集は髪黒く顔色艶かて、一寸見た處は未だ十五六歳の少年のやうであるが、其衣服が極めて疎末な物であつたので、宮人の中に密に之れを嘲笑した者が在つた。其時彼は之れを聞くと俄に變じて八九十の皺苦茶の老婆と爲り、聲を揚げて頻りに嗚咽し、如何宥めても容易に止まなかつたので、皇帝大に驚き、彼を嘲つた宮人を痛く叱つて、厚く彼に罪を詫びさせたので、彼は始めて嗚咽することを止め、再び復た舊の少年の姿に返つた。

其頃京師には断えて萱蒨荔枝の花が無かつたが、或日皇帝は種々浮世話を爲た序に、萱蒨荔枝の花が欲しいものだと言つて、軒轅集は之れを聞て御所望とあらば唯今御覽に入れようと言つて、暫時經つと、何處よりか花の咲いて居る萱蒨荔枝を持て來た。其時彼は又皇帝の前に柑子が一盤出されて居るのを見て、自分が住んで居る山にも此柑子が澤山産して、其風味特の外佳しいと話をすと、皇帝は是非少許欲しいものだと言つて、所望された。すると軒轅集は委細承知致したと答へて、ツト座を起ち、御前に在つた甌を取て其上に盤を被覆せ、暫時してから

其盤を取去ると、何時の間にか件の甌の中に柑子が一杯入つて居た。因て皇帝は試みに其中の一顆を摘んで食べて見ると、其風味が非常に良いので、皇帝は舌打鳴して賞美せられた。其時皇帝は彼に朕は此後尙幾年の壽命を得らるかかと尋ねられると、軒轅集は取敢へず筆をとつて紙に四十年と書き、傍に小さく但し十の字は一に起る(此處に一に起るとは一位)と記したのを見て、帝は此上尙四十年も長生して如何なる者かと言つて笑はれたさうである。處が皇帝は其後丁度十四年間位に在して、或日病に罹て俄に薨去になつたが、曩の日に軒轅集が四十年と書つて傍に十の字は一に起ると註したのは、即ち十四年といふ意味であつたのを、其時皇帝を初めとして左右に伺候して居た朝臣の中で、誰一人として其意を悟つた者が居なかつたのである。

其後軒轅集は皇帝に暇を乞ふて自分の棲家へ歸つて了つた。其時皇帝は中使に命じて彼を其棲家迄見送らしめると、彼は懷中から一の布囊を取り出し、其中から多少の錢を出して途々人に施しながら、頓て江陵といふ處へ到着したが、其時送人に施した錢は少なくとも數十萬を降らなかつた。然かも猶ほ錢は囊の中から無盡蔵に出て、來て曾て盡さる様子がなかつた。そして彼は自分の棲家で